
光と闇と聖なる力

ぴーまん律

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇と聖なる力

【Nコード】

N5703C

【作者名】

ぴーまん律

【あらすじ】

羊飼いの少年・ユウは、十五歳の誕生日に自分がアスカ国の人種ではないことを知らされ、紅い瞳の青年に会う。更に兄が狙われてしまい、ユウとその仲間らは村を旅立ち、ルクリアに向かうのだが。

1 プロローグ（前書き）

濃くはありませんが、ボーイズラブBL要素を多少含んでおります。ご了承ください。

1. プロローグ

世界は地上のアスカと、天界のルクリアで分けられている。

もつとも、ルクリアを見た事のある者はいないに等しい。何故なら、ルクリアは伝説に記された《天使》が住む場所と言われている人間が立ち寄れる場所ではないからだ。

【次ページ】

ユウは朝日が昇ったばかりの大草原の中、天に向かってうんと背伸びをした。兄のアマネにそれを何度も聞かされているので、少しうんざりしているのだ。

ルクリアというもう一つの世界の話をして、周りの人間は誰一人として信じてはくれないし、逆に笑われるばかりである。

それに、ここは『化学の世界』だと言っても過言ではないほど、機械類が発達している場所だ。化学で証明出来ないものはないのだ。昔からある魔術の仕組みだって、今では化学でその原理が証明されている。

ユウは自然に囲まれた山に住んでいるが、都心に行くと産業が発達している。

だが、ひとつだけ証明できないものと言えば、ユウの力だろう。アマネ以外には秘密にしているが、怪我を治す癒しの力を持っている。母親はこれを《カリユダ》だと言っていた。

母親の形見であるオカリナを吹くと、自然と羊はユウの周りに集まった。彼女に言わせると、これは《カリユダ》の力に引かれ、羊達が寄って来るようなのだ。

ただ、両親はもう亡くなったのだが。

羊飼いの家の生まれで、今日で十五歳になったばかりのユウ・ヴェラーテ・ニードイルは、兄のアマネと二人で、小さな山の中の

小屋で暮らしていた。

明るいマロンブラウンの短い髪と、綺麗で深いターコイズの瞳をしたユウは、まるで双子のようにそっくりの、ふたつ年上のアマネが作ってくれた独特の衣装を着ている。

アマネは内側にはねたショートカットで、見た目はすごく可愛らしくて綺麗な女の子だ。

女と間違えられる事は二人とも日常茶飯事で、アマネは何も気にしていなかったが、ユウは嫌で仕方ない。そのため、さらさらの髪を短く切って、少しは男の子に見えるように工夫しているのだ。

アマネも昔は嫌がっていたのだが、最近は快か不快か以外の感情を示す事はしなかった。

五年前に火事で両親を失って以来、アマネの感情は薄くなっていく。唯一彼が心を開くのは、勉強会の先生であるキラという青年だけなのだ。

ここ、アス力国のリギン村では、週に三回ほど朝から夕方にかけて勉強会が実施される。最低限の知識は身に着けるべきだと言う大人達の配慮で、身寄りのない子供達が受けられる制度　ボランティアなのだ。

今日はその勉強会はないが、キラに呼ばれているために、ユウはアマネと一緒に学校に向かう事にした。

「兄さん、今日はキラ先生が呼んでるよ！　早く食べよ」

そう言うのと、決まってアマネは形見である十字形のアクセサリーを身に着けるだけの、簡単な支度を始める。

「うん、そうだね」

毎日交代の朝食作りは、今日はアマネの当番だった。

パンに溶かしたチーズを載せただけの料理を食べた後、ミルクを飲み干して学校へと向かった。

狼などの肉食生物が進化したような魔物が山には現れる。魔物に出くわした時のために、ユウはいつも魔物避けのアイテムを持って行った。小さいアイテムなら力のないユウにも持てるし、アマネと

一緒に逃げる事も可能だからだ。

「なあ、兄さん。ホントにルクリアってあるの？」

「あるよ。ボク、ママから聞いたもん」

「そうかあ？ 母さん、そんなこと言ってたっけ」

「ほんとに、言ってたよ」

アマネは表情を作らない顔で空を見上げた。ユウもいい加減背は低いが、彼はそれよりも少し低い。

青を基調とした、ユウのと同じ十字形の模様が書かれた服を着たアマネは、伝説の《天使》を連想させるくらい綺麗だった。

ユウのはへそ出しの服で、おまけに肩まで出している露出度の高い服だ。ズボンのカボチャパンツのようなもので、その下に長いブーツを履いている。一方、アマネは肩と足以外の露出はなく、ワンピースのようなゆうのと同じデザインの服に、スパッツを穿いている。

こんな服装だから、不必要に女と間違えられる。

だが、唯一の肉親であるアマネが作ってくれた服なので、文句を言いながらもユウは着ているのだった。

勉強会に着いた時、受講者たちは既に集まっていた。

「キラさん、どうしたんですか？」

アマネは大好きなキラ・ダーティスのところへ駆け寄り、背の高い彼を見上げてまばたきをした。

キラは黒髪をしているが、光の加減によっては青色にも見える髪の色をしていて、片方の瞳はゆうやアマネと同じ、深みのある碧眼をしていて、もう片方は緑色というオッドアイだ。

彼もまた独特な服装で、やはり青が基調とされた服の上に、護身の鎧を装着している。

そんな彼はリギン村で一番頭が良く、身寄りのない子供たちにも勉強や魔術を教えている教師である。

キラは常に護身の弓を装備していて、その腕は確かだ。

弓の先には槍のような鋭い刃物がついており、それによって近距

離でも戦える仕組みになっている。

ユウもアマネについて行き、キラの話伺うことにした。

「まず最初に、ユウ。お誕生日おめでとうございます」

端正な顔をした長身のキラはソファに掛け、長い脚を組んでユウに言った。

「あ、ありがとうございます」

ユウはアマネと違ってこの教師が少し苦手なので、つい挙動不審な態度で返してしまいがちだが、嫌っている訳ではないのだ。

両親を失った時、力になってくれたのは彼であるし、アマネに少しでも楽しいと思わせてくれるのも彼なのだ。

「早速ですが、君達に伝えなければならぬ事があります」ユウとアマネを真っ直ぐに見てキラは言った。「ユウとアマネはアスカの人間ではありません」

向かい側に座ったキラは、整った顔を少しも歪めないまま、非現実的な事を口にした。

キラはそんな冗談を言う者ではない。

ユウとアマネは人間の羊飼いの息子で、確かに不思議な力を持っているのだ。

それでも、すぐに信じろと言われても、信じられない気持ちの方が強かった。

「嘘ですよ？　だって俺、人間だし」

「ユウは《カリユダ》の聖なる力を持っています。これはルクリアのレイル王家に伝わる力、なのです。他の種族にはありません」

「でも、ルクリアは伝説の天使様が住む場所なんじゃ……」

少なくとも、アマネはそう言っていた。

それに、何故キラが《カリユダ》の事を知っているのだろうか。言った覚えはないし、アマネも他人の秘密を言うようなタイプではない。

「その事を、アマネとユウに説明しようと思ったのです」ユウの斜め前に座るキラは言った。「君達は人間とのハーフですが、確かに

レイル族です。それに、僕も同じです。僕はレイル王家を守るダーティス家の末裔なので、今までそれを隠していたんですけどね」

羊飼いで農民同然の身分であるユウが、急にレイルという民族の、しかも王族だと言われても、何ひとつ信じる事は出来ない。

「キラさん、なんで隠してたんですか？」

ユウの隣りに座るアマネが、ようやく口を開いた。

確かに、今まで知っていたなら言わない方が変なのだ。

「君達の母上であるサラ様に、大人になるまでは告げないで欲しいと言われていたので。アマネとユウが大人になったので、この日を選んだのです」

「俺まだ十五になったばかりだし、どっちにしろまだ子供だよ？」

アス力での成人式は二十歳からだ。それまでは未成年だし、子供と同然の扱いを受けている。

「いえ、ルクリア人の場合は十五の姿からは成長せず、千年ほどをかけてゆっくりと老いていくので、成人は十五からなんです」

キラが言った通り、思えば彼も五年前から全く変わっていない。

しかし少年らしさはないところから、やはり本当の大人なのだということが分かる。

五年前のキラは、思い通りにならなければ他の物や人に八つ当たりし、機嫌を悪くして自分の部屋に籠っていた。

キラの場合は早くから両親を失っているが、頭が良かったために独学で魔術を修得し、五年前から既に村の全員に認められるほどの学力を身につけていた。

それでも、現在の方が冷静で、村の女性達からも憧れの的なのである。

「キラ先生！ アマネはいますか？」

勉強会の教室を使用していたからか、急に村の女性が入って来た。

「ええ、ここにいますよ。アマネがどうかしましたか？」

「旅の方が呼んでおられます！」

「そうですか……」

キラが立ち上がって弓を持った時、女性の後ろから長身の男が入って来た。

「手を掛けてすまなかったな。アマネが見つかったので、もう戻っていいぞ」

村で美形だと評判のキラと同じくらいかそれ以上の美形な男は、女性の目をうつとりとさせ、優しく不器用そうな口調でそう言った。

「は、はい！ お役に立てて光栄です」

頬を真っ赤に染めた彼女は、恥ずかしがるように小走りで教室を出て行った。

残ったのは、ユウとアマネとキラと、名前も知らない長身の若い男性。

「ボクに……なにか用ですか？」

近付こうとするアマネの手をキラが掴み、足を止める。

「ルクリア人……それもナリユエ族ですね？ アマネ様、下がって下さい。彼は貴方を狙っています」

弓を構えたキラにもお構いなしに、男はアマネに近付いて行った。キラに言われたからか、アマネも怖がり、彼の後ろに隠れている。

「すまない、自己紹介がまだだったな。俺はナリユエ族ではない……サノン族だ」

サノン族やナリユエ族と、ユウには初めて聞く単語が多い中、キラはその男との話をやめようとはしなかった。

「ですが、サノン族は金色の眼をしている筈です。それ以上アマネ様に近付けば、貴方を殺します」

はつきりとそう言ったキラは、過去に村に入ってきた強盗を弓で殺した事があり、ここで目の前の男を殺したとしても、初めての殺人とは言えないのだ。

「話を聞け。俺はハジメ・ファース・ギルウィン。サノン族のスパイだ。ナリユエ族がアマネを見つけ、狙っている事が分かったのでアスカに来たのだが……」

キラからルクリアの話聞いたばかりのこの時に、まさかルクリ

アの人間が現れるとは思ってもいなかった事だ。

キラよりも幾分か背の高い、ハジメと名乗った青年。

それも艶のある黒髪に、珍しい紅い瞳をしている。

彼の衣装は独特で、まさに貴族のような格好だ。

赤や黄色などの派手な色で着色しており、なぜか三角形が反転した模様が所々に描かれている。

「それを信じるとでも？」

しかし、キラは弓を構えるのをやめなかった。

「サノン族のギルウィン家を知らないのか？ まあどうでもいい。

早くこの村を出ろ。さもないと、アマネはさらわれるだろうな」

ユウにはハジメが嘘を言っているようには見えなかった。

だが、キラは慎重で、まったく信じられないという様子だ。

「アマネ様、窓から逃げて下さい。ユウ様はアマネ様を連れていいですね？」

妙に改まった言い方で、キラは二人にそう指示した。

「何を言っても分からないようだな さっさとこの村を出なければ、アマネが危ないんだぞ！？」

それに対し、ハジメは少し怒った様子で、腰から剣を引き抜いた。二人が睨み合う中、ユウはアマネのか細い腕を掴み、何とか教室の窓から身体を滑らせて逃げたところだった。

運動が苦手な割りに頑張って走るが、アマネの手を引いているために、そのスピードは普段よりも劣っている。

「兄さんは俺が守るから……」

唯一の肉親を失いたくない。

山まで逃げて来た時、ハジメの言った通りなのか、紅い瞳をした三人の男がユウとアマネを取り囲んだ。

逃げようとしたが、ここはやむを得ないだろう。

「兄さん、戦おう」

ユウはオカリナを吹いた。

《カリユダ》だけではなく、ユウは光の力も使える。これもやは

り稀で、なかなか目にする魔術ではないようだ。

その代わり、ユウは他の属性の魔術は使えないので、アマネは助けるように炎や氷の技を連続で出していた。

「いやあっ!」

珍しくアマネが叫ぶ。

折れそうなほど細い腕は強引に掴まれ、痛がるように高い声を上げているのだ。

「兄さん!」

助けようとアマネに近付くが、身体の軽いユウはすぐに叩き飛ばされてしまう。

このままでは、アマネはさらわれてしまう。

それどころか、もしかしたら殺されるかも知れない。何をされるのか分からないのだ。

こんな事になるなら、いくら見知らぬ青年だったと言っても、ハジメの言う事をちゃんと聞いていればよかったのだ。

その時、血飛沫が上がった。

何かと思ったユウの目には、ひたすら残酷なその光景が映し出される。

アマネの腕を掴んでいた男が殺されたのだ。

「間に合ったようだな」

剣で男を突き刺したのは、先ほどキラとやり合っていたハジメという名の青年だった。

アマネを抱きかかえ、同じ目の色をした残りの二人に切り掛かる。殺された男の身体は、次に目を移した時には既に消え去っていた。

「ハジメさん……」

ゆっくりと立ち上がったユウは、傷を負うハジメを援護するように、母の形見であるオカリナを吹いた。

聖なる曲 それはユウの中に眠っているメロディで、生まれた時から頭に埋め込まれている感覚だ。

だから、ユウが心で強く願いながら聖なる曲を奏でると、思った

相手の傷は必ず癒える。

現に、ハジメの傷はたちまち癒えていったのだ。

「特殊な回復魔法か？」

「ハジメさん。前衛と兄さんのこと、よろしく願います！」

「……分かった。すぐに終わる」

ユウは再びオカリナを吹き、ハジメとアマネの無事を祈った。
すると、どこからともなく矢が飛んでくる。

「ユウ様、僕も手伝います」

ハジメとの戦闘で少し傷を負ったキラの矢が、もう一人の首を射抜いた。

かなりグロテスクな光景だったが、焦りながらもユウはキラを回復させる。

ハジメが最後の一人を殺した事により、その戦闘は幕を閉じた。

アマネは気絶していて、無事だが顔色はかなり悪い。

「アマネ様は僕が背負います」

キラは率先して寝ているアマネを抱き上げた。

「キラ先生……」

「ユウ様、真実は教えた筈です。僕の事は呼び捨てでいいですし、敬語も使わないで下さい。僕は貴方達に仕える身ですから」

「うん、分かった」

重い気持ちでユウは歩き始めた。

すると、足元に小さな魔物が二匹、傷を負って倒れている姿が見られる。

大人になった方の一匹はもう命はないが、もう一匹は辛うじて生きている状態で、それもまだ子供である。

恐らく戦闘に巻き込まれてしまったのだろう。ユウはオカリナを吹いてそのふわふわとした生き物の傷を癒した。

ゆうは回復系のアイテムを持っていない。持っていたハンカチを傷口に当てたが、それでは止血にすらならなかったのだ。

どうすればいいのだろうと悩んだ結果、《カリユダ》の力を使う

事に決めたのだ。

「この辺りの山に生息するファウという魔物です。おとなしく頭が
いいので、人間に危害を加える事はありません」

ユウの周りを飛び跳ねるファウを見てキラは言った。

「お前は優しいんだな」

何とか怪我が治った黄色のファウを抱きかかえたゆうに、ハジメ
は戦闘の時とは別人のように微笑んだ。

「優しくなんか……ただ、この子が死ぬのが怖かっただけです」

それを優しさと呼ぶのは、少し違うと思うのだ。

ユウは聖なる力を持っているが、だからと言って特別な人間では
ない。戦えないし、ただ他人や動物の死に臆病なだけだ。

だからこそ、戸惑わずに殺すキラやハジメが少し怖い。

「そんな性格の癖に、俺がナリユエ族の奴等を殺した時、何故
止めなかった？」

急な問い掛けに戸惑った。

「結論を言えば、俺は優しくないからです。兄さんをさらおうとし
たから、怖いけど防衛だし、仕方ないかなって。この子の場合、罪
はないですよ？ だから、助けたいって思っただけです」

「……そうか」

「ごめんなさい、子供の癖に生意気で……ですから、俺を優しいい
て言うのは間違いです」

誰かに優しいと言われると、必ず否定したくなる。

アマネを助けてくれた二人に対しても、怖いと思う自分がいる。

自分の中の正義を押しつけているだけだった頃、大きな後悔をし
た。

ユウのせいでアマネは感情を失ったのだ。

「光の力は心が清らかな者にしか宿らない。お前は自信を持てばい
い」

どこか寂しそうな深紅の瞳は、ユウを真っ直ぐに見つめてそう言
った。

何となく、胸に掛かった錘がひとつ、消えていったような気がした。

「ユウ。一旦、君達の家に戻りましょう。これからの事を話し合いたい」

キラはアマネを抱えたまま、マントを翻して山の奥まで歩き始めた。

「……おまえもおいで」

母親であろうファウは死んでいる。

両親がいなくなって、頼れる者がいない時の辛さはよく分かっている。

ユウは回復させたファウを撫で、抱き締めたまま歩き出した。

ユウとアマネが住む小屋は、まるで小人が住むような家であり、家具もベッドやテーブルやイス、キッチンくらいしかなかった。両親が火事で死んでから、小さい二人の兄弟で作った家だとすれば、それでもまだ上質な出来なのだ。

客人用に二つほど予備の椅子があったため、ちょうど四人でテーブルを囲んで座ることができた。

「キラ先生、さっきの何なんだ……？」

胸の中でおとなしくユウを見上げるファウを撫でてやると、ファウという生物独特の可愛らしい鳴き声を出した。

急に敬語を使うなどと言われるくらいならまだしも、呼び名だけはさすがに変えられないユウは、先生と呼びながら対等に接するという矛盾したコミュニケーションを取っている。

「ナリユエ族です。レイル王家には代々神と交わる力があり、一番目の子供に受け継がれます。彼らの狙いはその力、《カリユダ》です。王女であったサラ様はナリユエ族から逃げ、僕の父と母を連れてアスカまで来られました」

ナリユエ族やレイル族　今まで普通の羊飼いとて過ごしてきたユウにとっては、夢から覚めていないような気持ちである。

「俺はサノン族の軍隊に所属している。それも特殊な任務で、ナリユ工族のスパイだ。病気で紅い瞳になった事が幸いだった、と言うべきか？」　ナリユ工族の企みを知ったので、真っ先にアマネを探しに来たという訳だ」

「ナリユ工族は神の力を使い、世界を滅ぼそうとしているのだと聞きましたか？」

「そうだ。理由はよく分からないが……」

難しい話を二人がする中、ユウは言った。

「要するに、その神と交わる力　兄さんが持っていると言われる力が欲しいから、ナリユ工族は襲って来たんだろ？　でも、『カリユダ』を持つてるのは俺だけだよ」

一番目の子供であるアマネは、『カリユダ』という神聖な力を持つていない。

「ナリユ工族は勘違いしている。実際、俺も『カリユダ』は『神と交わる力』以外に知らなかったからな。治癒まで出来るとは思っていなかった」

腕を組んだハジメは、懐かしそうにユウを見つめていた。

ユウにとっても、ハジメは初対面ではないような気がしていた。

「それはレイル族の一部だけが知っている事ですし、実際に神と交わるのは、本当に世界が危機に冒された時だけという決まりもあります」

「どうして、ボクらの居場所がわかったのかな？」

「それも気になるところですね……」

色々なパターンを考えてみても、とても現実とは結び付きそうにないのだ。

事実は分からないが、分かっているのは『アマネが狙われている事』だけだ。

このままりギン村にずっといたら、ナリユ工族の襲撃に他の村人が巻き込まれてしまうかも知れない。

「ユウとアマネをサノン族　アヴェ二国の陛下に会わせたいと思

う。ルクリアに行こうと思うのだが、いいか？」

サノン族はレイル族の味方をしてくれるのだろうか。

見たところ、ハジメからは敵意を感じられないし、むしろユウに對しての善意さえ感じてしまうのだ。

「僕もそれに賛成します。羊は村長さん達に預けて、明日の早朝に村を出しましょう」

キラまでがそれに賛成すると、もちろんアマネは、

「ボクもそれでいい」

ということになる。

アマネは実の弟以上にキラを大切に思っていて、ユウの知らない間に彼と遊びに行くくらいだからだ。

「……うん、分かった」

命が狙われているときに我儘は言っていられない。

それから何も言わずにファウを抱き締めた。

羽毛がふわふわして心地よかった。

「僕はアマネと一緒に、村長さんに羊を頼みにいきます。ユウとハジメさんは、明日の準備をしていて下さい」

そう言つと、アキラはアマネを連れ、小屋を離れようとした。

「まっ、待つてよ、俺も……」

ユウも急いで出ようとしたが、二人に置いて行かれてしまい、茫然として再びイスに座り込んだ。

ハジメと二人きりなんて、こんなに気まずい状況は他にないだろう。ユウは彼を少し怖いと思っているのだ。

ファウをテーブルの上に座らせる。

気を取り直し、立ち上がって荷物をまとめようとするが、ハジメがずっと見ているので集中出来なかった。

「……何、ですか？」

「いや、可愛いと思った」

「小さくて可愛い男の子が好きなら、俺じゃなくてももっといますよ」

皮肉たっぷりにそう言った。

男で男が好きな人にはろくな人間がいなかった。今までの人生の中、どれだけ危ない目に遭っただろうか。

それに、「可愛い」と言われると「女みたい」と言われているようで、必死に否定したくなるのだ。

突き放すようにそう言った。

「そんな風に見えるか？」

立ち上がってユウのそばに近づく彼とは、身長之差が歴然としている。

神様はなんて不公平なんだろう。

ハジメは顔が整っていて、ユウがなりたかったような容姿すべてを兼ね揃えている。おまけにすごく強いのだ。

羨ましいが、それだけで好感が持てるとは限らない。

「俺、そういうの嫌です」

大きな鞆にあるだけのアイテムを詰め、魔物避けのアイテム《エボイブ》が、数を切らしていたことをその時になって確認した。

複雑な気持ちだ。どうしてあの時、ハジメはユウに『優しい』と言ったのだろう。

「無理矢理でもいいのだぞ？ 例えば」

顎を持ち上げられ、親指の腹で唇を撫でられる。

くすぐったく感じ、肩を竦めるが、それ以上に恐怖心の方が大きかった。

今から何をされるのだろうか。

「やだっ！」

言ったか言わないかの境目だった。

ハジメの手はユウから離れ、テーブルの上にいたファウの姿は消えていた。

見ると、黄色い羽の塊をユウの足元で動かし、可愛らしく見上げてくる名前のないファウと、足を噛まれて痛がるハジメの姿があった。

ユウはファウを抱きかかえ、黄色い羽を撫でてやる。

「冗談のつもりだったんだが……」

見た目とは違った変わったところに、先ほどの彼への緊張感
はほぐれていく。

「きゅう！」

ファウはそんなハジメに怒っているのか、威嚇の声を出し、まるで「近付くな」と言っているようだった。

気が付くと、そんなハジメとファウを見て、ユウは笑っていた。

両親を失った事への心の傷は深く、心から笑う事は出来なかった。
アマネとの違いは、愛想笑いが出来るか出来ないくらいだ。

そうしていると、ハジメに頭を撫でられた。

「お前、やっと笑ったな」

見上げると、優しく微笑んだ青年がいた。

けれども、ファウの威嚇は続く。

「ハジメさん、もしかして俺のこと……」

心配してくれたのだろうか。

ユウが笑わなかったから？ でも、アマネだって笑わないのに。

「その……上手くは言えんが、初めて見た時から少し気になって
いたんだ。許してくれ」

きつと、ハジメは不器用な人なんだ　そう思う事で、不安な
持ちは消えた。

きつとユウを気遣って、少しでも笑わせようとしたからあんな
行動に出たのだ。

それに答えるように笑って見せた。

「俺こそ、皮肉ってごめんなさい」

威嚇するファウを撫でながら、敵意のひとつも感じられないハジ
メを見つめる。

「そんなに見つめるな……キスしたくなる」

「俺は男です！」

「じ、冗談だ。無視しないでくれ！」

ふてくされたふりをして荷物まとめの作業に戻ったが、あの強くて冷酷なイメージを与えたハジメが、こんなにも変わった人物だとは思ってもいなかった。

顔が少し熱い気がする。きっと少し笑ったせいだろう。

ふと、ファウに名前を付けていない事を思い出す。

「そう言えば、おまえもついてくるの？」

鞆のファスナーを締め、ファウを抱き上げて首を傾げてみる。

ユウが言った言葉が少しでも分かるのか、彼は黄色い羽毛に埋まる頭を上下させ、嬉しそうに鳴いた。

「きゅっ！」

「そっか。じゃあ、名前付けてやるよ」

ペットのような感覚で、ファウを胸に抱き寄せる。

「おまえは『パプリカ』だ」

頬擦りをする、嬉しそうにパプリカは鳴く。それが可愛くて、

ユウは何度も撫でてやった。

すると、ハジメがパプリカの嘴を指で弾き、意地悪そうに言った。

「この野郎、ユウにだけはいい顔しやがって……」

「きゅっ！」

「痛っ……待て、この！」

ハジメの指を噛んだパプリカは、ユウの腕から飛び出して逃げ回った。

『クールで何を考えているのか分からない人』というイメージは取り消し。

パプリカと同等に走り回るハジメは、本当に子供のようなだ。

半ば呆れながらも、ユウはそんな彼に元気づけられていた。

そうしていると、キラとアマネは小屋に帰って来た。

「何してるんですか、ファウ相手に追い掛け回して」

扉を開けた途端、180センチ以上もある男が、30センチくらいしかない小さな生物を追い掛けている光景が目に入ると、何とも言えない気持ちになるのも無理はないだろう。

キラはアマネが入ってきたのを確認すると、呆れたように扉を締めた。

「何でもない。それより、準備は出来たのか？」

我に返ったのか、誤魔化すように追い掛けるのを冷静にやめ、話題を変えた。

「ええ。ここの羊たちは村長さんが預かってくれるそうです」

平然とした返事が返ってくる。

こんな風に事前の異様な出来事を無視して会話を続けられるのは、やはりキラが大人だからだろうか。

一方で、アマネはキラの袖を引き、ハジメをじつと見つめている。

「ユウ。かなり急だが、明日からは旅になる。いいか？」

ハジメは再び確認するように問い、ユウの答えを待った。

レイル王家に伝わる《カリユダ》を、どんな種族であっても渡す訳にはいかないのだ。

今までレイル族だという自覚はなかったが、ユウは強くそう思った。

神様がそれらを与えてくれた理由は、きっとレイル族は中立な存在だからなのだ。

そうでなければ、私利私欲のために神の力を使う種族に、そんな力を与える筈がないだろう。

「俺はだいじょうぶです」

「無理、してないか？」

「してませんよ、そんなの」

心配されるのは嫌なので笑って言ったが、故郷を離れる現実と向き合うのは寂しかった。

ユウは荷物でいっぱいになった重い鞆を持ち上げ、誰かが蹴ったり躓いたりしない部屋の隅を選び、そこに置いた。

そんな動作をしたのも、感情を誤魔化すためだったのだが。

「キラ、村長にはどんな説明をしてきた？」

ルクリア人に狙われていると言っても、村長や周りのアスカ人は

信じてくれないだろう。

気になっていた事を代わりに訊いてくれた感覚だ。

「先程も言ったように、レイル族の僕達は村でも特に頭が良い。それを理由に、首都ハイムルの教育を受けに行く　　というのを理由にさせて戴きました」

確かに、勉強会でしか学んでないユウとアマネは、普通に学校に通っている生徒達よりも成績が良いのだ。

首都ハイムルの大学の噂は耳にしたことはあるが、この村で学ぶ最低限の知識ではなく、もっと専門的な事を学習するようなのだ。

例えば、キラは炎と氷の矢を作り、風の力で飛ばす。これは彼が独学で学んだ、凡人には難問な魔術である。

アマネが同じように炎や氷の力を操るのは、いつも一緒にいるキラから習った技なのだ。

「そうか。アスカの人間の大半はルクリアを知らないからな。妥当な言い訳だ」

ニヤリと笑ったハジメは、キラを褒めた。

彼を褒めるとんでもない事になるとも知らず　　。

「さすが僕ですね。やはり十年に一度の逸材と言われるだけありますよ」

彼を褒めると、不必要にナルシストっぷりを発揮する。

彼の性格という事情を知っているユウは絶対に褒める事はしないのだが、初対面のハジメはそれを知らないので、無意識に言った言葉に反応されて目を点にしていた。

「キラさん、みんながひいてる……」

そういう時は、アマネの一言によって、

「も、申し訳ありません、アマネ様」

と、まるで人が変わったように我に返るのだ。

ユウとアマネよりも本当の兄弟らしい二人は、見たところお互いを大切にしているといった様子だ。

アマネ以外に大切な存在がないユウは、逆に羨ましくも思える。

（もう夜か……）

旅に出ると、色々な魔物と戦う事になるかも知れない。
明日に備え、四人はその小屋で一晩を過ごす事にした。

2・呪われた貴族

ハジメと出会ってから次の日の早朝、四人は荷物を持って旅に出た。

しかし、幌馬車を走らせる技術も金もないので、歩き旅になる。いくら近いと言っても、リギン村から歩いて首都ハイムルへ行くとなると、最低一ヶ月は掛かるのだ。

それも身体の弱いアマネが同行しているものだから、通過点であるリギン村を北西に行った、グロウスの森までに着くのも一苦労だった。

「アマネは身体が弱いのか？」

「ええ。僕はアマネ様が生まれてからずっと知っていますが、小さい頃は特に病気がちでした」

「しかし、お前一人ですとおぶって歩くのは大変だろう？ 俺が変わってやろうか」

アマネが少しでも疲れたと言えば、過保護なキラは必ず背負って歩いてしたが、ここ一週間ほどはその継続である。

このままでは、キラの身がもたないと思うのだ。

何と言っても、この早朝から背負っているくらいなのだ。いくら軽いとは言え、負担も大きくなってしまう。

「いえ、大丈夫です。アマネ様は軽いですし、僕がサラ様と父上に任されたのですから、責任を持つてお守りします」

最近になってようやくキラがアマネを気遣う理由が分かったが、それでも彼のユウへの接し方より、アマネへの接し方の方が慎重だ。どうしてかは分からないが、それでもユウは良かった。

アマネもキラも二人でいる事に幸せを感じているようで、微笑ましい兄弟のように見えるからだ。

ただ、少しだけ寂しさが残ってしまうのだが。
「キラさん、ごめんね。もう歩けるから。ボク、だいじょうぶだか

ら」

「アマネ様、無理はいけません」

どちらかと言うと、少し強引にそうさせているのはキラの方だ。グロウスの森には初めて足を踏み入れたが、やはり人が通るだけあって、綺麗に整備されている。

魔物は多いが、そこまで強いものではないので、ハジメとキラの力で十分に対抗が出来た。

木々が生い茂る中を見ると、人が倒れているのが分かった。

「ねえ、あそこ！」

ユウは指を差して男性が倒れているのを知らせ、素早い足取りで近寄ったが、運動神経が鈍いためにこけてしまった。

「大丈夫だ。息はあるし、脈も正常だ」

ハジメが確認すると、ユウは咄嗟にオカリナを取り出した。

切り株の近くの、人目に付きにくい場所に横たわっている彼は、何ヶ所かに怪我を負っている。

メロディを奏でると、その傷はたちまち癒えていき、青年は目をゆっくりと開いて起き上がった。

「んー、ここどこ？ まさか天国とか？」

淡い水色の髪をした青年は、髪と同じ色の目をユウに向けてだるそうに言った。

体術でも身に着けているのか、腰には黒い帯を巻いた服装で、額には赤い鉢巻きを結んでいる。

腕に純金の腕輪をつけているところから、金持ちの家の息子だということが推測される。

「ここはグロウスの森です」

「ふーん、そう。アレ？ 俺、確か親父にスタンデに連れてかれたんだけどな……」

「スタンデシティ、ですか」

ユウは生まれて初めて旅に出たために知らないが、地理の授業で習っているので、大体の場所は予測できる。

スタンデシティはリギン村の南にあるデサルト砂漠を超えた、更に南にある街だ。色々な技術の研究が盛んな街だと聞く。

「記憶が飛んでるみてえだ。助けてくれてありがとな。悪いけど、スタンデシティに戻るよ」

そう言いながら、青年ははめていた腕輪を外した。

「これやるよ。礼って言っちゃ安っぽいけど、純金製だからそれなりに高い筈だぜ？」

この青年は何者なのだろうか。

青年と言うには少しばかり幼く、それでも純金製の高価な腕輪を易々と他人に渡すくらいで、それさえも安っぽいと言った。

「待って下さい。森は魔物がいるので、幌馬車かベヒケルを使った方がいいですけど……見たところ、それもないようですよ」

キラが引き止めるように言った。

首都のハイムルと交わるにはこの森を通らなければならないので、人々は普通、幌馬車かベヒケルという乗り物を使って森や砂漠を渡る。アス力での常識だ。

「あー、うん、いいって。魔物くらいなら大丈夫だし、アス力流体術の免許皆伝だし」

頭の後ろで腕を組み、青年は得意げに笑った。

「貴方は貴族の方ですか？ 金銭感覚がずれていますし、その髪の色は確か……」

「おう。メリア家の末っ子、カイ・メリアだぜ」

その名を聞いてピンとくるのは、アス力に住んでいた三人だけだ。

「メリア家？ 貴族か？」

ルクリアに住んでいたハジメにとっては、アス力の事など知る由もないだろう。

「メリア家……大臣で、代々陛下の補佐をしている家系。キラさん、それでいいんだよね？」

キラにおぶられたアマネは、確認するように首を傾げた。

「そうです。メリア家は代々水色の髪をした子供が生まれると聞い

ています。しかし、貴族様を一人で行かせる訳にはいきませんね……」

キラを含めたメンバーが悩む中、アマネが言った。

「僕、先にカイ様を送って行ってもいいよ。何とか戦えるようになるから」

降ろして、とキラに言ったアマネは、ふらふらしながらカイの前まで歩いて行く。

「ですが、ハジメさんは……」

ハジメをちらりと見、気を遣うようにキラは言った。

「ルクリアへは急ぐ事もないし、敵が襲って来たら俺が守ってやる……但し、俺はユウの意見を尊重したいが」

「お、俺？ 俺は構わないけど」

「それなら、俺もそれでいい」

ハジメはユウの頭に軽く手を載せ、微笑んでそう言った。

「つかさ、お前ら何なの？ 見たところ、長身の強そうな男二人が、ファウ抱いてなよなよしてる男と病弱そうな女守って旅してるように見えるんだけど」

うさん臭そうにカイは言った。

ファウを抱いている男とは、もしかしたらゆうの事だろうか。

「俺、男に見えますか！？」

今までは、初対面の人間に女に間違えられなかった事はなかった。しかし、パプリカという名のファウを抱いているのは、この中にはユウしかない。

「おう。まあ……髪短いし？ ってか、俺の質問に答えろよ。まさか暗殺者とか……じゃねえよな？」

独特な武道の構えをして後退りをする。

「メリア様、僕達は」

この中で一番まともな大人だと思われるキラは、必死にカイに事情を説明した。

ルクリアとかレイル族だと言っても、アスカの人間である彼が信

じてくれるかどうかは疑問だ。

構えたままのカイからは、熱気が漂ってくる。

変だ。魔術を使える人間は少なく、かなりの技術や才能がないと出来ない筈なのに、まさか貴族のカイが？

「身体が熱い……なんだったつけ。ルクリア……そうだ。親父がトワイライト陛下を騙そうとしているんだ……」

熱気を帯びたカイは頭を抱え、その場に座り込んでそう語った。

トワイライト陛下とは、アスカ国の王女の事を指す。アスカ国は特別な魔法を使う女性が王位に立つ事があり、魔法で政治を進めて行くのだ。

だから、この国には身分の高い低いは若干あるものの、人種差別や戦争は起こらないのだ。

「大丈夫ですか？」

ユウはパプリカを放してカイに近付いた。熱気が尋常ではない。

しかし、急に立ち上がったカイに殴り飛ばされた。

「うあっ！」

「きゅううう？」

地面に顔を叩き付けられると同時に、パプリカが小さな足で駆け付け、心配そうな声で鳴いた。

拳がぶつかっただのは頼だったが、そこが軽度の火傷を負っていることに気付く。

「俺を殺せ……頼む。そして、トワイライト陛下に……シアン・メリアが裏切ったと……」

口では冷静にそんなことを言ったカイだが、身体は暴走するようにユウを狙った。

「ユウ、俺の後ろで頼む」

物理攻撃が出来ないユウは、パプリカを抱いてハジメの後ろへ逃げ込んだ。

こんなとき、ユウも何か使えればいいのに　そう思いながら、オカリナを吹いて火傷を回復させた。

「ハジメさん、殺さないようにできますか？」

「気絶させるのか。暴走しているので少し難問だが、出来なくはない。やってみる」

「ありがとう、ハジメさん……」

大きな剣を振るハジメに、素手でカイは抵抗している。それも炎を纏った拳で戦っているの、いくら強いと言えど、ハジメも苦戦している。

キラも氷の矢を使ってカイを鎮めさせようと試みたが、カイの身体に命中する前に氷は溶けてしまった。

炎技と風技を使っても効果はないので、氷と炎と風を使うアキラとアマネは戦力外と化す。

アキラは前衛でもうまく行けるものの、アマネは後衛で何度も氷技を出し、少しは体温を下げようとするので必死である。

ユウはと言うと、パプリカに攻撃が当たらないように避けながら、残りの三人を守る術を繰り返し使っていた。

「やったか……？」

戦闘が始まって何分か経ち、漸くハジメはカイに傷を負わす事が出来たが、それでも彼の暴走はおさまらず、先ほどまではあった理性も消えていた。

「まだのようです。どうやら彼は、死ぬまで戦い続ける呪いを掛けられているようです」

呪いという術があるのは聞いた事があるが、それは悪い魔物に掛ける一種のおまじないであり、決して人間には掛けてはいけない禁忌の術だ。

「キラ、解呪方法は!？」

「分かりません。確認するには、彼におとなしくなって貰わなくては……」

元々前衛のハジメと、前衛にならざるを得なかったキラがそんな会話を交わしながら、カイの暴走を食い止めている。

途端、ユウの腕の中でパプリカが暴れ出した。

「きゅっ、きゅきゅうつ！」

急に辺りが暗くなつたと思うと、にわか雨が降り始めたようだ。雷が鳴るのを予知し、それに怯えてパプリカは暴れたのだ。ファウという生物は臆病なので、それも仕方ないだろう。

「ひいっ！」

パプリカを抱き締め、苦手な雷にゆうは震えた。

土砂降りになっていく雨の中、カイを見ると、座り込んで一言だけ呟いた。

「そうだ、あの時も、雨だったな……」

思い出すように笑い、彼は雨に濡れた地面に身体を倒した。

「殺したの！？」

「いや、気絶しました。息があります……ですが、そう長くはないでしょう。呪いは簡単に解けそうにないです。酷ですが、このまま生きていても苦痛になるだけでしょう」

「そっか」

キラは頭が良い。決して悪い人物ではないが、そういう気持ちの整理は早くついてしまうようだ。

倒れたカイの身体を起き上げらせようとするも、ユウの力ではその巨体を動かす事は出来なかった。

「ユウ、何をしている？ そいつはもう……」

剣を鞘に収めたハジメが、立っているだけのアマネと、それを木の下に誘導するキラを横目で見て言った。

「探せば解呪方法も見つかるかも知れないから、諦めたくないよ！」

心配したパプリカは、雨に打たれて羽毛が濡れていた。

「ユウ、分かってあげなさい。彼は生きていても助かりません！それは偽善でしかありませんよ！」

「ユウ。メリアさまのためにできることは、ハイムルでちゃんとトワイライト陛下に伝えることだよ」

アキラとアマネは口を揃えてゆうの行動を否定する。

長い間一緒にいたから、考え方の違いくらいは分かっている。

偽善だと分かっている、目の前で人間が死ぬのはなるべく見たくなかった。カイに罪はないのだ。

雨が酷くなつたと同時に、今までは重くて持ち上げられなかったカイの身体が軽くなつた。

「ハジメさん……」

「俺もお前に付き合わせてもらつてもいいか？」

「はっ、はいっ！」

ハジメと一緒に抱えたカイの体温は、雨に打たれながらもまだ温かかった。

「まったく、お人好しなんですから……」

キラは呆れるようにそう言ったが、それ以上は引き止めようとはしなかった。

木の下まで行くと、雨がまったく降らない訳ではないが、何とか過ごせる少量で済んだ。

ユウはそこにカイを寝かせ、オカリナを吹いた。

何とか命は助かりそうだ。

「出来の悪い俺は、スタンデシティに連れて行かれて、ルクリア人のように改造された。本当なら一億分の一の確率でしか成功しない実験なんだが、失敗したと思われて捨てられたみたいだな」

数時間後、起きて平常心に戻つたカイから事情を聞くことが出来た。

「シアン様が裏切つたとは、どういう事ですか？」

「ルクリアとアスカが交わるのは、百年戦争があつてから禁じられてるんだ。ルクリアの事も一般人には教えないようになってるし、百年の間にルクリア関連の歴史書も全部撤収した」

「それは僕も薄々勘付いていました。アスカの人々はルクリアを知らないので……」

「でも、親父はトワイライト陛下を裏切つて、あるルクリア人と契約したんだ。ルクリアの王抹殺に手を貸すから、アスカを自分の物

にするってな」

聞くだけで偉い人として情けない事情だ。

ルクリアのある人物が誰なのか分かれればいいのだが、さすがにカイもそこまでは知らないようだ。

「それじゃ、リギン村を通り過ぎて、デサルト砂漠に行かなきゃならないよなあ」

ユウはそれまでにアマネの体力が持つのか心配だった。

「ボクはだいじょうぶだよ」

笑いはしないものの、アマネからは心配掛けまいと努力している姿が見受けられる。

「すまないな。出発しよつか。あ、俺はカイでいいし、堅苦しい敬語も使うなよ。もう親父は倒さなきゃいけない存在なんだしさ……」

カイは困ったように笑ったが、本当のところは辛そうだった。

あの時は善意だった筈が、また人を傷付ける原因になるのだろうか。

「きゅう……」

「パプリカも寂しいよな。おまえも母さんを亡くしちゃったんだから……ごめんな」

寂しそうに鳴くパプリカを抱き締め、ユウは他の四人に続いて歩いた。

「そう言えば、百年戦争って何なんだ？」

ユウはそれをキラに訊こうとしたのだが、隣りにいたハジメが先に答えた。

「百年前に終結した、ルクリアとアスカ 正式にはサノン族とアスカ人との戦争だ。魔法と化学のぶつかり合いで、世界は崩落の危機を迎えていた」

戦争を経験した事がないユウにとっては、その莫大な被害が想像もつかないほどに恐ろしいものだった。

「それは、どうして終わったんですか？」

戦争の終わりには理由がある。

例えば、どちらかが負けるとか、降参するとか。

人を大量に殺しておいて、そんな単純な仕組みで終わる戦争なんて馬鹿げている。やらない方がいいのだ。

「一人のレイル族が神と交わる事で、その戦争と世界の乱れは治まった。それからはレイル族の手を借りてルクリアとアス力はお互いに不可侵条約を結び、特に戦争で不利だったアス力では王女を立て、王族や貴族しかその真実を知ってはいけない事にされている」

ハジメはそれだけ言い、再び黙り込んだ。

何日もハジメと一緒に旅をしているユウにとって、彼は敵には容赦のない冷酷な青年に見え、クールで何を考えているか分からない人間なのだ。

嫌いな訳ではないが、心のどこかで苦手だと思っている。

「そう、ですか」

ふと思った。

もし世界が乱れた時、神と交わらなければならないのは、紛れもなく自分なのだ。

アマネには《カリユダ》の力が確認されないとすると、世界の運命はユウに任されたも同然になる。

「……………」

ハジメがユウを見つめてくる。

紅い瞳は綺麗で、どこまでも自分の弱さを見透かれそうだと。

（何で……）

ただ単に、見つめられるのが怖かった。

ユウが苦手意識を一方的に持っているだけだと言いついて聞かせていながら、ハジメが自分を嫌っているのが分かってしまう。

ユウは戦闘でも役に立たないし、《カリユダ》の力以外は必要とされていない。

「きゆう……？」

気持ちを察してか、胸の中のパプリカが心配そうにユウを見上げた。

「ごめんな、心配かけて……何でもないから……」

笑ってパプリカを撫でてやったが、精神的に落ち着く事は不可能だった。

親のファウを失った彼は、ユウ達を恨んでいるのではないだろうか。勝手に生き返らせて、必要以上に辛い思いをさせてしまっているかも知れない。

カイだって、死ぬ事を希望したのに。

自分が善意だと思っている事が、後に誰かを不幸にしてしまう事を考えてしまうと、それだけで居ても立ってもいらなくなる。

五年前、両親が死んだ本当の理由を、ユウは未だに誰にも言っていない。唯一の肉親のアマネや、信用出来るキラから突き放されるのが怖くて言えなかった。

確かに死因は火事だったが、ユウのせいでもあった。

両親を間接的に殺してしまってから、善意だと思つて突発的に行動した後、後悔してしまう事も多くなった。

他人の気持ちを知らないのが怖い。

「ユウってお人好しだよな」

暗くなっていると、急にカイが笑つて言つて来た。

「そうかも知れないけど、それが人を傷付けてしまう原因になるんだよな。肉体的にも、精神的にも」

フレンドリーなカイは、敬語を使うと言われたのもあり、普通の友達として接する事が出来た。

今まで同年代の友達がいなかったからか、新鮮な気持ちで彼と話す。

「そうか？ でも、ユウはそのままでもいいと思うぜ。俺、ホントは死にたくなかったから……最後に会いたいヤツ、いたからさ」

本心かどうか分からない。ユウが辛気臭い顔をしているから、カイが気を遣つて言ってくれた事かも知れないのだ。

しかし、その言葉にユウは微笑む事が出来た。

「うん、ありがとう」

パプリカは可愛らしく鳴いたが、咄嗟にユウは抱く腕の力を強めた。

「おまえはどう？ 俺のこと、嫌いじゃない？」

「きゅうつっ！」

ユウの必死の問い掛けは魔物のパプリカの耳には届かず、ただ苦しがるだけだった。

「く、苦しいかな。ごめんな……」

キラとアマネの仲が実の兄弟以上にいいから、少し嫉妬してしまっているのだ。

ここ何年か、誰かに本気で愛されてみたいと思ってきたから、誰かに少しでも嫌われるだけで臆病になってしまう。

何も手放したくないのに、ただ幸せに暮らしたいだけなのに、どうしてそれを許してくれないのだろうか。

自己中心的で幼稚な自分を嫌悪する。

日が暮れ、夜になっても寝付けなかった。

何かを助けてしまう度に、ユウは臆病になり、考え込んで眠れなくなる。

カイはいいと言ってくれたが、裏切るような人間ではないだろうが、それでも彼を後悔させてしまっていたらどうしようかと思うのだ。

胸に抱いたパプリカはぐっすりと眠っている。

眠れないから、と身体を起こした。

「ユウ」

名前を呼ばれ、喉から心臓が飛び出してしまいそうなほど、驚いて肩を震わせた。

「ハジメさん……」

夜の見張りをしてくれているハジメだった。

彼はキラやカイと交代で見張りをしてくれているのだが、まさか話し掛けられるとは思っていなかったのだ。

「眠れんか？」

「は、はい」

「では、隣に來い」

鋭い目で見つめられるので、断る事は出来ないし、そこに行く途中も緊張して足が纏れてしまった。

ハジメの隣は落ち着けるどころか、心臓が高鳴って余計に眠れなくなる。

『苦手』の対象だからか、少し怖いという気持ちの方が大きい。

もちろん、助けてくれる事には感謝しているのだが、どうにもその冷酷な瞳が怖くて、なかなかうまく接する事が出来ないのだ。

「っ……!？」

ハジメが頭に手を置いてきたので、高鳴る心臓が一瞬だけ更に激しくなった。

「お前、俺が嫌いかな？ 明らかに避けてるだろ」

顔は見えなかったが、いつものハジメらしくなかった。

いつもの彼は冷酷で、何にも動じずに敵を切り付けるし、戸惑わずに殺す事も出来る。

しかし、ユウはそれを否定した。

「避けてはいけませんし、嫌いじゃない……でも、ちょっと怖いですが、目が紅いからか？」

「そうじゃなくて……敵を簡単に殺しちゃうから」

それが魔物であっても、ただの盗賊であっても、だ。

そう言っただけで傷付けてしまったかと思ひ見上げるが、そんな様子はなくハジメは笑った。

「純粹だな。俺は軍人だが、お前は殺す事に慣れたら駄目だ。そのままでもいい」

ハジメは頭に置いた手を動かし、ユウの頭を撫でた。

よく分からないが、彼もユウに気を遣ってくれている気がする。

それは嬉しいが、やはり足手纏いだからだろうか。

「……ハジメさんは家族とかいないんですか？」

少し気まずかったから話題を変えた。

「いた。母さんは俺が生まれてすぐに死に、父さんは行方不明だ。残った姉さんも暴力を受けて殺された」

瞳に宿る寂しさの意味が少し分かった。

ハジメは「暴力」とオブラートに包んだ言い方をしたが、ある程度の年齢を経たユウには本当の理由が分かったのだ。

ハジメはユウに似ている。

一人か一人じゃないかの違いだ。

もしもアマネがハジメの姉と同じ理由で殺されたなら、ユウは立ち直る事が出来なかっただろう。

「それって、ハジメさんやお姉さんにとって、一番辛い殺され方ですよ……無神経なこと聞いて、ごめんなさい」

「いいんだ。もつと子供かと思ったが、そうでもないようだ。本当の意味が分かったんだな？」

「……はい」

考えただけで胸が苦しくなる。

ハジメがこんな話をキラにしたのも見た事がない。

ユウだけに言おうとしたのか、それとも偶然ユウに言ったただけなのか、真相はよく分からないままだった。

「歳はいくつだ？」

思えば、まだお互いの年齢も知らない仲なのに。

「ハジメさんと会った日に、十五になりました。ハジメさんは？」
ルクリア人は十五で成長が止まる。

だとすると、ハジメが百年以上生きているという可能性も、否定出来なくはないのだ。

「お前よりちょうど十歳上だ」

「十歳も？」

驚きを隠せなかった。

確かにハジメはキラよりも背が高いし、大人っぽい雰囲気がある。しかし、二十五歳のアスカ人よりも若く見えるのは、やはり十五の時から変わっていないからだだろうか。

少し羨ましい気がする。

「お前は姉さんに似ている……もう少しお前を知りたいんだ」

その時、秘密にしていた事を言いたくなかった。

「……じゃあ、俺の秘密、聞いてくれますか？ 兄さんにもキラさんにも、言えなかったことです」

もうどうにでもなればいい。

心の中にしまっておくのが苦痛になったのだ。

「俺でいいのなら、何でも聞いてやる」

キラとアマネが寝ているのを確認したハジメは、ユウの頭に載せた手を肩まで滑らせて言った。

甘えるように肩に頭を傾ける。

こんな風に寄り添って、恋人や家族、友達でもいいから、星を観る事が出来たらいいのに 両親が死んでからそんな事を考えていた。

その希望を最初に叶えた相手がハジメだとは、出会った瞬間には予想出来なかった事だ。

「父さんと母さんを殺したの、俺なんです」

「……………」

冒頭だけ言ったら、普通の人ならユウから離れようとするだろう。けれども、ハジメはそんな事はしなかった。

ただ黙って聞いてくれる。軽蔑の眼差しは皆無だ。そつと肩を叩いてくれて、元気さえ与えてくれる。

「五年前、兄さんはその時いなかったけど……山で子供が倒れてたから、治療して家まで連れて帰りました。薄紫の髪した、クラーलって言ったかな……それから兄さんのところへ遊びに行ったんです」
その頃の状況が鮮明に脳裏に焼き付いている。

あの日は夏の晴れた日だった。

アマネはユウより早く起き、キラの家に遊びに行っていたので、それを追い掛けて村に降りて行く途中だった。

その日はいつもと違う道を通り、途中で人が倒れているのを発見

した。

山で倒れていた人物は薄紫色の髪をしていて、目の色ははっきりと見ていなかったが、腰まである長い髪が印象深い、当時のユウよりも小さな少年だった。

名前を訊いたが、『クラール』とだけ名乗り、両親はいないと言っていた。

クラールを《カリユダ》の力で治療したユウは、一度家に帰って両親に彼を預け、再びアマネを追い掛けて村へと走って行ったのだ。「俺達が帰った頃には、家はもう灰になっていました。村の大人が何人で掛かってても遅くて……残ったのは兄さんが持つてる十字架と、俺のオカリナだけでした」

それを見たアマネは泣き崩れ、一瞬にして感情を失った。

「その後、『火事が発見される直前、紫色の髪をした子供が逃げに行った』って目撃した人がいました」

だから、人を助けるのは後になって少し後悔してしまうし、身内を傷付けようとする者が現れたあの日、ナリユエ族が死ぬのを震えながら見ているしか出来なかったのだ。

一部始終をハジメに話した。

「つまり、そのクラールという子供が放火したのか？」

「いや、確証はないです。もしかしたら事故でクラールが火を起こして、小さかったから怖くなって逃げたのかも知れませんし……でも、どちらにしても俺のせいです」

あの時アマネと遊ぶ事を考えず、せめて怪我を負っていたクラールを見ていたなら、きっと両親は死なずに済んだ。

だが、ユウの言った仮説は有り得ないのだ。事故を起こすような火の設備はなかったし、遺品が何一つ残らないで消え去る強い炎は、魔術を使うくらいしか考えられない。

母は《カリユダ》を使っていたがそれだけで、父は魔術は皆無だった。

だから、疑うべきは倒れていたクラールなのだ。

どちらにせよ、幼いクラルルを見ていなかったユウが悪い。今となつては後悔するばかりである。

「最初にも言つたが、お前は優しいじゃないか」

ハジメはそれだけ言つて、深紅の瞳を細めた。

「俺のどこが……」

両親の死が未だに納得出来ず、確信もないのに少年を疑う者のどこが優しいのだろう。

「俺は姉さんが殺された時、殺した奴を恨んだ。我儘を言つた自分の事は棚に上げて、な。それでもユウはクラルルを恨んでないだろ？」

「だけど、俺は臆病です。クラルルが怖い……それに、些細なことで嫉妬だってします」

確かにクラルルを恨んではないけど、彼に恐怖しているのは間違いない。

それを引き摺っていたり、アマネとキラの仲の良さを羨ましがったり、ちつとも優しい人ではないのに。

満月の夜、明るい月に照らされている漆黒の髪が、ユウの白い頬を掠つた。

「……キラとアマネか？」

肩を抱かれるだけではなく、今度は面と向かつて抱き締められた。お互いの顔は見えないけれど、さっきよりも近い。ユウは温かい体温に浸り、肩に顔をうずめた。

ハジメには全てお見通しのように思えたからだ。

「あの二人、すごく仲いいから。兄さんにとつて、弟の俺なんかよ
り、キラ先生の方が大切なのかなって考えると」

キラ自体は好きだ。頼りになるし、いつもユウ達兄弟を助けてくれる。今回の旅にだって、家のしきたりがどうであれ、自らついて来てくれた。

嫉妬してしまう自分が嫌いだ。

「アマネは両親がいなくなつて、甘える相手が欲しかったんだろう。」

キラも同様、心の支えが欲しかった」

ハジメの言う通りだ。ユウは二人には必要なかった。

「そうです。俺は甘える相手にもなれないし、心の支えにもなれないから……優しくなんかいいですよ」

苦笑しか出来なくなり、情けない顔をハジメに見せたくはないので、今のままの体勢がちょうどいい。

「では、俺の甘える相手や心の支えがお前だとすれば？」

「それは、ないです」

「いや、ユウと会ってから少し楽しい。何故だろうな……お前を見ていると姉さんを思い出す」

先ほども口走った言葉だが、ハジメはユウに姉を重ねているようだ。

少しだけ気持ち became になった。ハジメと話すと、過去の事を引き摺らずに済むような気さえした。

大好きな人と面影を重ねているのであっても、優しくしてくれる事には変わらない。

姉に甘えたい気持ちはあってもいいだろう。ハジメは十歳も年上だけど、幼い頃に家族を失っているのだから。

ユウの顔を見まいとしたのは、きっと姉と姿を重ねてしまい、当時の情景を思い出してしまいそうだったからだろう。

ハジメは強い。だけど、それ以上に辛い過去がある。きっとユウ以上に辛く、ユウ以上に愛される事を願っていただろう。

少しでも慰められたらいいのに。でも、一人じゃないよ、とは何歳も年上の男に言う言葉ではない。

「ハジメさん、ありがとう」

少し手が届きづらいが、力いっぱい手をのばしてハジメの頭を撫でた。

これで少しは姉を思い出して、過去と決別出来るきっかけになればいいと思ったのだ。本人は姉の事を過去にしているようだが、初めて会った時の瞳が寂しそうだったから。

「ユウ？」

腕の力を弱めたハジメは、低い声でユウの名前を呼んだ。

「ハジメさんが俺とお姉さんを重ねるなら、俺はあなたのお姉さんみたいにします。俺も少しずつ過去と決別していききたい。だからハジメさんの寂しさを少しでも取り除けたらな、って思いました。」

……

迷惑かも知れませんが、とユウは笑った。

せめてものお詫びのつもりだった。ここまで話を聞いてくれて、欲しかった言葉をくれた人はいなかったから。

「寂しさ、か。お前にはお見通しのようだな」

今度はまた強く抱き締められ、のびした手が頭に届かなくなってしまった。

「……お前はまだ子供だ。まだ感情に素直でもいいのに、少し堪え過ぎではないか？」

ハジメにそう言われ、両親が死んでからを振り返る。

アマネと違い、ユウは感情を失う事はなかった。けれども、それを抑え、我慢する事ばかりを覚えたのだ。

両親が死んだ原因は自分にあるから、泣けなかったから我慢した。それが身に着いてしまっただけか、アマネと違って笑ったり怒ったりは出来たのだが、泣く事に関しては、他人の前では絶対にしなかったのだ。

「兄さんやキラ先生の前では強がっちゃうから、弱音吐けなくて……」

……

アマネの件で村中の人に心配を掛けているような状況だったから、ユウが弱音を吐いてはいけなかったのだと思っていた。

ここでも泣いてはダメだ、と思いつつも、今までの出来事が嫌でも蘇り、頭の中がこんがらがる。

「心配するな。俺には弱音を吐いていい」

「嫌いになりませんか……？」

「ならん」

優しく頭を撫でてくれたからか、ユウは安心した。

「寂しかった、です……」

鼻の奥がつんと刺される。

今日だけはその優しさに甘えて、ほんの少し泣こうと思っていた。けれども、五年分の気持ちはそう簡単に堪えられるものではなく、月明りだけがユウを見つめる中、ハジメの肩を借りて幾千もの涙を落とした。

「そうか」

肩よりも少し下の方で泣く小さなユウを抱き締めたハジメは、それ以上は何も言おうとはしなかった。

春になったばかりの夜は、まだ少しだけ長い。

短い髪を指に絡めて弄り、ユウをただ強く抱いて、その夜はずっとそばにいてくれたのだった。

スタンデンシティに向かうには、リギン村を南に行ったデサルト砂漠を横断しなければ辿り着けない。

デサルト砂漠は、やはり一般では幌馬車かベヒケルを使って渡って行くしか方法はないのだ。

砂漠は普通よりも日差しが強く、昼夜の温度差が著しい。

そのために人体に影響を及ぼし兼ねないのと、砂漠の規模が広く魔物も多いために、水と食料も必要以上に用意しておかなければならないのだ。

グロウスの森から再び一週間掛けてリギン村に戻った五人は、食料やアイテムを大量に買い込んだので、砂漠横断への準備は整ったと言えるだろう。

しかし、思わぬところで死にかけた人物、約一名。

「え。もしかして、俺にも夕飯の当番回って来るワケ？」

リギン村を出発した日の夜だった。

「当たり前でしょう。こうなった以上、貴方も仲間なのですし、甘やかしはしませんよ」

キラは貴族生まれのカイにも厳しかった。

「ふーん、まあいいか。料理とか初めてだけど、ユウくらいのモン作ってやるからな！」

カイは包丁を危ない手つきで握り、食材を切り始めた。

「パプリカあ、今からごはんだよ！」

「きゅう！」

ユウは両親の件があつて料理が出来るし、料理が好きだ。だからカイも好きになるかな、と期待していたのだが。

「おーい、出来たぞ！これがオムライスか？庶民の料理って見た事ないんだよなあ」

レシピは予めキラが書いて教えた筈だったのだが、そこに置かれているのは明らかにオムライスではなかった。

どうやってやったのかは分からないが、水色のご飯に焦げた玉子が載せてある。その上、ご飯には不明なものが入っているのだ。

それでもカイは自信満々だったので、ユウは何も突っ込めず、ぽかんと開いた口が塞がらない状態だった。

「な、何これ……」

ユウ達は呆然として眺めているだけだったが、カイは、

「どうしたんだ？早く食えよ」

と促してくる。

とても食べられそうなものではなさそうだが、どうもその部分は天然らしい。

「カイ、これなんなの？」

水色のご飯を指してアマネは言う。

「何って……着色料だぜ？俺のパジフィック三号機にも使ってるんだ！」

「まさかそれはロボット専用の……」

「ああ。パジフィック三号機はな、やっと成功した三台目だったんだ。だから俺の髪と同じ色にしたんだぞ」

カイは得意げに早くパジフィックに会いたいな、と呟いたが、他

の四人はそれどころではなかった。

ユウはただ見た事のない料理をパプリカを抱いて呆然と見つめているだけで、アマネは無表情だが食べようとはしていないし、キラはやれやれ、と呆れている。

一方で、ハジメだけは怒っていた。

「この野郎、仲間に毒物を食わせる気か！」

皿ごとうまくカイの顔面目掛けて投げ、見事に直撃する。

気のせいだろうが、金属が人間の肌に当たる時の音が同時に聞こえた。

「毒じゃねえんだよ！ だから料理投げてくるな！ そんなに疑うんなら俺が食ってやる！」

カイは汚れたままスプーンを手に取り、大胆にそれを口にした。

「やめなさ……」

キラが止めようとした時には、既に飲み込んでいたようだ。

「あ、この具、金属だよな」

アマネが木製のスプーンで掬ったのは、金属製の釘だった。

「うああああ！！」

「か、カイ！？」

少し経ったかと思えば、カイは気絶した。

「化学変化で毒物に構成されてしまったようですな。よほど変な物を混ぜたのでしょう。仕方ないですね……ユウ様の治療で治ります」料理を調べるキラは、まるで『呆れた』と顔に書いてあるようだ。つた。

ユウはキラの言った通り、オカリナを出して曲を吹き、解毒した。あれから一時間以上放置していた場合、カイの命はなかったと言うのだ。何回死にかけたら気が済むのだろうか、と後になっては笑い話である。

そんな事もあり、砂漠付近までようやく辿り着いたその夜、カイに関しては、キラが解呪方法を見つけてくれたようだ。

砂漠に入る前に安い金で宿泊出来るキャテージという施設がある

のだが、そこでキラが話してくれたのだ。

「またカイが暴走したら困りますから、解呪方法を探しましたよ」

「マジ？　どんなのだ？」

「簡単で難しい　術者を殺す事です。呪いも一種の魔術ですから、強力な魔術が使える者の仕業ですね」

キラの言う事は大体が真実だ。だから、カイにとっての敵は今までの魔物や追っ手より、きっと強いのだろう。

「じゃあ、俺ってその術者を倒さないといけないから……また暴走するとか！？」

明るく振る舞うカイだが、毎日いつ暴走するか分からない様子でおびえていたのは確かである。

何とかしてやりたいのは皆同じだった。

「いえ、ハジメさんが闇の力を使えます。そうですね、ハジメさん？」

キラは問い質すようにハジメに言った。

ユウが光で、ハジメが闇　光と闇はなかなか使える者がいない属性で、生まれ持たない以上は行使出来ない。

世の中の六つの属性は陽と陰に分かれていて、炎と風は陽、水と氷は陰となっている。その中の陽を代表するのが光、陰の代表が闇なのだ。光と闇を使う者は、他の属性の魔術は一切使えない。

しかし、光魔術は尊敬されるが、闇魔術を使う者は悪魔だと迫害されている。

「よく分かったな。俺はお前らの前で使った覚えはないが？」

「アスカと違い、魔術を使えないルクリア人はいません。ですが、貴方は魔術を使わない　差別やないですか？」

「よく分かったな。闇魔術を使う者への偏見がアスカであると聞いていた」

「ですが、僕達相手にどうして隠す必要があるのですか？」

キラは更に問い質したが、ハジメは何か言いたげにユウと一瞬だけ目を合わせてから逸らし、それ以上は何も言おうとはしなかった。

「……まあいいでしょう。闇魔術で一時的ですが抑える事が可能なのです。ついでですが、僕は可愛い教え子に差別的な考えは教えませんよ」

キラが最後に付け加えた理由は分からなかったが、確かにキラに習った生徒は差別をせず、優しい子が多かったのだ。

「分かった。どうすればいい？」

戦闘には長けたハジメだが、魔術についてはそう詳しくはないようだ。

「簡単です。カイ、背中を見せて下さい」

「おう……こうか？」

キラに言われた通り、カイは帯をほどいて背中を見せた。

かなり鍛えているのか、筋肉質な体付きだ。

その背中の中上部には、呪文がたくさん書かれた、大きな魔方陣のようなものが浮き出されている。

「やはりありました。ダーク・エンブレムですね……ハジメさん、この模様の手を翳し、闇のスロナを送ってくださいますか？」

「えっ、待て待て。俺ってば機械科の授業以外サボってるから……スロナって何だ？」

「まったく 全ての魔術の中核になっている原子の事ですよ」

機械系の事以外はほとんど無知で世間知らずのカイは、ことごとく物知りなキラを呆れさせている。

「前に習ったよね。呪いには色々あるけど、生物を殺す呪いをかけられるのは、闇魔術だけなんだ。だから、闇魔術を使う人って、アス力では迫害されるんだって」

キラがカイに構っているからか、少しでもキラに構ってもらいたいという様子でアマネは率先して言った。

「そうか。それで闇属性のスロナで呪いの効果を半減させるとか？」

「そういう事です。物分かりはいいんですから、ちゃんと勉強はしましょうね」

「へいへい」

愛想よく笑って返事を返すカイだが、勉強や堅苦しいものは嫌に見える。

これではまるで親子だ。見ているだけで微笑ましくもなる。

「カイ、いいか？ 少し痛みを伴うと思うが……」

ダーク・エンブレムが刻まれた部分に手を翳し、ハジメは気を遣うようにそう言った。

「オッケー。痛いのは慣れてるし」

背中に垂れる赤い鉢巻きを前側に掻き分け、大丈夫だとカイは笑った。

実の父親に改造までされてしまい、その経緯は分からないが、おまけに呪いまで掛けられて 辛いとは言えない状況だろう。

カイが準備は整ったという様子を見せると、ハジメは手に黒い光の塊を集め、背中のダーク・エンブレムへゆっくりと当てた。

その衝撃を受け、眉間に皺を寄せる。

「うあぁっ！」

貴族にもかかわらず、魔物との戦闘でも全く弱音を吐かなかった彼が、悲鳴を上げてそれを受けている。

「きゅっ！ きゅきゅっ！」

パプリカもそれに反応するように、ユウの腕の中で暴れた。

ユウも闇のスロナは初めて目にしたが、ハジメのは圧力を感じるほど強力で、闇魔術で生物を殺せる呪いを掛けられるというのも分かる気がした。

闇のスロナの塊を一気に体内に取り込んでしまったカイは、息を荒げて椅子から飛び降り、跪いた。

そんな中、術者のハジメが一番複雑な顔をしていたのだが、すぐにその表情を変え、カイの肩を抱いた。

背中のダーク・エンブレムは、先ほどよりも薄くなっていた。

「大丈夫か？ 俺の闇魔術でも完全に消えないとはな……ルクリア人には呪いというものの自体通用しないので、俺にはよく理解出来ん

が」

「ああ、なんか親父から聞いた事あるぜ。体の構成物質が違うとか？ その時はスロナって知らなかったけど……でも俺、ルクリア人に改造されたのにな」

「元がアスカ人だからじゃないか？ アスカ人だった頃に掛けられた呪いなら、ルクリア人になった後も引き継がれるのは考えられるだろう」

大人達は少し難しい内容を話題にしているのだが、ユウもその話に付いていけない事はなかった。

キラは二人の議論を意味深な顔をして聞いている。

「ハジメさんの意見が正しいでしょう。改造人間は専門外ですが、この呪いはどうも古い。カイ、恨まれる要因はありますか？」

そう訊いた直後、キラはアマネの頭を撫でた。

まるで歳の離れた兄に構ってもらいたい弟のようで、彼の精神年齢が五年前のあの日から止まってしまっているのが分かる。

アマネは精神的にも肉体的にも幼い。だからすぐに疲れるし、キラと会えない日は口も聞かなくなる。

外を見ると、そろそろアマネが眠くなる時間だというのをユウは悟った。

「兄さん、もう寝る時間だよ。部屋に行こうか」

このキャステージには一階の談話室と二階の宿泊室があり、受け付けと離れた場所にあるし、今日は他の客もいないのでずっと貸し切り状態だったのだ。

しかし、アマネは目をこすって眠そうな仕草を繰り返している。今日はよく歩いたし、疲れてしまったのだろうか。

「やだ。キラさんと寝るから」

「兄さん！ 明日も朝早いし、もっと疲れるんだよ？」

ユウはアマネを叱るように言ったが、本来なら逆の立場になるということを、アマネは気付いていないのだろうか。

アマネのキラへの依存の仕方は、本当の弟のユウにとって、少し

寂しい現象なのだ。

「アマネ様。後で僕もそちらへ向かいますから、先に寝ていてくれませんか？」

わがままを言っていたアマネだが、

「絶対だよ？」

「アマネ様を裏切る事はしません」

「じゃあ、またね」

アマネはわがままを止め、キラに言われた通り、寝室へと向かって行った。

「ユウはいいのか？」

「俺はだいじょうぶです。カイに早くよくなってもらいたいから」

「無理はするなよ」

「は、はい……」

一緒に満月を眺めた夜から、ハジメと二人きりで話す事はなかったのだが、彼が心配してくれているのは確かだった。

相変わらず、ハジメは何を考えているのか分からない。確かに闇の力はアスカでは非難されるが、事情を説明すればすぐに打ち解けた筈なのに、どうして隠していたのだろう。

怖いとは思わなくなったものの、未だに彼への不思議な気持ちは消えないままだった。

「それより、キラ先生がさっき言ってたけど、古い呪いってどういうこと？」

話題が逸れたままだとまずいと思ったユウは、先ほどの話を思い出させるように訊いた。

「最近掛けられたものではないのです。五年か十年ほど前ですね……本来なら、もう少し時間を掛けて成人と共に殺す予定だったようですが、改造された事によって進行が早まった、と図って間違いないでしょう」

それを聞いたカイは、普段の姿とは想像がつかない身震いをした。「成人と共に……俺、まだ十九になったばかりだぜ？ あと一

年以内に、そいつを殺さなきゃなんねえってか？ おもしれーじゃん」

カイは笑って言ったが、瞳の中にあつた微かな希望の光は消えていた。

あと一年の命 いや、キラの言った通り、カイは暴走していた。「酷だが、一年も猶予は無いかも知れんぞ。俺の魔術で少しは延ばせるかも知れんが……」

「ああ、分かつてる。キラ、ハジメの術はどの程度受けとけばいい？」

現実を受け入れる、という姿勢でカイは言った。

「一日一回ずつ、です。ここ何週間かは暴走しませんでした、これからは十分な注意が必要です、命の危険を考えたらやはり」
「魔術や呪いはキラの専門分野だから、彼の言う通りに実行していれば間違いはないだろうし、その点は安心出来る。」

ただ、ハジメの術に耐えられるかが問題なんだ。

「平気平気。何としても生き抜いてやるよ。ユウに助けられて分かったんだ。死にたくねえし、会いたい奴がいる ありがとな、ユウ」

クシャクシャと頭を撫でられ、思わず腕に抱いたパプリカを離してしまつたが、彼は得意げに羽を使って木製の床に着地した。

「きゅうつ」

ユウが落としてしまつたのにもかかわらず、パプリカは着地した事を褒めると言わんばかりに、ユウの足にしがみついて見上げてきた。

「ごめんな、落とすつもりはなかったけど……でも、おまえはいい子だな」ユウはパプリカを抱き上げ、毛を撫でながらカイを見上げた。「カイ、会いたい人ってどんな人なんだ？」

そう言えば、カイは何度も「会いたい奴がいる」と語っていたのだ。よほど大切な家族か友達か、或いは。

「二人いるんだ。一人は親友。もう一人は……おっと、ユウにはち

よつと早いかな」

カイはそれだけ言って笑った。

「恋人か？」

柄にも合わない、茶化すような目でハジメは言った。

「バーカ。片思いだって。初恋の人なんだからな！」

「おやおや。その歳で純情ですねえ」

「つるせえ！」

カイは二人の美青年に茶化され、少し照れている。

自分にはとても縁のない話だなあ、とユウはパブリカを撫でながら、笑ってその光景を眺めていた。

女性に興味ない、というのだろうか。

かと言って男性が好きな訳ではないが、ユウが理解出来ないもののひとつに、恋愛というものが昔から入っている。

十五にもなつて初恋もまだだと言えば、きっと三人から攻撃を食らってしまうだろう、とユウは思った。

「キラ先生は今まで何人恋人いたっけ？ 確かにじゅ……」

「ユウ様。要らない事は仰らなくていいですよ」

「うつ……」

二十人、と言おうとしたところで、キラに『腹黒スマイル』を飛ばされたのでやめた。

キラは都合が悪くなると、目が完全に笑っていない、笑みとは言えない笑みを見せ、他人を黙らせる『腹黒スマイル』を発動するのだ。

それでも言う事を聞かない生徒は、かなりきついお仕置きが待っているという。

「は、ハジメはモテるだろ？ な？」

空気を読んだカイが話題を変えたが、

「何度か付き合ったが、姉さんを越える女はいないと分かった」という言葉が返ってきた。

さすがのユウでも、アマネと付き合いたいとは思わないし、アマ

ネみたいな人を好きになることはなさそうなのだ。

ハジメはよほど姉が好きだったのだろう。

「そ、そうか……はは」

変な奴、とカイは苦笑いした。

「では、僕はそろそろ寢室に向かいます。アマネ様、最近寢付きが悪いですよ」

逃げるようにキラは寢室へ歩いて行く。

残されたユウとハジメとカイは、キラ達とは別のもうひとつの寢室で、何となくその話題を継続していた。

「……その続きだけど、キラってアマネに依存し過ぎじゃねえか？
ユウは弟としてどうなのよ。二人部屋で何されてるか分かんないんだぜ？ 俺ってば見ちゃったんだよ……」

カイは半分面白がるように語り、ユウに問い掛けた。

ユウから見ればアマネがキラに依存しているようにしか見えないのだが、カイの言う事は意外にも本当なのかも知れない。

キラはいつも村の美人と付き合っていたが、年下の美少女とは付き合っていないかった。もしかしたら、本当は年下趣味かも知れないのだ。

「ど、どうしよう！？ 兄さんあれでも男だよ？ 気持ち悪い……」
男と女の行為だって、想像するのは少しえげつないと思うのに、それが男と男だったら言語両断である。

「くだらん。別に本人達が楽しいのならいいだろう。まあそれが本当なら、アマネの明日の体力が危ないな……よし、見に行つてやる」

「あー、ウソウソ！ 悪かったって、ハジメー！」

ベッドから立ち上がったハジメがわざとらしく振り向いて笑うと、その直後、ユウ達の部屋のドアがノックされ、開いた。

「ユウ様に何を吹き込んでいるのですか？」

「き、キラ……」

「さあ、お仕置きですよ」

その後、ハジメとカイが朝まで説教という形になったのは、言う

までもない。

カイに出会い、グロウスの森からデサルト砂漠に向かうまでに色々な事があったが、こんな濃い日々になるとは思っていなかった。五人は何とかキャステージの人と交渉し、幌馬車を借りて、砂漠を横断する事が出来そうだった。

キャステージの小屋を経営していたのは幸いながらも女性で、ハジメとキラが同時に攻めてくれたので貸して貰えた、という訳だ。しかし、一日目は男性陣はほぼ全滅状態だった。

「キラさんのばか。お説教はだめだって言っただじゃない」

「ふい、とアマネに愛想を尽かされたキラは、

「ですが、あのままではユウ様に悪影響を及ぼす所でした」

「ボク、もうユウと寝るから」

「ユウ様と！？ あの、僕は……」

「しらない」

朝っぱらから痴話喧嘩のようなやり取りが交わされ、干物のようなハジメとカイは二人してブツブツと何かを唱えていた。

砂漠横断には二日ほど掛かる。幌馬車の運転手は雇ったのだから、一日休めば戦力は回復するだろう。

スタンデシテイでは、恐らく戦いになるに違いないのだ。

キラが次の日の事を考えていないとは思わなかったのだが、ここは馬車を借りられた分、ユウには責める事は出来なかった。

「ハジメさん、カイ……昨日のことですけど、大丈夫ですか？」

あまりに酷ければ、ユウが癒す事も出来るのだが。

「ユウは気にするな。お前のせいなんだぞ、カイ」

「へへへ、悪イ悪イ。でもさ、キラの奴隸星だったんじゃない？」

「人を巻き込んでおいて、ひとつも反省していないな……俺の置きはキラのよりも強烈だが？」

「……わー、分かったよ。釣れねえ奴だなあ」

剣を構えるハジメにおじけづいたカイだったが、昨日で何かが吹

っ切れたようで、出会った当初の明るさが戻ったように思えた。

しかし、昨日の件に関しては、キラも次の日の事を考える冷静さを失っていたと思うし、少し考えたらハジメが特に変な事をユウに吹き込んだ訳ではないのも分かるし、カイが冗談で言ったのも分かるのだ。

昨夜のキラは少し変だったのは確かだ。

早朝に幌馬車を出してもらったが、さすがに帰りの事は考えていなかった交渉だったし、帰りもいつになるか分からない状況だ。

ユウは幌馬車の中から砂漠の景色を眺めた後、カイとキラとアマネが熟睡しているのを見て、思わず微笑んでいた。

「ハジメさんは寝ないんですか？」

じつと窓の外を眺め、睡眠不足を解消しようとしないうハジメに心配して声を掛けた。

「俺は平気だ。もし魔物が現れたらどうするつもりだ……カイもキラも一般人だが、俺は軍人だ。鍛えてあるから何ともない」

両隣りにカイとキラという大きめの男が二人も凭れて来る中、少し暑苦しいユウは汗を手の甲で拭った。

「ハジメさんはすごいです。俺の目標かな」

強いしかっこいいし、背も高くて何より不器用だけど、優しいそんな人物になりたいと思っていた。

膝の上で眠るパプリカを撫で、ユウはハジメを見つめた。

「目標、か。それ以上にはならないのか？」

「えっ？」

「いや、私情だ。気にしなくていい」

目標の『それ以上』とは一体何なのだろうか。ユウはそれが気になって聞き返したが、まともな答えは得られなかった。

いつもユウやアマネには隠し事として、キラやカイと色々な事を話して。

ユウが何かと訊いたら、「お前はまだ子供だから気にするな」と言っ、すぐに子供扱いをする。

そんな大人の余裕があるハジメが羨ましいし、憧れている以上の対象になっている。現に今、彼のようになりたいたいと思っているからだ。

「ハジメさんって、俺のこと子供扱いしますよね。ルクリアでは俺だって成人なのに」

頬を膨らまして、それもくだらないことで怒るから、未だに子供だと言われるのも仕方ないのかも知れない。

後になって気がついたが、その仕草をやめる事は難しそうだ。

「準成人、な。大人という形になるが、やはり二十歳になるまで子供扱いはされる。千年も生きる人種だぞ？ それ以上身体は成長しないというだけで、その歳ではまだ精神的には子供だ。違うか？」

ハジメの言う事は、きちんと的を射ているように思えた。

それに比べてユウは、大人だと思い込んでいたものの、まだ一番子供っぽいところが抜けない少年だ。

「俺、これでも色々考えてるのに……どうしても、あなたには追いつけない」

「仕方ないだろう。生まれた時からの訓練の仕方違うし、性格も違う。お前は俺のようになるな」

「どうして？ ハジメさん、俺が嫌いですか？」

「違う。むしろ……いや、俺は人殺しだ。ユウは純粋なままでいい」
また、言葉を濁した。

違う。ハジメが人を殺したのは、ユウやアマネを守るため。決して利害のためではないのに、どうして自分をけなすのだろう。

「ハジメさんはいい人です。人殺しなんかじゃ」

ユウはパプリカを抱き締めて俯いた。

「俺はお前に嫌われたくないだけの卑怯な人間だ。だから闇魔術の事も隠していた……アス力で育ったなら、差別的考えが身に着いているかと思ったんだ」

ハジメがユウを大切に思う理由が分からない。

前に彼が言った通り、姉に似ているからだろうか。

ただそれだけで大切に思うなら、顔が似ていると言われるアマネだつて、その対象になり得るのだ。

「あなたにそれだけ大切にしてもらえるの、すごく嬉しいです」
それだけ言つて笑つた。本当の事だつたから、飾る必要はなかったのだ。

「……そうか」

照れているのか、ハジメは隣りで寝るアマネの髪を弄り出した。そうしていると、急に幌馬車は止められ、慣性の法則で中は揺れ動き、寝ていた三人は目を覚ました。

「どうしたんですか？」

ユウは馬を操作していた操縦士に訊こうと外を見たが、目の前には蠍型の大きな魔物が立ちはだかり、馬を怯えさせていたようだった。

「こんな化け物は初めてです。私にも手が負えません！」

操縦士は手を震わせている。

全員が起きたばかりなのでちょうどいいかも知れないが、ユウは一応目眩ましで光魔術を使ったものの、すぐに魔物は起き上がった。

「スナイダー……？」

慌てて起きたカイが、蠍を見て呟いた。

「こいつは悪い魔物じゃねえ。なのに、何でこんな魔物になってんだ？ スナイダーは俺のペットだぜ……？」

「この魔物……スコルピンですね。スタンデシティから逃げて来たようです。カイ、貴方のように改造されています」

「どうにか助からないか……！？」

身を乗り出してカイは焦った表情を見せたが、そんな様子にキラは目を伏せ、かぶりを振つた。

「人間によって凶暴になつてしまった魔物は、二度と元には戻りませんよ」

「そんな……」

絶望的な現実だった。

腕の中でパプリカが怯える。もしパプリカが改造されて凶暴になったら、ユウはきつと彼を庇ってしまう。

カイはどんな手段で解決しようとするのだろうか。

「スナイダー。お前が誰かを殺す前に、俺が正気に戻してやる」

緩くなった赤い鉢巻きを締め直し、カイは幌馬車から飛び降りて、スナイダーの前に着地した。

こんな大きな魔物とカイが戦うのは初めてだ。大丈夫なのだろうか。

「なるべく使いたくなかったけど……」

カイはそう言うと、腿の辺りにあるベルト型のアイテム入れから、少し小さめの銃を二つ取り出した。

今まではちよつとしたアイテム入れだと思っていたので気にならなかったのだが、まさか銃が入っているとは思わなかったのだ。

「カイ!？」

「大丈夫、だ。ハジメ、また暴走しかけたらお願いな」

身体が暴走した時のように熱気を纏ったカイは、二つの銃を同時に撃ち、スナイダー目掛けて弾を飛ばした。

よく見ると、銃の弾は炎の塊で、それが当たったスナイダーの身体の一部は焦げていた。

しかし、スナイダーは主人である彼が分からないのか、それでも毒針を振り回して襲ってきた。

ユウはただ、そんなカイとスナイダーを見るしか出来なかった。

もしかして、カイはスナイダーを『一時的に止める』のではなく、本当に『止めてしまう』事を決意しているのだろうか。

体術と二つの銃の連動で独特な戦い方をするカイだが、その表情が見えないくらいに速く動いている。

きつと、泣きそうになる顔を見られたくないのだろう。

もしパプリカが同じ状態だったら、と考えたら 恐らく、カイのように殺す事の決意は出来ないだろう。

「ごめんな、スナイダー……でも、お前が人間を殺してしまう前であつたよ」

カイがスナイダーと戦い始めて、一時間ほどの時が流れた。スナイダーの身体は灼熱の炎に包まれ、スロナとなって消えて行くところだつた。

魔物の身体はスロナという原子から作られるため、死んで一定の時間が経った後、分解されて消えてしまう。

人間とは違うその現象だが、スナイダーの場合、炎に身を焼かれる時間の方が長かつた。

『カイ』

何者かが跪くカイを呼んだ。

しかし、他の四人の誰でもない、聞いた事のない声だつた。

『ありがとう。ボク、ほんのちよつとだつたけど、君といれて楽しかつたよ』

そう言つた言葉は砂嵐に掻き消される。

誰の言葉だつたのだろうか。

しかし、次に前を見た時には、既にスナイダーの遺体は消えていた。

「スナイダー……」

風に揺れる鉢巻きがせつなさを物語つていた。

「カイ！」

日が照らす砂漠の中、カイはまた倒れた。

精神的なショックと身体への負担が原因だろう、とキラは判断した。

こんな研究をした人が絶対に許せない、と初めて誰かに怒りを覚え、ユウはパプリカを抱き締める。

幸い、暴走する前にカイが倒れてしまったため、寝ている間のハジメの治療で終わったが、それでも後味の悪い戦いになったのは間違ひなかつた。

「もう魔物はいません。安心して、そのままスタンデシテイまでお

願います」

キラは冷静にそれだけ言った。

再び馬車が走り、日が暮れてきた頃には、目的のスタンデシティ
敵の本拠地へと辿り着いていた。

3・父親との戦い

宿に泊まった一晩だが、見た事のないような街に、ユウは一人ではしゃいでいた。

その様子を見たカイは「まだまだガキだなあ」とユウをからかって遊んだが、スナイダーの事をまだ忘れられないようで、油断すると寂しそうな顔に戻っていた。

ルクリア人となったカイは、炎の魔術を使える事が判明した。

しかし、魔術は使えるものの、呪いがあるので魔術は控えていたようなのだが、ユウ達と旅をして行く中でいつの間にか修得していたと言うのだ。

最初に会ったグロウスの森でカイは魔術が出せそうだったのだが、呪いが連動してしまったために、暴走という形になってしまったのだろう、とキラは予測した。

今回ののはハジメの力のおかげで呪いを緩和出来ていたために、カイも魔術を使う決心をしたのだと言う。

馬車でスタンデシテイまで辿り着いた次の日の早朝、ユウの部屋にカイは訪れた。

「ユウ、ちよつといいか？」

「んー、いいよ」

まだ眠たかったが、彼が昨日の事からまだ立ち直ってなさそうだったので、ユウには断る事が出来なかった。

「お前、パプリカがスナイダーみたいになったらどうする？」

カイが真剣な目で見てきた。

ユウは羽を膨らませて眠るパプリカを見つめ、昨日想像した通りの事を言った。

「俺だったら、多分パプリカを殺せないと思う。でもやらなきゃならないんだよな　殺したら殺したで、自分も死んでると思った」
そんな事は想像するのも嫌だった。

パプリカは親のファウまで失っていて、彼には何の罪はないのに。だったら、パプリカを殺してユウも死ぬ。

もし本当にそんな事になればどうなるか分からないが、少なくともユウは、それくらいパプリカが可愛かった。

「そうか。俺、やっぱり間違ってたか？」

カイはユウの隣りに座った。

違う。カイだってスナイダーが可愛いから、人間を殺して欲しくなかったのだ。

「ち、違うよ。俺が浅はかすぎるんだ……カイは間違っていないし、スナイダーも感謝してただろ」

あの風に乗って聞こえてきた声は、きっとスナイダーの声なのだろう。

魔物は喋る事は出来ないが、最後の力で気持ちを伝えようとしていたのだ。

だから、カイは決して間違った事はしていない。

「そっか。お前に言われるとなんか安心する。ありがとな。ユウはパプリカを大切にしろよ」

「う、うん」

「つか、今日の朝食当番お前だぜ。今からやっという方がいいんじゃない？」

カイがいつものカイに戻った気がして少し嬉しかった。

忘れていた訳ではないが、朝食の準備には少し早い。

だが、せつかなので今日は早めに作ろうと思い、パプリカを起こした。

「パプリカ。お前、ご主人様を守るんだぞ」

カイはそんな事をパプリカに言ったが、言葉の通じないパプリカは「きゅっ？」と鳴いて首を傾げるだけだった。

「はは。パプリカに言っても分かんないよ」

宿の施設を借りて朝食を作る最中、カイとパプリカが色々と手伝ってくれた。

いつかこんな風に、幸せに暮らせる日々が続いたら　そう思うと、ずっと先の未来が恋しくなってしまう。

「でもさ、今日は研究所に乗り込むんだぜ。……怖いかな？」

「うん。ちよつとな。でも、乗り切らなきゃ。カイはもつと辛いんだから」

「俺は辛くねえよ。元々母さんを捨てた親父なんか好きじゃねえし」
カイは笑ったが、どうやらそれは本心のようだ。

彼は五人の中でも感情の変化が最も分かりやすいタイプで、嘘を吐いても顔に出てしまう。自分の気持ちには正直なのだろう。

それを聞いて少し安心したのはユウの方だった。

もし骨肉の争いになった時、カイが傷付いてしまうのが嫌だったからだ。

朝食を済ませると、宿を出て研究所に向かった。

この地理はカイが一番詳しく、キラでもスタンデシティには行った事がないと言うので、案内役はカイに回されたのだ。

スタンデシティはリギン村より広く、機械類がたくさんあった。

工場の種類も豊富で、見た事のない機械が作動しているのを見ると、やはり新鮮な気持ちになる。

リギン村を出た事のないユウにとって、スタンデシティは趣のある場所だった。

「親父の研究所があるんだけど、多分そこにいると思うんだ」

カイが言うには、スタンデシティで一番大きな研究所で、機密的にルクリアの事を研究しているようだ。

カイの父親が何の為に彼をルクリア人に仕立てたのかは予想不可能だが、絶対に許される事ではない。

「ユウ様。怒っていらっしやいますか？」

「うん。何でかな……誰かに対してここまで怒るの、初めてだよ」

「それでいいのです。だから貴方には光の加護が与えられた」

キラの言う意味がユウにはよく分からなかった。

「親父を倒す前に、ルクリアの研究を止めさせるべきだ。これ以上

犠牲者はいらねえ……」

カイは実験に成功したからよかったものの、失敗していたらどうなっていたのだろうか。

「カイ……」

彼はもう友達だ。

何としても助けたいし、元の生活に戻してやりたい。

メリア家の研究所は他の研究所の倍近くの大きさで、外から見ただけでも莫大な費用が掛かっている事が予想される。

しかし、研究所自体は大きいのに、防音設備が整っているのか中から物音ひとつ聞こえない。

ルクリアの研究を機密的に行っているだけあるだろう。

「カイ！」

研究所に乗り込もうとした時、背後からカイを呼ぶ若い男の声が聞こえた。

ハジメとキラとカイはそれに瞬時に反応してそれぞれの武器を構え、いつでも戦闘出来るよう、準備を整える。

見ると、カイを呼んだのは一人の少年だった。

「タク……」

即座に武器をしまったカイは、その少年に何の疑いもなく近付いて行く。

「探しに来たんだぞ。何週間も何処に行ったかと思えば、シアン様にスタンデシテイに連れて行かれたって聞いて……屋敷に帰ろうぜ」

黒ぶちの眼鏡が特徴的な金髪の少年は、対等に話しているものの、礼儀正しく正装をしている。

「タク、親父はここか？」

「……違う。理由は分からないが、シアン様はつい先ほど、研究員と最新のベヒケルでレーライ村へ向かわれた」

「親父の奴……」

今まで抑えていた感情が込み上げてきたのだろうか。

最初、森で会った時のように、カイの身体は熱気に包まれた。

幸い、今朝にハジメから治療を受けていたので気絶するだけで済んだが、

「カイ！」

タクはその事情を知らず、倒れてきた彼を抱き留め、ユウ達四人を疑いの眼差しで睨み付けてくる。

どうすればいいか、と思い悩む中、タクの前にキラが歩み寄って行った。

「何なんだお前！」

背が低めのタクはキラを見上げた途端、黒ぶちの眼鏡がずり落ちそうになったが、それさえも気にせずにかいを庇っていた。

警戒されている中、相手をちゃんと説得出来そうなのは、この中ではキラくらいしかないのだ。

ユウやアマネだったら小さいし、説得力に欠ける。ハジメも不器用なところがあり、説明をするのは少し苦手そうなのだ。

「失礼しました。僕はキラ・ダーティス……カイの友人です。カイとはグロウスの森で出会いました」

キラの紳士的で丁寧な態度に安心したのか、眼鏡を指で上げた次の瞬間から、タクは睨み付ける目付きではなくなっていた。

カイを抱き留めた彼は改まった態度を示す。

「カイの友人か。無礼な態度、すまなかったな。何分、こいつはよく命を狙われる。俺はタク・シルベルト。カイの親友だ」

「カイの親友」という言葉を聞き、真っ先に反応したのはユウだった。

「じゃあ、カイの会いたい人って」

キヤステージでカイが言った事を思い浮かべる。

彼には本当は会いたかった人が二人いて、一人は片思いの初恋の人、もう一人は親友だと言っていたのだ。

「会いたい？ カイがそんな事言ってたのか？ でも何故だ……」
「実は」

頭に疑問符を浮かべるタクに、タイミングを見計らったキラが今

までの出来事の経緯を説明した。

グロウスの森の奥側、なかなか見つからない場所にカイが倒れていたこと。

カイは父親の権力によってルクリア人に改造されていること。

その上呪いまで掛けられていることが判明し、森で暴走して死にかけたこと。

カイの父親であるシアンが、仕える筈のトワイライト陛下を裏切っていること、ペットのスナイダーのこと。

簡単にだが、必要な部分は全てキラが伝えてくれた。

タクの表情が曇る。

「分かった。お前らがルクリアの研究をやめさせたいなら、この研究所を爆破するといい。その話が本当なら、ルクリアの資料も研究材料も、この中から出せない筈だからな」

どうやら彼もこの計画に協力してくれるようだ。

「んー……またやつちまった。でも話は聞こえてたぜ。早く爆破して、レーライ村に向かう！」

タクから離れたカイは起き上がって背伸びをすると、鉢巻きをきつく締めて気合いを入れた。

「カイ、大丈夫なの？」

ユウは何よりカイの体調が心配だった。呪いが急激に進行しているのは見え見えなのに、

「俺が行かなきゃダメだろ」

それだけ言って彼は笑った。

「中のシステムは俺に任せてくれ。研究員を気絶させるのはあなた方をお願いします」

タクはキラに申し出て、研究所の重い金属製のドアに手を掛けた。「分かりました。ハジメさんとカイと僕は前に行きます。後の三人はそれに付いて来て下さい」

手っ取り早くキラが指示をすると、暗証番号をハッキングしたタクは、一気に研究所の中へと導いた。

その瞬間に警報のサイレンが鳴ったが、途中の扉を同じ手順で開いて行きながら、構わず進んで行く。

やはり途中で研究員が抵抗してくる事はあったが、ハジメやキアやカイには勝てず、あっさりと気絶してしまっていた。

ここの研究員は顔色が悪く、肌が全く日に焼けてない状態の人間が多いように感じられる。

それだけルクリアの研究は難しいものなのだろうか。

研究所を進んで行けば行くほど、グロテスクな物が視界に入ってくる。

中には実験に失敗したのか、人間　それも変わり果てた姿になっている者が放置してある施設もあった。

「っ……！」

死臭というものだろうか。

嗅いだこともないような刺激臭に鼻を覆い、同時に気分が悪くなる。

もし失敗していたら、カイもあのようになっていたのだろうか。

「パプリカ、俺の頭から離れちゃダメだよ」

「きゅっ……」

仲間達はそれを振り切つても前に進んで行った。

ユウが足手纏いになってはいけないから、見ないふりをして仲間の後を付いて行く。

全力疾走なんて今までに必要ななかった事だが、肺が破裂してしまいうそなくらい、長い時間走っているような気になった。

ユウは次の扉のシステムを解除している仲間達にようやく追い付き、息を切らして前を見た。

「これが恐らく最後の扉だ。この奥に中核システムが　」

タクがハッキングを始めた直後だった。

「助けて下さい！」

一人の男がユウの足ににすがりついたのだ。

肌が爛れているところから、きつと何らかの実験に使われてしま

ったのだろっ。

「今、治します。安心して下さいね」

許せない、と怒りが込み上げてきた。

何の罪もない人間をなぜ、実験用のモルモットとして使用し、こんな事にしてしまうのだろうか。

ユウはポシエットからオカリナを取り出し、その場にしゃがんで癒しの曲を吹いた。

だが、爛れた肌は元には戻らず、どれほど自分が無力なのかを思い知らされるだけだった。

「ありがとうございます……」

それでも礼を言われるだけで、今にも泣きそうになる。

何も出来ないのに、どうして。

「開いたぜ」

扉が自動的に開き、タクが中に入った時、

「間に合ったか！ そうはさせんぞ！」

銃を構えた、先ほど相手にしていた研究員よりも強そうなそれらが背後から現れ、一発だけだが、治療した男性の足に銃弾を打ち込んだ。

打たれた男は悲鳴を上げる。

ズボンの上から血を滲ませて助けを求める彼に、再びオカリナを吹く事しか出来ないユウが嫌だった。

「貴様っ……」

瞬時にキラ達はその研究員と戦い始めたが、ユウはその役にも立てず、軽い外傷を癒すしか出来ないのだ。

そう思っていると、オカリナに刻まれた紋章が僅かに光った気がした。

いつもと同じ曲を奏でている筈が、先ほどの効果とは違い、みるみる男性の肌の爛れが治っていく。

不思議とその力は、長い研究所を走り回り、戦い疲れたハジメ達三人も癒していたようだ。

「よくやった、ユウ」

そう褒められたかと思えば、次の瞬間には、ハジメは新しく見せた闇の力を纏う剣で研究員たちを切り裂いた。

戦い慣れしていないユウやタクは、その光景から目を逸らす。

「ありがとうございます。貴方がたのおかげで助かりました」

治療を終えた男性は普通の青年で、ユウに抱き付いて礼を言った。

「いいんですよ。無事で何よりです」

助ける事が出来て良かった、とユウは笑った。

「それより、貴方はどうしてここに？」

キラはその青年と視線を合わせて訊いた。

「私はレーライ村のジョンと言います。五日前に何者かに連れて来られ、数時間前に実験のようなものが始まりまして……幸い研究員は何らかの騒ぎで中断したのですが、その隙を逃げて来たところでした」

黒に近い茶髪の前髪を掻き分け、ジョンは冷や汗を拭った。

「他の実験台にされた人は……？」

「私以外は失敗し、死体を放置する部屋に容れられました」

「すまなかった。俺はこの責任者の息子だ。金で済む問題ではないが、後で多額の賠償金を払いたい」

カイはジョンに向かって土下座の形で謝罪をした。

まだ生まれてから二十年にも満たない息子が、父親の責任を自ら負わなければならない現状なのだ。

最低だ、とユウは心の中でシアンを非難した。こんな事はカイには言えないけど、どんな理由があっても許されない事だと思うのだ。
「メリア様、ですよ。いいんです。貴方は悪くないんですから、レーライ村に帰してくださいださればそれで」

水色の髪と眼をしたメリア家の血筋はやはり有名なようだ。

ジョンが人のいい人物だったからこそ、この場でカイはこっぴどく叱られずに済んだのかも知れないのに。

「約束する。絶対に村へ帰す。二度と貴公のような被害者は出さな

い、と」

いつもより畏まった態度を示すカイは、貴族らしい物言いで謝罪を続けた。

「も、もういいんですよ。助かったんですし」

その様子にジヨンは少し困っている素振りを見せた。

貴族にここまで謝罪されたら、普通の人間は大抵萎縮してしまうだろう。

「……シアン・メリアがいない間に、この研究所を爆破します。生存者は貴方だけですな？」

「は、はい……」

「では、タクさん。爆破するように仕込めますか？」

キラの目はいつもより真剣だった。彼も怒っているのだろうか。

「待つて。研究員の人たちは？」

先ほどの研究員はハジメが殺したものの、ほとんどは気絶させただけの者が多いのだ。

まさかキラは、彼らも一緒に爆破させよう、という考えなのだろうか。

「ユウ。ここまでしたのは誰だ？ もし誰かが生き残り、外部に情報が漏れたとしよう。次の被害者が出ないと断定出来るのか？」

断定は出来ない。

ハジメやキラが言うのも仕方ないだろう。

「そう、ですね。俺が甘かった……ごめん」

浅はかな考えでまた犠牲が出たら　と考える事ができた。

今度は自分の善意で人が傷付いたり、死んだりしなくて済むのだ。ハジメがそれを止めてくれて、納得出来るような理屈を並べてくれたからか、ユウはあきらめざるを得なかった。

「いいんだ。ユウは小さいんだから、人が死ぬのに戸惑うのも当たり前前だろ」

だが、カイに頭を撫でられて少し安心する。

暫くの間、タクとキラは一緒に奥の部屋へと入り、ずっとよく分

からないようなコンピュータを弄り続けていた。

ユウも途中で見てみたのだが、幼い頃から勉強しているか、或いは馴染んでいなければ、使うのは不可能そうな機械ばかりだ。

リギン村にはこんなにくさんの機械はなかったからか、ここよりももつと都会のハイムルはもつとすごいのかと思ってしまう。きつと人間よりもロボットが多く出歩いているのだ。

長時間の間に渡ってだったから、その間にアマネとジョンを先に研究所の外に出させ、タクとキラは真剣に操作を行っていた。

二人がコンピュータを作動してから二時間ほど経ち、ようやく彼らが部屋から出て来た。

その部屋よりひとつ前にある部屋で待機していたユウとハジメとカイは、やつとのことに出て来た二人を同時に見上げる事になったのだ。

「五分後に爆破するよう、無理矢理プログラムを組み込みました。急いで出ますよ」

そう言ったキラは、タクと一緒に走り始めた。

広い研究所なので、全力疾走で駆けても五分でぎりぎりくらいだ。残りの三人も彼らに続いて走り出した。

「タク！ 何で十分内にセツトしなかった!？」

「爆破するだけでもかなり難しかったんだ。結局延ばせて五分だった」

「だからアマネとジョンを先に行かせたんだな？」

走りながら呑気に喋る二人は、本当の親友だった。

「喋らず走りなさい!」

キラから怒られた二人はそれに答え、走り続ける。

研究所は爆破され、周りから少し離れていたので被害はなかったのだが、それでも見物人は多かった。

何とか昼までに終わったので、ユウ達はベヒケルでシアン達を追い掛ける事にした。彼らが朝に出発したのなら、たった数時間の違

いでレーライ村に辿り着けるのだ。

ベヒケルという乗り物は、幌馬車が馬を使わずに自動で動くようになった車のようなもので、街から街への移動には大抵これか幌馬車が使われる。

ただ、リギン村で持っている人は、必要に迫られていなかったの
で少なかった。

ベヒケルはタクが運転してくれて、ちょうどジョンを含めた六人
が乗れるほどのスペースはある。

後ろの荷物置き場のような場所に六人くらいが乗れる、ちょうど
いくらいのスペースがあった。

ジョンは研究所の生活に疲れてか、ベヒケルに乗ってすぐに眠っ
てしまい、後部の席で起きているのはいつもの五人だけになった。

「そう言えば、カイの初恋の相手とは？」

車が発した直後、珍しくハジメが茶化すような事をタクに訊い
た。

「あー、ソラ姫様だよ」

「姫え!？」

その答えに訊いた本人よりもユウの方が驚愕してしまい、それに
気付いた後に思わず顔を赤らめた。

姫と言えば、トワイライトの娘に当たる人物の事を指すのだろう
か。

だが、トワイライトの後継者は既にナイトという女性だというこ
とが決まっているのだと、キラの授業で聞いた覚えがある。

「トワイライト陛下にはもう一人娘がいると聞きましたが……その
方なのですね」

納得したのか、キラは頷いて自己解決をしていた。

「ナイト殿下の妹の、ソラ様な。ソラ様は後継者じゃないので割り
と自由な生活をしていらっしやるから、カイと幼馴染みなんだ」

タクは笑いながら話を進めた。

「たまに前触れもなく雷や雨が降るだろ？ あれ、ソラ様の仕業な

んだよ」

前触れもない雨や雷と言えば、まさにカイと会ったあの日がそうだった。

暴走したカイの身体を治してくれたのはソラの雨　大量の水だったのだろうか。

「あつたな。カイが暴走した時に。あの雨がなければ死んでいただろう」

ハジメは腕を組み、ニヤニヤと笑っている。

「でも雷は嫌だなあ」

膝の上に乗ったパプリカに切ったポテトをやりながら、ユウは雷のことを思い出して身震いした。

「あー、もう。やめろって！　ソラ様はどうせ俺の事なんて親友としか思ってませんよーだ！」

周りがソラの話で盛り上がったからか、カイがふてくされた様子を見せた。

もうすぐ砂漠だというのに、この様では少し暑苦しい来もする。

「親友ならいいだろ」

ハジメはカイの肩をぽんと叩いたが、

「はあ？　何がだよ？」

「まあまあ。彼は相手にされない寂しさからカイの事を訊いたんですし、そつとしておきましょう」

「へー。ハジメって肝心な奴にはモテないんだな」

と今度は彼が二人に茶化される番になってしまったようだ。

ユウは話題に付いて行けず、苦笑いをして賑やかな三人組を見ていた。

ハジメもキラモ一見は冷静で大人な人に見えるが、それでもやはり恋愛をしているのだと思うと、人間臭さが身に染みる。

「兄さんは好きな人とかいるの？」

ふいにアマネに訊いてみた。

五人の中では一番無口なアマネも、好きだと思える人はいるのだ

ろうか。

「好きなひと……？」

しん、とその場に緊張感が張られる。

何故か残りの三人が耳を傾けているのだ。

「キラさんが好き」

アマネの答えにカイが笑い出す。

「ははは。良かったな、キラ」

「楽しそうですねえ、カイ」

ユウはゾツとした。

明らかにキラがああ『腹黒スマイル』を見せているのに、カイが全くと言っていいほど気付いていないからだ。

逆らったらどうなるのだろう　ユウは半分好奇心があったが、それでもカイに気付かせようとする。後が怖いのだ。

次の瞬間、ベヒケル全体が揺れた。

「何だ！？」

キラがキレてしまう前で良かった、とどこからともなく鞭のような物を持ち出していた彼を見て思ったが、どうやらそれどころではないようだ。

「人がいたから急ブレーキを掛けた……しかし、砂漠に人？　旅人にしては多いよな」

タクが指したのは、前から大人数で歩いてくる、紅い目をした人々だった。

ナリユエ族がアマネを追って、それも大勢でやって来たのだ。

「タク、そのままベヒケル止めてるんだぞ。アマネとユウとジョンは任せたからな」

「あ、ああ」

そう言うときカイは先に飛び降りて行ったハジメとキラに続き、銃を構えてナリユエ族に立ち向かって行った。

ユウもオカリナを装備し、傷付いた仲間をいつでも回復させる準備は出来ていた。

ハジメが振る剣には、目に見えるほどの大量の闇のスロナが放出され、一気に敵を切り裂いていくほどの威力を持つ。

キラの弓は普通の矢以外にも氷で出来た矢や炎で出来た矢を、風の力を使って敵を完全に仕留めている。

カイはスナイダーと戦った時のように、両手の銃から次々と炎で出来た弾を発射し、それでも近付いてきた敵には得意の体術で蹴りをいれていた。

三人ともかなり大きな戦力だが、敵の数は半端ではなく、疲れた彼らを癒すのにも遅れをとってしまう。

なぜナリユエ族に場所を知られたのだろうか。

どうにか敵は全員消滅したが、疑問が残ってしまう戦いだった。

「あいつら、何なんだ？」

タクはおびえた様子で運転を再開した。

「あれがルクリア人なんだと。死んだら消えたら？ アマネを狙ってるから、ああするしかないんだよ」

カイはせつなそうに銃をしまった。

ちょうど今から通ろうとしている箇所が、カイとスナイダーが戦った場所なのだ。近くに小さなサボテンがあったから間違いはない。少し遠くの砂漠だったが、そこに金色に光るものがあるのが分かった。

「タクさん。ちょっと止めてください！」

「あ、うん？」

タクに頼んでベヒケルを止めてもらい、それを拾いに行った。

人間の指にはめるとしても少し大きめのサイズで、かと言って腕にはめるには小さすぎるような、純金製のリングが落ちていた。

その内側の砂をはたいて見てみると、小さく『スナイダー』と彫つてある文字が浮き出てくる。

ユウは即座にベヒケルに戻り、もういいです、とタクに告げた。

「カイ、これ……」

拾った物をカイに差し出した。

「スナイダーに付けてたやつだ。　　ありがとう、ユウ」

カイはそのリングの一部を炎の力で溶かし、自分の耳に穴を空けてそれをピアス代わりに付けた。

「ずっと一緒に、スナイダー」

寂しそうにそう笑って　。

ベヒケルに乗っていると、あっと言う間にレーライ村に着いていた。

掛かった時間は五日と少しだ。

途中で運転手であるタクを休ませるにはそれくらいの時間があればいいし、何より歩いて何週間も掛かる場所に、たったそれだけの時間で行けるのが感動的である。

デサルト砂漠を越え、故郷であるリギン村を通り過ぎ、更にはカイと出会ったグロウスの森も、歩く速度とは比べ物にならない速いスピードで抜けて行った。

砂漠はともかく、平原や森に入ると、途中の景色を見るのが楽しくなる。

グロウスの森を抜けた時、もう少し北に進んだらレーライ村があるのを知っていたからか、少しがっかりする気持ちもあった。

その一方で、やっとジョンを故郷に送る事が出来たので、嬉しい気持ちもあったのだが。

「ユウくん、ありがとう。君がいないと死んでいたよ。こんな物で悪いけど　」

ベヒケルから降りる前、五日間一緒に過ごしたジョンが言った。

ユウは何かと思って首を傾けていたが、彼がポケットからピンク色のリボンを取り出し、抱いていたパプリカの頭に付けてくれたのだ。

「いいんですか……？」

「いいんだよ。私は織物を織る仕事をしているから、ちょうど良かったよ」

「ありがとう！」

オスだけど、リボンを付けたパプリカは可愛い。

嬉しくなったユウは、それから彼を家まで送って行く途中、パプリカを抱いて鼻歌を歌っていた。

「きゆう？」

当の本人は何をされたかよく分かっていない様子で、首を傾げてユウを見上げるが、その仕草もまた可愛らしいのだ。

「見て見て、カイ。可愛いだろ」

「おっ、ホントだな！」

歳が近いけど近過ぎないカイは、ユウにとってアマネよりも『頼れる兄』という存在になりつつあった。

キラに懐くアマネの気持ち少し分かった気がしたのだ。

「ユウはカイと仲いいね」

あまり口を聞かないアマネが、二人を交互に見つめて呟いた。

「うん。まあ……お兄ちゃんみたいな感じかな？ なっ、カイ」

「ああ。そうだよ。何ならユウは俺の弟になれよな！」

冗談混じりに会話をしていると、

「待て。何故よりによってカイのものになるんだ？」

急にハジメが割り込んで来た。

どうしたのだろうか。子供同士の会話に、いつも冷静な彼が割り込んでくるなんて。

ハジメの質問に答えるよりも先に疑問が浮かんで来たために、ユウは固まったまま彼を見上げていた。

「ハジメさん？ カイのものじゃなくて、弟ですよ」

一時してハジメが誤解している事が分かったので、ユウは笑顔でそう言った。

そのすぐ後にカイがハジメの肩を叩き、

「ドンマイ！」

と言ったのだが、一体何に対してそう言ったのかが分からなかった。

歩きながらキラやタク、それにジョンまでクスクスと笑っている。何か変な事を言ってしまったのだろうか。

恥ずかしくなったユウは、きつくパプリカを抱き締めた。

レーライ村はリギン村よりも人口が多いものの、スタンデシティほどの機械の設備はそんなに見掛けない。

普通の家々の中に市場があり、果物や野菜などの食料を安価で売っている。空気もいいし、本当の目的も忘れてしまいそうだった。

布がたくさん並べてある店の前まで歩くと、ジョンがそこで足を止めた。

「私の店はここです。ありがとうございました。お礼と言っては何ですが、近所の知り合いにもメリア家の方がいたら報告するように言っておきますね」

ジョンはお辞儀をすると、店の奥に入って行った。

店の中にはちょうど両親がいて、温かく迎えられるところまで見送り、ユウ達は本来の目的を果たそうと、再び歩き始める。

「親父が迷惑掛けて申し訳なかったな……」

父親がやった事に一番責任を感じているのは、息子のカイの方だった。

彼はメリア家の子息だとは言っても、一番末の兄弟の筈だ。それがこんなに辛い目に遭い、責任を取るなんて間違っているのではないだろうか。

「カイは兄弟がいらっしゃるのですよね？」

同じ事を考えたのか、キラが代わりに言った。

「ああ。上の兄弟は四人いるけど、本妻の子供は俺だけだ。母さんになかなか子供が出来なかったから、俺が生まれる前に色んな女遊びがやって……本妻の子だからって俺は引き取られたけど、母さんはあつさり捨てられて自殺したんだ」

カイは思い出したのか、目付きを変えて拳を握っていた。

「じゃあ、メリア家を継ぐのは誰になるんだ？」

「俺を含めた男の三人が候補に上がった。一人は事故で死んだだけ

ど。親父は俺に継がせたくなかったんだろっな。長男が一番可愛いんだし」

怒りに任せてカイは速足で進んで行った。
両親に愛されていたユウには、その気持ちを身を持って知る事が出来ないだろう。

今の彼に掛ける言葉が何一つ見付からず、ユウはただその頼りない背中を見つめていた。

自分に出来るなら慰めてやりたい。母親の事もあったんだから、本当なら彼は苦痛から解放されてもいいと思うのに。

村を吹き抜ける春の風は、まだ少し冷たかった。

「カイ、生きていたのか……」

リギン村の中心部で、その声と共にカイは立ち止まった。

彼と同じ水色の髪と瞳をした人物が、正装の男三人を従えて歩いている。

「シアン・メリア　よく実の息子を森に捨てやがったよな。レイライ村の人を拉致しやがったのも、トワイライト陛下を暗殺しようとしてるのもお前だろ！」

今まで見せなかった目付きで怒り狂い、村人が何人も聞いている中で大声で叫び、むしろそれをわざと全員に聞かせるようにカイは言った。

村人たちがざわめき出す。

メリア家はアスカでは有名な貴族で、それも国王に仕える家系なのだから、そんな不祥事はすぐに伝わってしまう。

シアンはカイを見くびっていたようだが、彼は勉強をしようとしていないだけで、頭はいいのだ。

「ま、待て。向こうで話そうではないか」

冷静に言ったシアンだったが、かなり焦っている様子だった。

護衛役の男達が銃口をカイに向ける。

「本当ですか？」

「私の息子をさらったのはメリア様なのですか？」

村人が次々に問い質しに来たのが、カイの思惑だったようだ。

「そうなんです。スタンデシテイで違法の研究を行い、多くの犠牲者を出しています。私はこの方々に助けられました」

騒ぎに駆け付けたジョンが言うと、村人の騒ぎは一層と大きさを増し、中には石などを投げってくる者も多かった。

「シアン様に何をする！」

途端、ボディーガードの三人が銃を撃ち始め、村人に怪我はなかったものの、村人の声を絶叫に変えた。

しかし、一般人には銃弾が当たらなかったものの、アマネの脇腹を貫通してしまっていた。

辺りに沈黙が流れる。

その隙にシアン達は逃げ、村人の中でも若い男が数人、彼らの行方を追った。

「アマネ……！」

冷静さを失ったキラは敬称を付けるのさえ忘れ、倒れたアマネに駆け寄った。

ユウは身体が震えて立てなくなり、腰の力が抜け、一気にその場に座り込んだ。

実の兄が撃たれ、血を流している。

早く回復しなければならぬ　けれども、まともに曲が吹けない精神状態で、『カリユダ』の術を発動する事もままならなかった。

「親父の奴、絶対許さねえ！」

熱気を帯びたカイは遠くからだが見え、銃口をシアンに向け、何発か弾を撃った。

しかし、走っている物体を打ち抜くのは至難の技で、なかなか当たらない事は分かっていたらしく、舌打ちをすると、

「キラ。俺とカイはシアンを追い掛ける。お前はユウとアマネとタクを守っておけ」

ハジメが気を利かせて追い掛ける事を宣言し、二人は走ってシアン達を追い詰めに行った。

「アマネ……アマネ様……」

まるで実の兄弟が死の間際にいるような感覚で、キラは目を開けないアマネを必死に揺さぶり続ける。

やっとのことでユウは技を発動出来たが、出血を止められた程度で、自分にも大いなる責任を感じてしまった。

「俺のせいで、兄さんが……」

動揺せずに技を素早く発動していたら、目を覚ましてくれたかも知れないのに。

「ユウ、お前のせいじゃない」

「きゅう……」

タクとパプリカは慰めてくれるものの、キラはそれどころではなかった。

倒れたアマネを抱き締め、無言で座り込むキラの姿は、たくさんの生徒達に尊敬されている彼の姿とは、異なる形でユウの目に焼き付いてしまう。

それだけ、キラはアマネを大切にしていた。

「キラさん、ダメだよ……ボクはだいじょうぶ、だから、早くカイたちを追いかけるべき」

一瞬だけ目を覚ましたアマネは、それだけ言って再び眠りについてた。

「兄さん!？」

「大丈夫です。安心出来ました。タク、アマネを頼んでもよろしいですか？」

すぐに冷静な声に戻したが、顔は怒りで煮えくり返っている様子だった。

「いいぜ。アマネくらいなら背負えるし、シアンを追いつけよう!」
タクは弓を構えるキラからアマネを預かり、大切なものを扱うように丁寧に背中に乗せた後、そのままの体勢で走り始める。

ユウもパプリカを頭に掴まらせ、キラとタクに付いて走っていた。アマネは死んではないようだが、両親の死以上の精神的なシヨ

ツクは、二度と感ぜさせたくないと思つていたのに。

今度の出来事がまた心の傷となり、今以上に感情がなくなったらキラを好きだとさえ思わなくなったら、アマネはどうすればいいのだろう。

今回の事もあり、キラもシアンが絶対に許せなくなったのは言うまでもないのだ。

カイ達を追つて行くと、村人と共に引き返してくる二人の姿があった。

「タク、お願いだ。親父達、ベヒケルでハイルムに行つたんだ！陛下を暗殺するつもりだ！」

息を切らしたカイが、アマネを背負うタクに訴えた。

「分かった。ベヒケルで追い掛けよう。だが、向こうは最新型だ……全力疾走じゃないと追いつかないな」

「そうと決まれば、アマネ様は僕にお任せ下さい」

「ああ、頼む」

タクはキラにアマネを渡し、ベヒケルの鍵を握って走り出した。

「そこで待っていてくれ！　ここまで運転して来るから！」

タクという心強い仲間がいて良かった、と安心した。

一方で、ユウはアマネの体調が気になって仕方なかった。

彼は身体自体も普通の人より弱いから、急所を打たれなかったものの、銃弾で貫かれただけでもショックは大きい。

周りの雰囲気も、このレーライ村に來た時とは明らかに変わっている。

村人は先ほどの騒ぎでざわめき続け、村人から村人へとメリア家の噂が広まっていく。

辿り着く前はまだ温厚だったキラも、今は端正なその顔を怒りで歪め、握り拳を震わせている。

カイはスナイダーの遺品である、リング状のピアスを指で触りながら、父親に対して相変わらず憤慨していた。

ユウも彼らと同じで、大切な友人を幼い頃から心に傷を負わせ、

更には兄を死の淵まで追いやったシアンが許せない気持ちでいつぱいだ。

冷静な人だと言えばハジメだけで、そんな彼も顔には出さないものの、怒りを感じているのは確かなようだ。

村の外れなのが幸いしてか、すぐにタクはベヒケルに乗ってやって来た。

それまでに少し時間が掛かったが、どうやらベヒケルの燃料と食料を買ってくれていたようだ。

「早く乗れよ。何にせよ、俺もシアンが許せねえ。今までの事もあるしな」

タクは黒ぶちの眼鏡を痕がついてしまいそうなほど、強い力を指に込めて上げた。

それから間もなくベヒケルは発車したが、全員の心境は複雑なものだった。

来たばかりの村を通り過ぎ、見えなくなるまで見つめ続け、心の中でジョンに届かぬ礼を言う。

日が暮れた事も忘れ、仲間達は眠りに就く中、一人で空を仰いでいた。

「きゅっ！ きゅきゅきゅっ！」

膝を抱いて伏せていると、パプリカが構って欲しいと言わんばかりに飛び跳ね、ユウの足を嘴で甘噛みする。

そんなファウを見て、泣きたい気持ちになった。

「パプリカ……」

守りたい。

カイやアマネ、それにアスカ全体を。シアンの好きにはさせてもらえない。

ルクリアに行くのはもう少し先の事になりそうだが、今はナリュ工族に追われているというのより、シアン達を追ってトワイライト暗殺を阻止しなければならないという、責任を感じる意思の方が大きいように思えた。

頬に当たる風が、パプリカの頭についたりボンをなびかせている。ユウは小さな彼を小さな胸で抱き締め、その羽毛の中に顔をうずめ、目を閉じた。

少しくすぐったいけれど、温かくて心地よい。

「俺、もつとみんなの役に立ちたいよ。カイを呪いから解放したい」

まるで誰かに抱かれているようで安心し、見られていない事が明らかだったので、少しだけ弱音を吐いた。

パプリカが頭を撫でてくれる。いや、違う。パプリカはユウの胸の中で呼吸をしているのだ。

では、この感覚は何なのだろうか。

「泣いてないのか」

見上げると、いつも弱音を聞いてくれる人物だったので、ユウは安堵して微笑んだ。

「ハジメさん。いつも俺のこと、気に掛けてくれてありがとう」

思えば、彼は他の誰よりユウを気にしてくれている。

「気になるだけだ。俺のは一方的だろ？」

「そんなこと、ないです。ハジメさんは仲間だから、大切に思ってますよ」

「……そうか」

ハジメは上着を脱ぎ、それをユウに着せた。

「ハジメさん？」

突然の行動に戸惑う。

「今夜は冷える。風邪、引くなよ。俺は平気だが、お前が引いたらダメだ」

確かに、回復役がいなければ、何時も続く戦闘は少し辛いものがあるのかも知れない。

「ありがとう。でも、あなたも気をつけてくださいね」

「分かってる」

ハジメと少し会話をし、気がついたらパプリカも眠っていた。

明日も早いだろうし、ユウがすっかりしなければ、アマネが落ちて置いて心を休める事が出来ないのだ。

そう思い、温かい環境で一夜を過ごした。

レーライ村を北西に行つたところに、アスカブリッジと呼ばれる、二つの大陸を結んでいる橋がある。

その橋を越え、もうひとつの大陸に渡つたところ、更に南西に進んで行くと、目的地であるハイムルに到着した。

二日掛けてハイムルに着いたが、運転手のタクはあまり寝ていない状態である。

外から見るだけでも、ハイムルという街は首都圏なだけあり、かなり大きな城が聳え立っている。

数日前にスタンデシテイを見たばかりだが、そこよりは機械化している訳ではない。ただ、人口が莫大で、老若男女構わず忙しそうで、タイルで出来た道を行ったり来たりしている。

ユウ達六人がベヒケルで到着したのが昼間の事だったのだが、街の中に入るなり、何らかの騒ぎが起きていた。

「どうしたんですか？」

街の素晴らしさに圧倒されたユウは、一番にその場に駆け付けた。「ソラ様が行方不明になられたんだ。昨日の夜から城に帰っていない」

街の人はそう言うなり、カイを見付けて騒ぎの声を大きくした。

「カイ様！ ソラ様が……」

ユウと住民の会話を聞いていたカイは、目の色を変えて前に出て来た。

「カイ。話が変わらないか？ 奴等がハイムルに着いたのは、最新のベヒケルの速度から見て、恐らく昨夜だぞ。だったら」

ソラという姫がいなくなった理由は、シアン達にあるのかも知れない。

タクはそう言いたいのだと、その場にいた全員が悟っただろう。

「トワイライト陛下の所在は？」

「家臣も色々な場所を探したのですが、アスカ・サンクチュアリは王家の方しか入れませんから、つい先ほどお一人でそちらへ向かわれました」

「分かった。ついでに訊くが、父上は？」

大衆に聞こえるようにカイは言ったが、暫くは返事が返って来なかった。

アスカ・サンクチュアリ　以前、授業で聞いた事のある場所だ。国王が占いによって政治を行う場所であり、見習いの王族が魔術を学ぶ場所であるので、決してアスカ王族以外は立ち入ってはならない場所だ。

住民がキヨロキヨロと辺りを見回す中、一人の男が言った。

「昨夜見ました。この街を抜けて、確か」

こちらの大陸は王族が魔術を習う場所とされるため、ハイムルとアスカ・サンクチュアリ以外の街や施設は皆無である。

「ありがとう。前を通してくれ」

カイがそう言うだけで住民達は次々に道を開け、その中をユウ達は歩いて行く事になった。

これを間近で見ると、メリア家の権限がどれだけ大きいのが分かる。

「どうするつもりですか？　一般市民がアスカ・サンクチュアリに入るのは禁じられています」

歩いてアスカ・サンクチュアリに行く途中、キラが言った。

「このまま陛下とソラ様を放つとく訳にはいかねえし、それで犯罪に問われるんなら、メリアの名を捨ててハイムルを出るよ」

それくらいの覚悟くらいは出来ている、とカイは鉢巻きを締め直し、そのまま速足で歩き続けた。

まだ来たばかりのハイムルを急いで出て、更に南西に進んで行く。途中でアマネが歩き疲れてキラに背負われた。

アマネと言えば、レーライ村の騒動の一件があつて、やはり少しショックを受けているようだった。

それでも本人には「仲間に心配を掛けたくない」という意思があるらしく、今以上に感情を失ってしまう事からは避けられた。

しかし、キラはシアンが許せないようだ。

ベヒケルで旅したこの二日間、キラは弓を欠かさず磨いていた。

それも「首を洗って待っている」とか「きついお仕置きが必要なのですよ」とか、独り言をぶつぶつと呟きながらだ。

仲がいいらしいハジメも、さすがにその様子には引いていたのを覚えている。

こんなに感情的になった彼を見たのはユウも初めてだったが、どうやらアマネはそうでもないらしく、「キラさん、あときみたい」と言っていた。

アマネの言った「あるとき」の詳細は怖くて誰も訊けなかったが、リギン村で生徒以外にもその腹黒さを見せていたのだろうか。

ある意味一番恐ろしく、それでもアマネだけには甘いキラの性格が掴めない。

「ここか……？ アスカ・サンクチュアリというのは」

アスカ・サンクチュアリの前まで辿り着いた時、ハジメが不思議そうな顔で見上げた。

「ええ。間違いないでしょう」

天まで続いていそうな高い塔　先端は雲で隠れていて、どこまで高いのかは想像もつかないところだ。

「確かに此処はルクリアと繋がっている。俺がアスカに来た時、最初に降りたのがこの塔の頂上だ」

ハジメの言う事が本当なら、思いもしない繋がりである。

それで一般人を近付けないのもひとつの理由なのだろうか。

「とにかく先に進もう」

そう率先して赴いたカイは、どこか焦っているように思えた。

彼がそうなるのも無理はない。

初恋の人がいなくなり、おまけに自分の父親が一国の王を手には掛けようとしている中、冷静になれないのも仕方ないのだ。

「カイ、落ち着けて。住民によると、陛下がここに着いたのもついさっきだ。俺達が急いで、陛下に追い付けばいい」

タクはカイをなだめるように言った。

「そうだな。悪い、皆。もう少し付き合ってくれるか？」

風に赤い鉢巻きと片方の耳だけに付けたリングを揺らし、カイはユウ達を振り向いた。

「カイはもう、俺達にとっても大事な仲間だよ」

ハジメやキラと顔を見合わせた後、ユウは笑って言った。

「ありがとう」

これで全員の意思が固まったようだ。

アスカの旅はこれで終わる。いや、僅かの間だったが、カイという兄貴分と会えて楽しかった。

アスカ・サンクチュアリの塔に足を踏み入れ、トワイライトとソラの行方と、倒すべきシアンの後を追う事になったのだ。

アスカ・サンクチュアリの中は、大理石で作られた螺旋階段になっている。

窓がたくさんあり、そこから漏れる日差しが壁の紅と碧と金の装飾物を照らしていて、すごく綺麗な場所だと感じられた。

吹き抜ける風は冷たくもなく、かと言って生温い訳でもない。ちょうどいい温度の風が肌に当たるのが気持ちいいほどに、中の気候は素晴らしいものである。

しかし、何階もある螺旋階段を上って行くのは、体力的にも精神的にもかなりの負荷が掛かりそうだ。

それでも諦めるのは言語両断なので、ユウ達は仕方なく階段を急いで駆け上がるとした。急げばトワイライトに会えるのだ。

「ハジメ。エレベーターとかないのか？」

「ない。少なくとも、俺は普通に下りて来たが？」

「上りと下りは違うんだよ」

息を切らしながら喋るハジメとカイに、

「そこ、喋る暇があるなら走りなさい」

とキラが短い説教をした。

正論でもあるし、何より彼は自分の意思だとは言えど、アマネを背負って走っているのだ。

ハジメとカイはその姿に反論出来なかったのか、素直に頷き、そのまま走り続けていた。

「キラさん、無理しないでいいんだよ」

アマネはキラには気を遣っているようで、そんな事を言った。

「僕は平気です」

それに答えた彼は爽やかに笑い、アマネを本当に大切にしてくれているのだと、弟のユウからすると安心出来た。

天まで続いている塔だ。

当たり前のように螺旋階段はかなり長い。だが、ある程度まで進んで行ったのにもかかわらず、急に階段が途絶えてしまっている場所に突き当たった。

そこには古びた何らかの装置以外、その先に足場もなければエレベーターのような機械も見当たらない。

「その装置の上に乗れ」

不思議そうにキラが装置を物色すると、ハジメがそう命令した。

「これは一体……」

「俺は前に一度だけ此处に来ている。これで頂上までワープ出来るんだ」

長い階段を上っているのにひとつも息を切らず、ハジメはさつさとその装置の上に足を運んだ。

どうやら彼の言う通りのようだ。

その装置の上に足を踏み入れた途端、光の速度でハジメは消えてしまった。

授業で習った、魔法の力を応用して作る、ワープゾーンというもののはこれの事を指していたのだろうか。

カイは「知ってるんなら先に言えばいいのにな」とブツブツ言いながら、ユウとその装置に乗った。

瞬間的に景色は変わり、目の前にはほんの少しの階段の上にある、たくさん飾りがついた大きな扉が映し出される。

「この先にルクリアゲートがある。　ソラやトワイライトも、恐らくこの中だろう」

鍵の付いていない扉は、どうやら魔力に反応するようだ。

その中で唯一魔法が使えないタクだけは、触れても扉が開かず、中に入る事も不可能だった。

「俺はどっちにしろ戦えないし、お前らの健闘をここで祈っとく。死ぬなよ、みんな」

それだけのタクの言葉を聞いて、頷いた残りの五人は一気に扉をこじ開けた。

重い石で構成されたそれは、鈍い音を立ててゆっくりと開かれる。見ると、中には桃色の髪と瞳をした女性が二人とシアンとそのボディーガード、もう一人は誰か分からないが、メリア家の子息と思われる人物がいた。

トワイライトは今年で四十七歳になると聞いていたが、どちらの女性もかなり若々しく、まるで歳の近い姉妹を見ているようだった。綺麗な髪をひとつにまとめ、アスカ王族の紋章が入ったドレスを着ていて、自分よりも少し背の低い女の子を抱き締めている姿から、彼女がトワイライト・クレパスカル・ハイムル・アスカ　この国の女王だという事が分かる。

一方で、おとぎ話に出るような魔女の装束を纏っているおさげの少女の方が、行方不明となったソラだと言えるだろう。

シアンのボディーガードは怯えるトワイライトに銃口を向け、いつでも打てる準備が整っている、と言った様子だ。

知らないメリア家の男性は、カイよりも幾分か年上の成年で、落

ち着いた雰囲気があるものの、目は欲望に霞んでいるように思えた。そんな中に、ユウ達はトワイライトが殺される前に、入って来る事が出来たのだ。

「親父、こんなところで女いじめて楽しいか？」

カイの発言により、ボディーガードがトワイライトに向けていた銃口が、全て彼の方に移った。

彼はそれをもとめせず、惨めだな、と実の父親を嘲笑する。

「カイ！」

カイに気付いたソラは、絶望の淵に落とされた時、ひとつの希望の光を見た、というようなイメージで、顔つきががらりと変わった。銃の弾がカイを狙う。

「ソラ様。この出来の悪い子供より、私をお選び下さい」

知らないメリア家の子息が、ソラの表情を再び強張らせた。

「リキユード義兄さん、貴方までこの計画を……？」

「そうだよ、カイ。私はソラ様が小さい時から嫁にしよう、と思っていたんだがね。カイはその計画を邪魔したんだよ」

「まさかお前が……！？」

よく分らない身内同士の会話だったが、これだけは分かる。

このリキユードと呼ばれた成年も、ユウの兄貴分であるカイも、ソラに片思いしているということだ。

「カイ、それにその仲間達よ。死ぬ前に私がルクリアの研究をした理由を教えてやろうか？」

小さな銃を実の息子であるカイに向け、冷やかな態度でシアンは言った。

「知ってるぜ。お前、俺を手術してる時、研究員と話してたじゃないか」

カイはもう、シアンを「親父」とは呼ばなかった。

「あるルクリア人と契約したんだよな？ ルクリアの王抹殺に力を貸すから、アス力を自分の物にするんだろ」

「そうだ。その為にはルクリアの事を詳しく調べなければならなか

ったが、研究が楽しくてな。アスカ人をルクリア人にするのが趣味になった。だが、まさか出来の悪いお前が第一成功体になるとは思わなかった」

自分に言われている訳ではないが、怒りが込み上げてくる。
人の命を何だと思っているのだろうか。

あの時、カイとジョンは偶然生き残ったけれど、他の実験台にされた人は既に何人も殺されているのだ。

「それでも一応は息子だ。情もあり、グロウスの森でせいぜい魔物に食われて死ぬがいい、と思って捨てたのだが、まさかお人好し共に拾われるとは……本当に情けない奴だ」

本当に彼はカイと同じ血が流れているのだろうか、とユウは心の中で何度も問いたくなる言葉を抑えた。

「お前こそ情けねえよ。お前は親父でもメリア家の貴族でもねえ……屑野郎だ」

その言葉に反応してか、シアンは銃の引き金を引いた。
銃弾はカイの肩を貫いたが、それで怯む彼ではない。

ユウもそれに合わせ、即座に装備していたオカリナを吹き、その傷と疲れを一気に癒していった。

「何……っ!？」

「ナイスだユウ」

反撃してシアンの手には蹴りを入れたカイは、その手から銃を払い落とした。

恐らく、これからが戦いの始まりだ。

「私が屑だと!? 私は魔術が使える! だからボディーガードも全員魔術の基礎を修得している……それでも屑だと言えるか!？」

狂ったようにシアンは氷の塊をカイに投げ付けようとしたが、

「危ないですよ、屑野郎 何ならゴミの方が良かったでしょう?」

口が悪くなったキラの矢に貫かれ、粉々に砕けて水となってしまった。

「貴様ら……！」

「屑」という言葉を激しく嫌悪しているシアンは、怒り狂った様子を見せた。

実はこれも、カイが言っていた作戦なのだ。

シアンも昔、カイのように骨肉の争いがあり、その中で勝ち抜いて、やっとの事で手に入れた地位のようだ。

だが、それから「何故こんな屑がメリア家に」という、他の親戚の声を聞くようになり、それから「屑」という言葉に敏感になったのだと言う。

それで冷静さを失ったところを、カイとキラが攻める、といった作戦を、昨夜二人で話し合っていたのだ。

お互い大切なものを傷付けられているので、普段の戦闘力の倍はよく動いている。

ユウも二人を援護し、光の幕でバリアを作ったり、持久戦で消耗した体力を回復したりという、自分の力を最大限に活かした技を使用した。

「民の大切な人を何の躊躇いもなく殺せる貴方が、国のトップに立てる筈がないでしょう」

低い声でそう言ったキラは、色の違うそれぞれの瞳を冷酷なものに変えていた。

容赦なくボディーガード達の脚を狙い、弓を引く。

キラの矢は確実に、一ミリも外さずに的を射る。

矢は強い風の力で威力を増し、シアンのボディーガードである、

三人の男の脚 アマネが打たれた箇所を貫いた。

「アマネやさらわれた方々の痛み、少しは分かったでしょうか？」
血を噴き出しているが、容赦なくキラは冷笑を浮かべた。

その光景にユウやソラ、トワイライトは目を逸らす。

「ま、待て。私はお前の父親だ」

先ほどまで余裕をかましていたシアンは、息子に銃を向けられて怯えていた。

「アマネ」

「……なに？」

「陛下とソラ様を連れて、タクと一緒にハイムルに戻れ」

「うん」

カイが言った後、アマネが手招きをし、トワイライトとソラは扉の外に出て行った。

「兄さん、パプリカもよろしく」

「うん」

アマネも二人が出たのを確認すると、ユウからパプリカを受け取って、重い扉をゆっくり閉めて外に出た。

しかし、リキュードだけは逃げる三人と殺されそうな父親を傍観し、見方によっては微笑んでいるようにも思える。

女性陣とアマネが部屋から出たのを確認すると、カイは汚いものを見る目付きで、再びシアンを睨み付けた。

シアンには魔術を使う気力も残っていないようだ。

「……覚悟は出来ていますか？」

再び弓を引き、キラは狙いを定めた。

「気絶程度にしてくれ。元々親父が雇っただけだし、後で刑罰が待っている」

「殺しはしませんよ　アマネを殺していたら、きっと殺すでしょうけどね」

キラは氷で出来た弓を放ち、少し弱めの風で三人の頭にぶつけ、思い通りに気絶させた。

残るは元凶であるシアンと、それを見るだけのリキュードだ。

「ここまで育ててくれたのは感謝してる。さよなら」

銃口から炎の塊が吐き出され、叫び声と共に身体が焼き尽くされる瞬間を目の当たりにした。

怖い。

そう思って座り込むと、ハジメに抱き留められた。

「耳を塞いでおけ。お前は見ないでいいから」

彼がそばにいて視界はその大きな手で塞いでくれたから、耳に響く声も気にならないで済んだ。

人が死ぬのが怖いのは、今も昔も変わらない感情だった。

鼻の奥をつんと刺激する感覚が走り、同時に目が濡れている事に気付く。

今回、戦闘に関して彼は目立った事は何もしなかったが、何より先にユウを気遣ってくれたのだ。

そんなハジメに迷惑を掛けたくなく、涙を堪えようという気持ちでいっぱいだった。

「ユウ、お前も帰した方が良かったな……ごめんな」

カイがそう言った時、ハジメがユウを解放する。

目を再び開いた時、焼かれていた者の全てが灰になっていた。

きつとそうなって、もう見ても痛々しいものでなくなったから、

ハジメは視界を遮るのは止めたのだろう。

「ううん。俺の事はいいから、カイはお義兄さんと話つけなきゃ」

ユウは立ち上がって笑った。

「その必要はねえ。なありキユード義兄さん？俺の呪い、お前が掛けたんだよな」

部屋の角で笑っていたリキユードを睨み、カイは低い声で言った。
「そつだよ。八年前、お前とソラ様が出会ってからだ……あと、跡継ぎ問題で邪魔になるからね。予め呪いを掛けておいて正解だったよつだ」

見たところ、ソラはリキユードの事は何一つ気にしておらず、どちらかと言えばカイが来た時に表情が変わっていた気がするのだ。

掌に闇のスロナを蓄積し、カイにそれを向けた。

「うわあああ！！」

頭を抱えて座り込んだカイは、身体の熱気が最高潮に達している様子だ。

「父上も死んだし、後はカイが死んだらメリア家も継げるし、ソラ様も僕の物だ」

歪んでいる。カイの話では、少なくともシアンはリキードだけは可愛がっていた筈なのだ。

「術者のスロナは受けてはいけません！ 受けてしまったら」

「死ぬよ。アンタ賢いな。ハイムルの学者か？ ……まあどっちにしろ、ここにいる奴は生きて帰さないけど」

カイは逃げられない状態だ。

それでも容赦なく、リキードは闇のスロナを放つ。

「ユウ様！」

「ユウ……？」

突発的で、考えなしの行動だった。

ハジメのそばから離れたユウは、カイを庇うようにスロナを全身で受けたのだ。

外傷的に痛い、と言うよりは、身体の中が真っ黒な何かに侵され、引き裂かれそうな感覚だと言った方が正しいだろう。

闇に圧迫され、目の前は真っ暗だった。

「ユウ、何してんだ！」

正氣に戻ったカイが慌ててユウに駆け寄り、残りの二人もそれに続いた。

幸い、ユウの場合は身体の奥底に眠る力 光のスロナがあつたため、その闇を中和する事が出来たようだ。

目を開くも、身体が重いのは確かである。

「カイはいい兄貴分だったから だから守ったの。まだ生きててほしかった」

そう笑ったのに、カイには「バカ」と言われてしまった。

ユウを紅い瞳で見つめていたハジメの手が頬に触れた。温かい体温を感じる。

同じ闇の力の使い手なのに、どうしてこんなにも違うのだろうか。

ユウはハジメの手を、最後の力を振り絞るように握った。

「ユウ……」

「俺には光があるから、大丈夫です」

「無理するな」

頬に触れていた手が離れ、リキユードの声が耳に響く。

「馬鹿か？ このガキが死んだところで、カイの呪いは避けられない　つまりは犬死になんだよ」

目を薄く開き、剣を握るハジメの姿を見つめた。

彼は今日、一度も戦おうとはしなかった。

キラやカイの復讐と後始末の手伝いのため、後衛のユウとアマネを攻撃から守っていてくれたのだ。

「ユウ、目を閉じてろ。一発で終わる」

言われた通りに目を閉じ、音だけを聞いていた。

鋭い刃物によって、生き物の肉が切れる音。特に人間のそれは鈍い音を醸し出し、とても壮快な気分にはなれないものだ。

その音が一度きりで、何か重い物が地面に落ちる音がした後、ハジメが剣をしまうのが分かった。

「キラ、カイ。どちらでもいい。ユウに見せない様に、始末してくれ」

言い捨てた彼の声は、いつもと少し違っているように思える。

目を閉じていたからだろうか。

いつの間にか身体の中を巡っていた闇のスロナは、ユウの中にある光のスロナによって完全に打ち消され、身体の重さは取れていた。だが、何か言われるまで、決して目を開こうとはしなかった。

地に落ちた物が何だったか、大体分かっていたからだ。

卑怯な考えだが、ユウは怖くて見たくなかった　そんな本音を言っと、やった本人の方が辛いかも知れないのに。

「義兄さん、昔は優しくったのに、何で……」

自己嫌悪しながら、炎の燃え上がる音と、カイが初めて泣きながらそう呟く声を、何も言えずに聞いていた。

耳に残る、シアンが叫んでいた声。

リキユードの首が地面に落ちる音。

最後に、カイがひとりで泣いた事。

メリア家の争いと後始末は、こうして幕を閉じたのだ。

「ユウ、もういいぞ。悪かったな」

痛いほどに優しいハジメ。

そろそろ慣れないといけないのに、まだ弱気で臆病な自分。

光が見えた後、また灰で作られた大きな山がひとつ、リキユードが立っていた場所に出ていた。

「親父、義兄さん、せめて墓は作るよ。俺は生まれて初めて人を殺した。それも義理の兄と実の父親だ。俺ももう、メリア家にはいられねえな。そこまでして欲しい地位でもなかった」

袋に灰を分けて入れながら、カイはユウ達に背中を向けて独り言を言っていた。

まだ十九歳の青年には重い出来事で、現実を受け入れたくないという気持ちと、殺してしまった罪悪感でいっぱいなのだろう。

「カイが継がなければ、メリア家はどうなるんだ？それに、カイはどうするつもりだよ！」

ユウとしては、カイのようない人がメリア家を継ぎ、また建て直して行けばいいと思ったのだ。

「俺を可愛がってくれたアトランティス義姉さんがいるから、頼んでみる。俺、ユウ達とルクリアに行こうと思うんだ」

「それは構わんが、ルクリアはアス力より過酷だ。タクやソラにも一生会わなくていいのなら、明日の早朝に付いて来い」

「そのつもりだ。この先もユウとアマネを守るよ」

カイが付いて来てくれるのは嬉しい。

だが、本当に良かったのだろうか。カイはもう、初恋の人にも、親友にも一生会えなくなってしまうのだ。

「ほら、このボディーガードの三人組、背負って帰るぞ。もちろんハジメとキラと俺でな！」

ここ会って何日かの間、どんなに辛い事があっても明るく振る舞うのがカイだということが分かり、ユウは複雑な心境に陥った。

彼の呪いは消えた。

悪い事をする父親もいなくなった。

これで良かったんだ　そう思うようにしなければ、乗り切ろうと努力するカイに、少し失礼だと思ったからだ。

シアンの雇っていた三人は無期懲役とされ、ハイムルとレーライ村以外への混乱は避ける事が出来た。

カイもメリア家を継ぐ事は諦め、その姉であるアトランティスに地位を譲ったのだ。

「アト義姉さん。タクと一緒に、陛下を支えて下さい」

彼女に継承権を譲った理由は二つあった。

ひとつは、カイが幼い頃から面倒を見てくれていた人が、一つ年上のアトランティスであるからだ。

もうひとつは、彼女の婚約者が親友のタクで、最後に親友に莫大なメリア家の遺産を譲ろうと言った考えのようだ。

今となつては、メリア家の遺産は全てカイの物であるが、それを放棄して親友と義姉に譲る、ということだ。

「お待ち下さい、陛下。二人が結婚したらシルベルト家の人間です！　メリア家とは関係ありません　それなら、長女である私がメリア家を引き継ぐのではないのですか？」

多くの大臣や貴族はそれを承認したが、ただ一人、それに反対する女性が現れた。

「ブルー義姉さん。メリア家は父上と義兄上の悪事があつて尚、陛下に仕える事が出来ますか？」

メリア家はシアンとリキユードが陛下を殺そうとした事が明かされ、今や貴族の間でも軽蔑の対象だ。

いつも冗談を言つて笑うカイからは信じられないほどに、真面目にこの先を見据えての話をしている。

「ブルー・メリア。私もカイ・メリアの言う通り、シアン達の件でメリア家を信じる事は出来ない」

アスカ国の王であるトワイライトも、カイの意見に賛成の意を示した。

彼女の左右にはソラと、次期王であるナイトが立っており、更にその左右には女の召使を従えている。

「……分かりました」

潔く諦めたかと思えば、ブツブツと独り言を言いながらブルーは引き下がった。ここでまだメリア家尊重の意見を言い続けていたら、それこそ大顰蹙を買ってしまうだろう。

トワイライトは微笑み、判定を下した。

「これからの補佐役はシルベルト家に、メリア家に雇われていた三人は終身刑とする。以上で緊急議会を解散する」

トワイライトの言葉により、緊急に集められた貴族や政治家は、「これはメリア家が下りて当然だろう」と満足そうな顔で帰って行った。

しかし、この件に関しては、ユウ達は『偶然グロウスの森を通り過ぎようとしたところ、カイを助けて協力した人々』ではない。議会というものを進めるカイと同じ、中心の部分で話を聞いていたためか、解散命令と共に緊張が抜けてしまった。

「尚、メリア家とシルベルト家、並びにその四人は残るように」

肩の力が抜けた途端、それを見計らうようにトワイライトが強く言い、ユウは再び身体に緊張の芯を入れた。

今回の事は今までにない出来事だったらしく、少なくとも貴族は急な議会で戸惑っているようにも見えた。

間もなく関わりのない貴族や政治家達が謁見の間を後にすると、トワイライトは軽く咳払いをした。

残されたのは、メリア家であるカイ、アトランティス、ブルー、シルベルト家であるタクとその父親、後はユウとハジメとアマネとキラだった。

「まず、個人的に気になったので残したのだが……カイ。シルベルト家に地位を譲り、メリア家の遺産はこれからどうする気だ？ 全てお前次第なのだぞ」

細くて綺麗な人なのに、どこかに威厳を持ち合わせているトワイ

ライトは、玉座に腰掛け、真剣な表情で訊いた。

全ての権利はカイに委ねられている。

継承権を持った候補者が、彼以外に全員他界してしまった今、メリア家の今後を決めるのも彼の仕事なのだ。

「半分はブルー義姉さんとアト義姉さんに、もう半分は　レーラ

イ村で行方不明になった、被害者の遺族の方々に、と思っています」

カイの意思は固いようで、それには義理でも姉であるブルーや、アトランティスも何も否定はしなかった。

「そうか。カイ、お前自身はどうするつもりだ？」

トワイライトの問いと共に、ソラも何か訊きたくてもどかしい様子を示していた。

「俺は如何なる理由があっても、父上を殺した身です。メリア家の後継者として相応しくない　彼らに付いてルクリアに行きます」

カイはユウ達を示すように片手で指し、決心を表した。

「待つてよ！　カイ、約束したじゃない。あなたは　」

ソラが急に赤い絨毯の敷かれた階段を駆け下り、カイのそばまで近付いてきた。

見つかった時の服装とは違う、少し歩きにくそうな長いドレスに身を包んだ彼女からは、トワイライトの面影が滲み出ている。

「ソラ様。俺は人殺しです。貴女の親友にも相応しくない」

そう言っただけのカイは、自分よりも少し小さいソラの頭を優しく撫でた。

どこかキラとアマネの関係に似ている二人がせつない。カイは許されない淡い恋心を抱いたまま、ルクリアに旅立ってしまうのだろうか。

「ソラ、戻りなさい。……カイの連れの四人、今回の件に関しては謝罪と感謝の意味を込め、何かしたいのだが」

トワイライトに言われて、仕方なく席に戻ったソラだったが、悲しそうな表情は変わらなかった。

彼女はカイを親友だとは思っていないのだろうか、とユウが疑

問に思ったのが、「約束した」という言葉からだった。

陛下の申し出には、その場に相応しいキラが答えてくれた。

「陛下、アスカ・サンクチュアリよりルクリアに行かせて下さい。それだけで構いません」

服にマントが付いているからか、或いは顔が整っているからか、赤い絨毯の上に立つキラは王子様のように見えた。

若い女性陣　ナイトとブルーが冷静な顔をしながらちらちらと見ているのだ。きっと彼女らもそう思っているに違いない。

「しかし、それだけでは……せめて、今夜だけは城に泊まって行ってくれ。感謝の気持ちが尽きない」

「そのお気持ち、有り難く受け取ります」

キラはそれだけ言って下がった。

「よし、その四人とカイを客室に通せ」

「かしこまりました」

トワイライトの命令により、いつものメンバーになったユウ達は、客室と言われた広い部屋に通された。

中はベッドが五つもあり、その上シャワー室や洗面所など、色んな設備が整っている。それでもまだスペースが余ってしまうほどだ。貧しかったユウは、今までにこれほど広い部屋に泊まった事はない、と思い、わくわくした気持ちで部屋を見回した。

「わぁ、すごい！」

メイドが部屋から出ると、ユウはふかふかのベッドに飛び込んだ。「きゅきゅー！」

ずっと議会でおとなしくしていたパプリカだったが、彼もまた緊張が抜けたようで、ユウの腕からすり抜けてベッドで飛び跳ねている。

小さな魔物であるパプリカと城のベッドで遊び、喜ぶ自分がまるで子供な事に気付き、ふと周りを見る。

それでも一応、自覚はあまりないけどレイルの王族だ。

しかし、王族でもないカイやハジメ、キラの方が落ち着いている。

一方で、アマネはユウと同じ行動を起こしていた。

「はは、ユウはガキだなあ」

カイはそう言っ、やっ、と一段落着いたな、とユウの隣りに腰掛けた。

「ガキじゃないやい。貧乏人には珍しいの！」

そう言っ、頬を膨らませるから、「ガキ」だと言われてしまうのに。

飛び跳ねるパプリカを片手で捕まえ、暴れる彼を見てカイは笑っている。

「もう俺のじゃないけど、メリア家もこんなんだぜ？」

「そうなの？ …… そう言えば、明日にはもうルクリアだよ。タクやお義姉さんと会わなくていいのか？」

「おっと、そうだな。ちょっと行ってくる」

カイはパプリカを離し、即座にドアの向こうへ駆けて行った。

きっと色んな事があつたせいで胸がいつぱいで、先に何をすべきかを考えられずにいたのだろう。

パプリカは毛を膨らませて身震いし、再び元のふわふわとした毛並みに戻った。パプリカはカイが好きだから、からかわれても噛む事はしないのだ。

「僕らも自由時間にしませんか？ 暮れまでにはまだ時間があります」

そんな提案をしたキラだが、きっとハイムルの街 特に女性を見たいに違いない。

彼はその美貌を自覚してか、気障な言葉を掛けては女性を魅了させている。しかし一定の恋人が出来ないのは、寂しさを紛らわすだけの関係に過ぎないからだ。

と、旅立つ何日も前に、ぽつりとアマネが呟いた言葉を思い出した。

「いいね、それ。俺も行ってくるよ！」

ユウもハイムルが見たかった。

こんな街にはなかなか来れないし、これでハイムルを見るのも最後かも知れない。

ベッドの上に立つパプリカを抱き締め、カイに続いてドアを出ようとしたが、

「くれぐれも変質者に付いて行つてはいけませんよ」

と注意された。

「分かつてるって！」

確かに昔、本当に男か女かの区別が付かない時期に、変質者に連れて行かれそうになった事がある。

だが、ユウももう十五だし、身長だつてギリギリ百六十センチはある。こんな男、さらう必要はないだろうし。

ユウはドアを開け、城の廊下に出る。

そこは少し複雑な迷路のようだったが、何とか迷う事もなく、城の外　ハイムルの街まで出る事が出来た。

思えば、ユウ達はまっすぐにアスカ・サンクチュアリを目指して行つたつもりだったのだ。

本当ならひと月でここに辿り着き、何の難もなくルクリアに行つていた事だろう。

でも、カイやタクとの短い旅の中、学んだ事もたくさんあった。

これがなければ、今のように善悪の判断を付けられる事は出来なかったかも知れない。

レイル族の王の弟として、恥じなき態度をサノン族の王に見せたいから　　と言えば少し格好付けて見えるが、母親のサラの意思を継がなければならぬのだ。

ふと、ユウは小さな喫茶店を見付けた。

「パプリカ、パフェ食べよっか」

「きゅう！」

色々と考えた後は、少しの休憩が必要なのだ。

「タク、アト義姉さん！」

城から過ぎ去ろうとする二人を呼び止め、カイは息を切らして駆

け寄った。

今回の件では、タクにもアトランティスにも迷惑を掛けてしまう事になるだろう。メリア家の最後の男児として、それは謝罪すべきなのだ。

「あら、カイ。どうしたのですか？」

おっとりとした口調で義姉は言った。

「ごめん。親父を止められなくて」

いくら親友であろうと、スタンデシティから色々と迷惑を掛けてしまったのだ。

暫く辺りの空気が静まり返る。

許してはくれないだろうか、と思って顔を上げると、タクは爆笑していた。

「お前が謝る事じゃねえよ。おかしな奴だな。あとお前、明日旅立つんなら遺産分けねえじゃん。考えなしの行動取りやがって」

色々痛い部分を小突かれたが、全て事実なのだ。反論出来なくなったカイは、ただ「すまなかった」と言うだけだった。

「何なら、貴方の代わりに私とタクが、レーライ村の人達に謝罪して来ましょう。メリア家なのですし、私が何もしない訳にはいきません やらせて下さるかしら？」

義姉だが、アトランティスは最後まで、義弟のカイに優しくしてくれるようだ。

「タク、義姉さん、ありがとう」

二人は恋中で、シアンに反対されていたものの、反対する者がいなくなつた今は自由に結婚する事も出来るだろう。

親友であり義弟であるカイからすれば、二人の幸せは望むべきものだった。

「タク、幸せになれよ」

「バーカ。そんなんじゃないみたいだろ」

カイとタクは最後に親友として笑い合ったが、どこかせつなさが残るものだった。

これでいいんだ シアンを殺した罪は、貴族である地位や富を捨て、ルクリアでユウとアマネを守る事で償って行きたい。

自分で決意した事なのだから、もう言い逃れは出来ないのだ。

ハイムルの中心部にある城の中、キラはアマネと二人だけでいた。二人が出会ったのは、アマネが生まれてすぐの事で つまり、十数年も前だということになるだろう。

キラとアマネは、ユウが十五歳の誕生日を迎える前から、自分達がレイル族だということを知っていた。キラは父の言葉により、アマネは母が父に言っていた事を、偶然聞いていたからだ。

どちらにしろ、誰にも信じてもらえない、信じられるのは自分しかない、そんな孤独な暗闇に二人はいた。信じられる友達もおらず、やることと言えば勉強だけだ。

ただ生きるだけの日々に、キラはアマネを守るようになった。

最初は傷を舐め合うような、ただ心の支えが欲しかったから、同じ状況のお互いに魅かれるようにして一緒にいた。

それがいつしか家族同然の大切なものに変わり、キラはいたいけで純粋なアマネを守ろうとし、感情の薄いアマネでさえ、キラを必要とするようになったほどだ。

キラはただ、人の声があまりしない個室で、アマネの髪を撫でていた。

「アマネ様、ニードイルはご存じですか？」

ニードイル、それは明日行くルクリアにある、たったひとつの小さな国。

「うん。ママが生まれたところ……そうだった」

「ニードイルはレイル族や他の民族の国でしたからね」

「でも、今はレイル王族、いないよね」

わずかな感情の変化も読み取れるようになったキラには、アマネが両親を恋しがっているのが手に取るように分かった。

比較的甘えるのが好きなアマネは、時に血の繋がりが無いことを

忘れさせるくらいである。本当の弟のように可愛いのだ。

「僕とアマネ様とユウ様で、もう一度レイル族を建て直しましょう？」

アス力に戻らない決心はお互いに出来ていたから、そんな事が言えた。

「うん。あとね、キラさん。前みたいに普通に話してよ」

「アマネと呼んで、対等に話すのですか？」

「うん。だって、遠く感じちゃう」

少し寂しそうなアマネを見て、

「君が望むのなら」

と、少し気障な言葉で返した。

撫でられるのを好むアマネと寄り添い、窓から吹き抜ける、少し冷たい風を感じた。

「今はもうちよつと、キラさんこうしてたい」

「僕も同じ気持ちです」

襲われる危険がないルクリアだったら、きっとアマネとも幸せに暮らせる筈だ。

風のせい、頬に当たる柔らかい髪の毛がくすぐったい。

こんな小さな幸せを、誰もが等しく感じられる時がくればいいと、キラはそう願った。

明日の早朝、ユウ達は早くもルクリアに旅立つ事になった。

今日はこのハイムルのアス力城で一夜を過ごす事になったが、それぞれがそれぞれの過ごしたい人と、過ごしたい場所にいる。

しかし、もう夜も遅くなってきたと言うのにもかかわらず、城の中で迷ってしまったのだ。

扉や道が多く、どの扉を開けていいのか、どの道や階段を辿って行けばいいのか、迷った挙げ句には城の外でパプリカと話すハメになっていたのだ。

そうしていると、ユウは誰かに呼ばれた。

「どうしたんだ？」

いつも助けてくれる人。

少し怖いといった感情がら、次第に憧れの対象に変化しつつある人だった。

「ま、迷いました……」

かなり恥ずかしい。

ハジメが何処に行っていたのかは検討がつかないが、キラ曰く「ブルーに連れられて何処かへ行っていた」そうなのだ。

「ならば一緒に戻るか」

「はい……」

ユウは俯いたままハジメの後を辿った。

会ったばかりの女性に誘われてこんな時間になった男と、城の中を彷徨い続けてこんな時間になった少年。

どちらも堂々とは出来ない存在だが、後者に比べると、前者の方がまだまともなように思えてしまう。

「ユウ」

「うわっ！ ご、ごめんなさい」

急に名前を呼んで振り返るので、ユウはハジメと衝突してしまっ

た。

「……何をしていた？」

「えっ？」

えっと、喫茶店でパフェ食べて、その後クッキー食べて

……」

思い返せば、食べてばかりだ。

「そうか」
呆れられたのだろうか。踵を返したハジメはそのまま歩き出した。羨ましくはないけど、女性を連れているといたくないのでは格が違うのに。女を連れていた男に「喫茶店でお菓子食べてました」なんて、言わない方が良かったかも知れない。

せめて、「知らないお姉さんに誘われてデートしてた」とか、それでも信憑性がないのなら「お姉さん」の部分を「オジサン」にし

てもいいだろう。

如何に食い意地の張ったガキだというユウの印象が、ハジメの中で形づけられたことなのだろうか。

「ハジメさんはブルーさんに誘われて、今まで何してたんですか？」
これならこつちも弱みを握ってやろう、とユウは訊いた。

「待て。確かにブルーには誘われたが、断って近くのゲームセンターで……いや、それはどうでもいい。誰がお前にブルーの事を吹き込んだ？」

これでハジメが本当は何をしていたのかが明らかになったが、殆どお互い様だということで、何故か心の中では安心していった。

しかし、彼が目の色を変えて問い質してくるのだ。

戸惑ったユウは小さく言った。

「えっと、キラ先生が……」

「あの野郎……」

「あ、ま、待って下さい！ ハジメさん！」

キラと聞いただけで目の色を変えて走り出したハジメに、ユウは焦りながら付いて行った。

ハジメもキラも何がしたいのかよく分からないが、本当に明日はルクリアに立ってしまうのかと思うと、少し寂しい気がするのだ。

ドアを開けてキラに掴み掛かるハジメを見て笑いながらも、旅の終わりのせつなさを身を持って知ってしまったようだった。

4・言葉【番外編】

リギン村に住む、優等生であるキラ・ダーティスは、誰にも言えないような秘密を一人で抱えていた。

自分はルクリアという世界の、ニードイルという国の王族に仕える家系の息子で、訳あってアス力で生まれ育ったのだ、と。仲のいい同年代の友達はいない。いや、最初はいたけれど、今ではその頭脳で疎遠されてしまっている。

それでも、キラには一人で暮らして行ける理由があった。

「キラさん、遊びにきたよ！」

村の外れにある山奥に住む、キラが本来仕える筈の少年　アマ
ネ・ヴェラーテ・ニードイル。

まだ十二歳になったばかりの彼は、小さくて病弱な身体を懸命に走らせ、暑い夏の晴れた日でも、毎日キラの家に遊びに来てくれる。「やあ、アマネ。ユウはどうしましたか？」

いつもならその二つ年下の弟であるユウも一緒に来る筈なのだが、今日はそのユウは来ていないようだ。

「ユウはねばすけだから、まだ寝てるんだよ。それより、見て見て。学校の宿題終わったよ！」

アマネは病弱だが笑顔の可愛い少年で、元々そういう血筋だからか、孤独なキラは彼を守りたいとさえ思い始めていた。

だが、アマネが十五の誕生日を迎えるまでは、キラも真実を告げる事は出来ない。

これは彼の母親であるサラからの言い付けで、キラはいつも喉まで伝えたい気持ちが上がって来るのだが、堪えて飲み込んでいた。

「よく出来ましたね。アマネ、学校は楽しいですか？」

「ううん。楽しくない……でも、キラさんがもうすぐ先生になってくれるって聞いたから、頑張って行ってるんだよ」

「そうですか。僕もアマネのために、頑張って教師になりますね」

キラはまだ十六で、教師になるには、アスカの法律では十八歳以上なので、あと二年は待たなければならぬ。

しかし、キラはもうそれまでの勉強を修め尽くしている状態なので、趣味として魔術を独学で学び始めたくらいだ。

アマネもキラと同じで、頭がいいので同級生からいじめられている。だからこそ、キラが教師になろうと思ったのだ。

ニコニコと笑っていたかと思うと、アマネの表情は急に曇った。

「ねえキラさん。ボクは人間じゃないの？ 昨日の夜、ママがパパに言っただのを聞いちゃった……ママはルクリアのニードイルつてところの王女で、いつかボクとユウを返さなきゃならないんだって」

急にそんな事を言われて戸惑った。

だが、すぐに機転を利かせたキラは、アマネをゆっくりと抱き締め。

「その通りです。本当ならもつと先に伝えるつもりでした。でも、僕も同じ、ルクリアの人間です。君は一人じゃない」

「ほんと？ ボクは悪魔じゃないの？」

「悪魔……？」

アマネがそんな事を言ったのは何故だろう。サラがそんな事を言う筈はないし、事情を知って結婚した父親は絶対にそんな事を言わない。

ユウだって知らないのだ。

「ボク、悪魔だってクラスの子から言われるんだ」

自分の事ではないのだが、それを聞いたキラは憤慨した。

込み上げてくる怒りは何だろう。しかし、怒りで歪んでしまった顔を、本当に愛しいアマネには見せたくない。

抱き締める腕の力を強め、顔が見えないようにと、華奢な肩に頭をうずめる。

「……君を傷付けるものなんて、消えてしまえばいいのにね」

ゆっくりとした落ち着いた声で背中を撫で、服を伝って滲む温か

い涙を感じた。

アマネが泣いている。

何があっても、いつもキラには笑顔でいてくれて、寂しいところなど見せなかったアマネが。

どれだけ笑顔に助けられただろう。

どんな女性と抱き合っても、どんな女性と寝ても、紛らわす事の出来ない寂しさはアマネが癒してくれる。

それでも大切な人は汚す事が出来ないから、女性と付き合っては別れる行為を繰り返しているのだ。

どれだけ大きな存在だったか、アマネが悲しんでいるのを見て、初めて理解できた。

「こんなに怒ってるキラさん、初めてだよ。ボクのために……なんだかごめんね」

アマネの言葉に力を弱めると、彼は微笑んでキラを見上げていた。

「僕は君が」

たった少しの言葉なのに言えなかった。

いつもは誰にでも言って来た言葉なのに。

「ボクが、何？」

瞬きをしてアマネは首を傾げた。

「いや、何でもないです」

手を離して、それ以上の言葉を告げるのはやめた。

告げたとしても、それは父親やサヲを裏切る事になる 従者が

主人に抱いてはいけな感情なのだ。

「ボクはね、キラさんが大好き」

笑顔で言ったアマネの言葉が嬉しく、しかし何と返していいのか分からない気持ちに胸が締め付けられる。

アマネの好きは、多分キラの好きとは違うんだ。

分かっていながら、アマネの頭を撫でた。

「ありがとう。さあ、魔術の勉強でもしましょうか」

難しい本を広げ、気持ちを紛らわす。

本当なら、ここで壊してしまいたいくらいの気持ちだった。理性がそれを止めたから、キラはそれ以上、何もしなかったのだ。

その日、アマネとユウは両親を急な火事で失った。

火事は魔術によつての放火だったが、『紫色の髪の少年』がやったということで、事件は片付けられた。

アマネはそのショックにより、二度と笑顔も泣き顔も見せる事はなかった。

せめて、全てが失われる前に告げられていたら　そんな事を考える自分が愚かで、冷静な人格が嘲笑する。

「キラさん、ルクリアに行ったら、幸せに暮らそうね」

旅の途中、アマネがそんな事を言った。

「そうですね」

そのために、キラがアマネを守る。

アマネが幸せだと思ってくれて、いつか感情を取り戻してくれた時、あの笑顔をまた見たいのだ。

いつか昔の事のように、今の感情をアマネに打ち明ける事が出来たら　そう思いながら、柔らかいその髪を指で梳いていた。

5・ルクリア

城に泊まった次の日の早朝、再びカイを加えたメンバーでルクリアを目指しての旅を開始することになった。

旅立つ直前、トワイライトに呼ばれて彼女の自室に呼ばれたが、そこにはほぼ昨日のメンバーが集まっていた。

タクとメリア家の次女アトランティス、トワイライトとその娘のソラとナイトが、その場にいるのが確認された。

「ほらカイ、パジフィックだ。連れてってやれよ」

タクが手で握れるほどの水色の物体を投げ、

「サンキュー、タク」

と言つてカイは受け取った。

以前、料理にロボット用の着色料を入れたカイだが、その時にパジフィック三号機の事を語っていたのを思い出す。

まさか握れるほど小さなロボットとは思っていなかったし、サソリの形 死んだスナイダーを連想させる形をしているのだ。

水色で星マークの付いたサソリなんていない。奇抜なデザインのそれは、やはりカイが作ったもので間違いはないだろう。

「五人に私とソラから願いたい事があるのだが、いいか？」

間を見計らい、トワイライトが口を開いた。

「僕達に出来る事なら」

キラがそう返す事でトワイライトは微笑み、隣りにいるソラの肩を軽く叩いた。

促されたソラは恥ずかしそうにキラの前まで歩き、立ち止まる。

桃色の髪を真ん中で分けている彼女は、見つかった時と同じ黒にレースの多い装束を纏い、先の尖っている飾りのついた大きな帽子を被っている。

露出度が高めのミニスカートで、一国の姫でなければユウなら遠ざけていそつな、まさに『魅力的なお姉さん』風であるが、レース

により多少の子供っぽさも目立っている。

キラを見上げて真剣な表情に切り替えたソラは、間を置いて言った。

「私もルクリアに連れて行って下さい！」

姫に頭を下げられ、キラは珍しく戸惑っている様子だった。

「僕に決定権は……」

ちら、と一瞬だけ困った表情でハジメを見た後、キラはそう言った。

男性ばかりの旅に、女性がただ一人　それも飛び切りの美少女で、頼りない男二人に、女たらしが二人、好意を寄せる男が一人。それに相手は姫だ。危ない目には遭わせられないのが、一番の連れて行けない理由だとユウは思った。

「アマネ。どう思いますか？」

どちらでもよさそうなハジメには振らず、キラは珍しくアマネに判断を委ねた。

呼び捨てにしたのは少し気掛かりだが、二人は仲がいい。またその仲に嫉妬してしまいそうになるが、ユウはアマネの言葉を待つ事にした。

「ボクはどっちでもいい。ユウは？」

彼に訊いたのがキラの大きな間違いだったのかも知れない。

アマネはキラ以外の他人には無関心なのだ。

「俺はソラ様が心配です。危険だし、たらしが二人もいるし……」
ハジメとキラを後ろから目で示して言う、隣りにいたカイがクスと笑い出した。

「あら、心配してくれるの？　可愛い子ね。でも、私は大丈夫よ。
昨日はリキードさん相手だったから出さなかったけど、魔術の使い手なの。見習いだけだね」

試してみる？　とソラは笑う。

ユウとしては子供と見られて膨れるばかりだが、彼女はそれを気にもしていないようであり、カイがそれに見とれているのに呆れて

しまう。

ソラは帽子についた飾りを取ったかと思えば、それを棒がついたメイスへと変化させる。

今までに見た事がない術だ。これがアス力流の本来の魔術なのだろうか。

「雨を降らせる事も、範囲内なら雷と地震を起こす事も可能よ」

急な雨はソラの仕業　いつかタクが言っていた事だ。

雷や地震を起こすような魔術を使う者は、今までに出会った事がないかった。

「それに、私はカイの幼馴染みよ。魔術使わなくても戦えるわ」

メイスを掌に乗るくらいの小さな飾りに戻し、帽子に再び取り付けると、ソラはそのままアピールを続けた。

「　そういう事だ。姉の私からも頼む。カイがいるから安心出来るのもあるし、ソラは王位が継がない分、楽しんで欲しい」

今まで黙っていたナイトまでもそう言い出した。

「ハジメさん、僕は連れて行ってもいいと思いますが…… よろしいでしょうか？」

「俺がたらし……？　カイか？　いや、あいつは違う。大体モテないしな……」

気が付けば、ハジメはブツブツと念仏のように、そんな事を唱えていた。

「モテないは余計だ！　ソラ様は俺が守る。それにキラもいいと言っているし、話も決まったな」

ユウもソラが強いとなれば、さほど問題ではないと思った。

ハジメは相変わらずマイワールドへ突入して何かを言っているが、それ以外の者は頷き、ソラの同行を認める形になった。

「ありがとう、みんな！　お母様、お姉様、それからシルベルトさん達…… さようなら」

ソラはそう言った後、カイの近くまで駆け寄って来た。

これから賑やかになるな、とユウは笑った。

女の子の友達が今までにいなかったためか、少し嬉しい感情もあり、仲良くなれるかなとドキドキしてしまう。

ソラ自身をユウが恋愛対象として好いてしまった訳ではないのだが、本当に同年代の友達がたくさん欲しかったから、ついそんな気持ちになってしまうのだ。

突然だったが、ソラの同行が決まってすぐに城を出て、ユウ達は目的地に行くために、アスカ・サンクチュアリへと向かった。

ルクリアの地は、想像していたものとは全く違っていた。てつきり物語に出て来るような、ファンタジー世界の雲の上を想像していたのだが、いざワープして地を踏んでみると、アスカの地面と何ら変わりはないかった。

ハジメが言うには、ここから真つ直ぐ北に平原を歩いて行けば、メイジェス陛下が治めるアヴェ二国の首都　ステンという城下町があるようなのだ。

ルクリアの平原には、アスカよりも強く、それもたくさんの魔物が現れた。

「うわっ、また魔物だ！」

思わずユウが大声を上げると、ハジメがその前に瞬時に現れ、闇の力を纏った剣で魔物を切り裂いた。

先ほどは狼が挙げられるような魔物が襲ってきた。ルクリアに來てから、魔物の襲撃が絶えないのだ。

「何だこいつ！　俺の銃が利かねえ！」

カイが武器の銃から炎の弾を出すも、頑丈な魔物の皮膚には、ただ弾かれるだけだった。

魔物の種類もアスカと比べて豊富で、種類の違う魔物が現れては、ハジメに説明を求めることの繰り返しである。

「ウォーヴという魔物だ。この辺りに生息する肉食生物で　耐性は炎、弱点は氷だ」

炎技のカイの攻撃が利かない筈だ。

ルクリアの魔物はアスカと違い、ある一定の魔術が利かない種類もいるようなので、それが出る度に困るばかりである。

「カイ、下がりなさい。ここは僕とハジメさんで十分です」

戦闘はアスカの時と同様、いつものメンバー　特に力の強い男性陣三人が中心となり、魔物と戦う事にした。

残ったユウは戦い途中に体力を回復させたり、魔物の攻撃からハジメ達を守ったりしていた。

ウォーヴの群れをほぼ全滅させた後、一息ついてキラが言った。

「こちらの魔物には、属性によって耐性があるのですね……」

ルクリアの事を知っていたとは言え、さすがに魔物の事ばかりは把握していなかったからか、さすがのキラも少し戸惑った様子だった。

「そうみたいだな。俺の銃が利かないなんて……」

カイは自信なさげに銃をしまい、頭の後ろで手を組んだ。

「気にするな。炎に耐性がある物もあれば、逆に弱点なものもあるかな。それに、もう戦わなくて済みそうだ」

ハジメはカイの肩を叩き、目でその先を示した。

城のような大きな建物と、街が広がっている光景が映る。あれがアヴェ二国の首都・ステンなのだろうか。

アスカ城と似たデザインのそれに、ユウは感激した。アスカのハイムルのように、またすごい街に行けるのだろうか。

「あそこがアヴェ二国のステンなの？」

「ああ」

「じゃあ、もうすぐこの魔術を学べるのね！」

ソラはルクリアの魔術にかなり興味を持っており、一件が終わった後は、ゆっくりとそれを学ぶ事を望んでいるようだ。

「ママ、やっと着いたよ」

母親の十字架を握り締め、雨音は薄い感情の中でも、はつきりと伝わるほどに嬉しさを露にしている。

「メイジェス陛下とアマネとユウを一度会わせたい。特にユウは、陛下も会いたいだろうしな」

「えっ、メイジェスは何でユウと会いたいんだ？」

ユウが同じ内容の質問しようとしたことを、カイが先に言ってしまった。

「言わなかったか？ ……詳しくは、陛下と直接会って聞かせてやる」

ハジメはそれだけ答えると、それ以上はその話について触れなかった。

もうすぐだ。

もう少して陛下と会う事ができ、ナリユエ族の襲撃を逃れられる方法を、見付けられるかも知れないのだ。

それぞれがそれぞれの思いを胸に抱きながら、兵士が守るアヴェエ二国の入口まで辿り着いたのだった。

「ギルウィンだ。ニードイル王族を連れて来た」

ハジメは冷酷な瞳で彼らを見、彼よりも背の低い兵士達に、若いながらもその威厳を見せつける。

「ギルウィン様ですか！ お疲れ様でした。お通り下さい」

兵士達が敬礼し、門をゆつくりと開けた。

中はハイムルともスタンデシティとも違う、機械のない街だった。どちらかと言えば、レーライ村がもつと広くなって人口が増えた感じで、機械を扱うものは何一つ見当たらない。

「あれー？ 都会なのにホントに機械モンねえじゃん」

辺りを見回しながら、カイはつまらなそうに言った。

「当たり前だろう。ルクリアはアスカの逆で、機械を扱える者は少ないんだ」

残念だな、とハジメは笑った。

「ちえっ。機械ないのは予想外だぜ。な、パジフィック」

ロボットに向かって同意を求めるカイだが、パジフィックは喋る筈がなく、ブツブツ言いながら彼は鞆の中にそれをしまふ。

間もなく、城のすぐ近くまで歩いてきた。そう遠くはなかった気がする。やはり門には同じように兵士がつけられ、それも何重にもガードが重ねられているようだ。

とは言っても、今回は戦いに来た訳ではなく、これからの話をつけに来ただけなのだ。緊張することはない。

「ハジメ様」

予想が外れたのは、こっちの兵士はハジメを下の名前で呼び、敬称付きだが親しみを持っている事だ。

兵士は礼儀正しくそう言った後、ユウを見て目を丸くした。

「アルステイナ……？」

「えっ？」

「いえ、すみません。用件はやはり」

何かに気付いたように、彼がユウから目を逸らす。誰かと間違えて、つい口走ってしまったのだろうか。

そうしていると、すぐにハジメが用件を伝えた。

「メイジエス陛下に会わせてくれ」

「……かしこまりました。陛下は自室におられます。今はアディーフ様はおられませんので　チャンスだと思われます」

どういう事だろうか。

金色の瞳を細め、彼は人が良さそうな笑みを浮かべている彼は、まるで自ら敬称を付けて呼んだ『アディーフ』という人物がいない事を『チャンス』だと言ったのだ。

「分かった。ありがとう、エルバント」

エルバントと呼ばれた兵士は、ユウやアマネとよく似た色の茶髪を掻き分けて軽くお辞儀をし、門を開けて六人が入って行けるようにしてくれた。

エルバントがどんな地位を持っていて、どんな人物なのかは定かでないが、きつといい人なのは間違いないだろう。

中庭に入った後、キラがすかさず口を開いた。

「先程の彼　エルバントさんは？」

「姉さんが死んでから面倒を見てくれた兵士だ。身分は違うんだがな」

「そうですか。すると、アディーフというのは……？」

「軍の最高指揮官だ。戦争主義者で、陛下の平和的意見を常に批判している。アマネとユウを連れて来るのにも反対だったんだ」

「どこの時代にも世界にも、戦争主義者で陛下を批判する者がいるのだなあ、と思いながら聞いていた。」

「だったら、そのアディーフがいなくなると、ユウ達は運がいいということだ。」

「今はそいつがいないから、すぐに陛下に会えるんだね！」

その予想を確認したく、ユウはそう言った。

「そういう事になるな」

全てが計画通りに進み、満足そうにハジメはニヤリと笑った。

中庭はヨーロッパ風な豪勢な造りになっており、色とりどりの花が植えられている。数人の庭師が綺麗に整えているのだ。

六人は中庭を真っ直ぐに進み、大きなドアに辿り着いた。人の身体の数倍もある大きな扉だ。

「ギルウィンだ。陛下との面会を望む」

扉の前でハジメが言うと、暫くして固く閉ざされていたそれはゆっくりと開いた。

執事らしき一人の男が立っており、城の中はやはりアス力王室のそれを連想される造りになっている。

壁には高価そうな絵、棚には高価そうな壺が置いてあるなど、城の中は想像していたものと大して変わりはない。

「どうぞ、こちらです」

六人が中に入ったところで扉は自動的に閉まり、同時に鍵まで掛かった。

「スゲー！ こっちにもコンピューター的なモンがあるじゃねえか！」

機械類が大好きなカイは興奮し、気品あふれる城内で大声ではし

やぎ始めた。

「ない。これは魔術の一種だ」

ルクリアの事はユウも前から少しは聞いていたが、魔術の発展が大きい分、やはり化学はほとんど発展していないものだと思う。アスカの世界が化学の世界なら、ルクリアの世界は魔術の世界だと言えるだろう。そのまとめ方は正しいのだ。

「おやめなさい。下品ですよ」キラがはしゃぐカイを呆れたように見て言った。「百年戦争以来、サラ様の父上から先々代の王が分離した世界ですから、元はルクリアもアスカも同じ世界。城の造りや言語は共通なのですよね」

「やはり詳しいな、お前」

「ええ。ルクリアの最低限の知識は、父上が残してくれましたから」キラは得意げに笑った。

二つに世界を分けたにしても、繋がっているゲートがひとつしかないとは言えど、ルクリアからアスカに、アスカからルクリアに行く事は可能なのだ。

現に、ナリユエ族はアスカまで襲撃してきたし、ハジメが助けに来てくれたのだ。

それだけアマネの力。本当はユウが持つ《カリユダ》を欲しがっているのは分かるのだが、もし今回の事件でルクリアが存在がアスカの人間の殆どに知れ渡ってしまったら、一体どうなるのだろうか。

アスカの人々はルクリアの発展した魔術を知りたがる。天の地を欲しがり、トワイライト達に詰め寄るかも知れない。

だとすれば、ルクリアとアスカとの衝突は、防ぎ切れなくなる事も予想されるのだ。

しかし、アスカ人はアスカ・サンクチュアリの扉を開く事が出来ない。誰もがルクリアに来れない分、その心配は不要である。

「こちらが陛下のおられる部屋です」

階段を何段か上がったところの部屋を指し、執事は言った。

「メイジエス様、ギルウィン様が面会に見えました」

丁寧なノックをする執事は、アスカ人ならきつともう老人なのだろう。

ステンの街のどこを見渡しても老人はいなかった。子供か少年少女の姿をした者しか存在しないのだ。

『ゆつくりと老いていく』というのも、身体の中だけの事を指すのだろう。

「入れ」

すぐに中から男の声が聞こえ、ハジメが最初に部屋の中へ入って行く。それに続いて残りの五人が入ったところで、部屋の扉は自動的に閉まったのだ。

陛下、と言うには若すぎる　いや、ルクリア人だから仕方ないが　高貴な金髪を腰くらいまで伸ばし、頭には王冠のようなものを被っている。

金色の鋭い瞳は、城に来るまでに見たサノン族の中でも、鋭い印象を抱かせるほどだ。

「アスナ……本当にそっくりだな」

高級そうな椅子に肘をつき、メイジエスは笑う。

「陛下、説明を」

「お、そうだな」

ハジメに促され、改まった態度で言った。

「俺はメイジエス・イアン・アヴェニ　アヴェニ国の国王で、ハジメの義兄になる筈だったんだが……」

メイジエスが出会った時のハジメのような、寂しさの残る瞳でユウを見た。そんな瞳で見られるのは二人目だから、もう慣れてはいたのだが、やはり別の誰かと重ねられているのだろうか。

「あの、メイジエス様。俺はレイル王族のユウ・ヴェラーテ・ニユードイルといいます。こちらは兄のアマネです」

サノン族の王はレイル族を保護してくれようとしているのだ。そんなサノンの一番偉い人に会う事が出来たので、少し安心して言っ

た。

メイジエスはそのようなユウの様子を見て、懐かしむように微笑んだ。

「体つきまでアスナに似ているとはな……安心しろ、お前らは俺が守る」

キラとアマネに視線を移した後、メイジエスは再びユウに視線を戻した。

「メイジエス陛下。僕はニユードイル王家に仕えるキラ・ダーティスです。二人をよろしくお願いします」

「キラか。承知した」

メイジエスは丁寧な態度のキラを見て微笑み、「忠実な部下だな」と呟いた。

「アマネ、と言ったか。神と交わり、その力を行使するには《カリユダ》が必要だ　と伝わっているだろう？」

「はい。でも、ボクは長男だけど、《カリユダ》は持ってません」

「何故だ！？　ハジメ、説明しろ」

ずっとアヴェエ二国のステンの城に滞在していたメイジエスは、《カリユダ》の力がアマネではなくユウに引き継がれていて、それをナリユエ族が勘違いしている事を知らないのだ。

「アマネとユウはアスカ人とのハーフです。その辺りで狂ってしまったのか、長男のアマネではなく、次男のユウに《カリユダ》が引き継がれていることが確認されています」

ハジメがそれ以上の説明を要求するかのように、キラを横目で見

た。
「ハジメさんの言う通り、ニユードイル王女のサラ様が生前、ユウ様に《カリユダ》が引き継がれたと仰っていました」

「そうか。だが、ナリユエ族が勘違いしているとなると、こちら側が有利だな」

「はい。ですが、僕はアマネも大切です。ナリユエ族の手には渡したくないのです」

きつぱりと平然な態度で言ったキラは、やはりこの場でも主従関係を無視しているのか、アマネを呼び捨てにしているのが確認される。

そんな様子を見てか、メイジエスは茶化すように笑った。

「そうか。お前はアマネの方を大切にしているみたいだな　分かっている。ユウもアマネもナリユエ族には渡さん」

メイジエスには、キラがアマネに依存しているのがお見通しのようだった。

「しかし、ユウは俺の婚約者のアスナに似ているな。男と女、どっちだ？　歳は？」

先ほどから出て来る、「アスナ」という名前。誰を指すのかは知らないが、おおよその検討はついていた。

「俺は十五歳の、れっきとした男です！」

ハジメもメイジエスも、同じような間違いをしたのだ。ユウは女ではなく、生まれた時から男なのに。

大体、男か女なんてどうでもいい事じゃないか。何故、わざわざ訊かれたのだろう。いくら婚約者のアスナと被るからとは言え、それでは彼女にも失礼のような気がしたのだ。

「そうかそうか。怒った顔もアスナそっくりだ。可愛いなあ」

「陛下、子供をからかうのはやめて下さい」

「あー、はいはい。まったく、ハジメは重度のアスナ依存症なんだから……」

ハジメに止められてようやく質問責めはやめたものの、ユウを見てニコニコと笑うのはやめなかった。

これで分かった事は、アスナというのがハジメの姉であり、メイジエスの婚約者だということだ。どうりで仲がいい筈だ。

「……それはそうと、お前らに要望があるのだが、いいか？」

急にメイジエスは話を切り替えた。

「許容範囲なら」

と、ハジメが答える。

「実は、トリジャにいるアンジュという部下と、ニュードイルにいるディーブルという部下を、それぞれここに呼んで来て欲しいんだ」
トリジャがどこかは分らないが、ニュードイルは地理は分からないものの、どういう場所かは分かっていた。

ハジメがあの後教えてくれたのだが、ニュードイルは本来アマネが治める筈の、レイル族が住む国なのだ。

「ニュードイルに陛下の部下がいるのは、少し変ですね」

「王がいない間、ニュードイルはアヴェエ二国が守ってきたからな。兵士になるのを希望した奴もいたんだ」

「そういう事なら納得です」

サラやアマネという王位継承者がいない間、他国のサノン族の王が管理してしてくれたのだ。

この件に関しては、礼を言うのはもちろんアマネで、

「ありがとうございます。ボクとユウも陛下に協力します」

そう自ら申し出たのだ。

しかし、トリジャやニュードイルに行くとしても、方角が全く分からない。

「ハジメさん、トリジャとニュードイルって、どこにありますか？」
率先してアマネが訊いた。やはり彼にも一国の王だという自覚があるのだらう。

「トリジャはここから東に行った所で、ニュードイルは北西に行った所にある。ただ、ニュードイルの方が少し遠いな」

国内、もしくはその近辺だとは言え、方向をきちんとおさえているハジメは、ユウにとってやはり尊敬の対象である。

いつからか、彼のようになりたいと思いつけるようになり、彼に對しての見方が大きく変化したのだ。

「だったら、三人ずつで分かれた方が、効率がいいのではないですか？ 合流場所をここに……」

キラがハジメに提案する。

「そうだな。では、俺はニュードイルへ向かわせてもらおう。向こう

の方が魔物が強いからな」

魔物が強いなら、この中でも一番強いハジメが行くべきだろう。ユウも彼がいたら安心なのだが、どうやらそれは不可能そうなので諦める。

ハジメがいなくても、カイがキラのどちらかがいれば、それはそれで助かるからだ。

「ボクは王家の者として、ハジメさんと一緒にいきます」

アマネがニードイルに行くとなれば、当然メンバーは決まった事になる。

「アマネが行くのなら僕も同行します。後の三人は如何ですか？」

キラはその血のせいかなマネを守る事を優先的に考えている。

ルクリアに旅立つ前の日、深夜にハジメがぼつりと口にしていた言葉を思い出す。キラはアマネを特別な存在だと思っていて、家族以上に大切だと思っているようなのだ。

「俺もソラ様が心配だし、回復役のゆうがいたら頼もしいしな」と、カイ。

「うん。私、カイとなら平気だよ」

ソラは微笑んで言った。

これで、二つのルートに行く班は決定した。

「出発は明日にしる。取り敢えず、今日は休めよ？ 城の応接室を貸そうか？」

「いや、ギルウィン家の屋敷があります。そこに仲間も泊めます」

「じゃあ、ギルウィン邸でゆっくり休め。また戻って来たら会いにこいよ！ 特にユウはな」

話がまとまると、メイジエスは軽そうにそう言った。どうやらユウはアスナの面影に重ねられ、彼のお気に入りリストに入ってしまったようだ。

年上の男性に、こんな風に入られる事は多々あった。だから慣れているのだ。ただ、今までは村の中の男からだったから軽く無視しておけば済んだが、今の相手は一国を治める王だ。ユウは苦笑

いをし、同時に誰かに助けを求める。

「陛下、ユウをからかうのはやめて下さいと、先ほどから言っていますが？」

鋭いその瞳に睨み付けられ、さすがのメイジエスもそれに怖じ氣付いたようだった。

「うー、分かった分かった。じゃっ、またな」

その後、ユウ達は陛下に礼を言うつと、城を後にした。

「明日の朝出発ですが、今からは自由時間にしませんか？ ステン内のみで、集合場所はこのギルウィン邸で」

「ああ、それがいい。好きにしる」

大きな屋敷　ハジメの家で六人が集まった中、キラの案に全員が賛成した。

キラはアマネと、カイはソラと、それぞれが出掛けて行ったのだが。

「ユウは行かないのか？」

「ハジメさんこそ」

二人だけは屋敷に残ることになってしまった。

窓の外をじつと見つめるユウの後ろから、呟くようにハジメは言った。

「俺は、この街は見飽きている。明日から過酷になるぞ。本当にいいのか？」

見飽きている、と言いながら、外の景色を見ているくせに。

「いいです。もう分かってたんだし……もしものがあつたら、これでハジメさんに会えるのも最後かも知れないから」

それは言い訳に過ぎなかった。

キラと一緒にいたいという、アマネの気持ちも分かっているのだ。何となくだが、そんな気持ち芽生え始めているのに気付く。

「でもお前、ニユードイルで暮らすんだろ？」

「はい……」

「お前は死にやしない。今回は陛下の部下を迎えに行くだけだ。な

？」

「そう、ですよ」

疑問だったが、どうしてハジメがニュードイルに行きたいのか、ニュードイルがレイル族の国という以外に、どんな都市かは訊かない事にしておいた。

「ユウ」

後ろから抱き付かれ、戸惑って振り向いた。

「わっ、何するんですか？」

顔が紅潮し、体温が高くなる。

急な行動だから仕方ない、とユウは自分に言い聞かせた。

「暫くこうさせてくれ。いいか？」

強引なまでのそれに、頷かざるを得なかった。

いつかの月を見上げて、二人だけで話した夜の事を思い出す。

ハジメの甘える相手がユウだとしたら　その時は何も思わなかったが、後になってこんなことをされると恥ずかしいのだ。

どうすればいいのか分からず、ただ肩にうずめてくる頭を小さな手で撫でた。

「やめる。何をするか分からん」

言葉の意味はよく分からなかったが、聞き返さずに手を止め、撫でるのをやめた。ハジメはただ、ユウに抱き付いていたいらしい。客観的に見るとどうだろう。まるで大人と子供の身長差に、誰もが笑ってしまう。

「ハジメさん、どうしたんですか？」

彼の行動の、何もかもが分からなくなる。

「何でもない。お前が姉さんに似てるから……少し甘えなくなっただけだ」

それだけ言った彼は、ユウの中に意味深な何かを残して離れていった。

いつも冷静で、誰にも媚びる事をしない彼が、どうしてユウに抱き付くのだろうか。優しさの理由が分からない。頭が壊れてしまい

そうだ。

茫然と窓の外を眺めていた。

少年の姿をした大人は忙しそうで、子供は無邪気に街を駆け回る。ユウの故郷と何の変わりもない。違っているのは、場所と人の多さくらいだ。

これから千年近くの年月を、このルクリアで過ごしていく。何があっても、二度と後悔はしないつもりだった。

翌日の早朝、トリジャ組はギルウィン邸を出発した。

ニードイル組はトリジャの二倍ほど離れているので、ハジメらは明け方に出たのだが、トリジャは歩いて二日で行ける場所のようなので少しゆっくりして出たのだ。

「それにしても、ソラさんの魔術って何なんですか？」

戦闘中、なかなか目にしないソラの魔術に感動する。

ルクリアの魔物は魔術をさかんに使って攻撃してくるのだが、雷や地震を起こしたりするのはなかなか見つからないのだ。

「アス力流よ。キラさん達は独学だし、私は王家の人間だから、特別に地震や雷も習う事が出来たの。光と闇以外ならどんな魔術も任せてね」

「そうなんだ。キラ先生よりもすごいですね、ソラさんは」

「んー、でもキラさんには弓があるからね、まだまだ及ばないわよ。それより、私の事はソラでいいし、敬語もいらないわ」

ソラはユウよりも少し年上で、いい姉貴分、といった感じである。「じゃあ、ソラ……」

弱々しい少女かと思いきや、彼女はそうでもなかった。魔物とは容赦なく戦うし、魔術だけで言えば他の誰よりも長けている。ルクリアで育ったハジメよりも強い魔女だ。

「可愛いわねえ。私は男の兄弟いないから、ユウちゃんやアマネちゃんみたいな弟欲しかったよ！」

そう言うなり、抱き付いてくるソラだったが、その豊富な胸に息が出来ないくらい苦しむ事になるが、思わず母親のサラを思い出してしまった。

その行動には、パプリカも悲鳴を上げている。

「ソラあ、苦しいよう」

「きゅっ……」

「わーっ、可愛い！」

可愛いと言われるのは確かに嫌だが、何故かソラに言われるのは平気で、怒る気にはなれなかった。

男に言われるのは、きつと女性的な意味を含んでいるから嫌なのだろう。初対面のハジメが同じ事を言った時は、さすがに苛ついたからだ。

「ソラ、俺は……？」

カイが羨ましそうにユウを見ている。彼は幼い頃からソラに好意を抱き続け、未だにそれが報われないでいるのだ。

「カイも大好きだよ」

にっこりと笑ってソラは言った。

「そ、そうか。俺も……ソラのこと好きだぞ」

昨日、二人でステンの街を回っていたからか、ソラに対してカイが敬語を使ったり、名前に敬称を付けたりする事はなくなっている。

「大好きだよ」とか「好きだ」とかい合っているくせに、どうしてこの二人には恋愛面での発展が見られないのだろう。付き合うには何回もチャンスがあつた筈なのだ。

「そう言えば、助けに行ったときにソラが言ってたけど、約束って何なんだ？」

ソラに解放されたユウは、先頭を歩くカイに聞こえないように訊いた。

「かなり昔なんだけど、私が一人で遊んだ時『俺でいいんならずつと一緒にいてやる』って言うてくれたの。それからだったわ。カイと仲良くなつて、一緒に遊ぶようになった……でも、親友以上の

発展はないんだけどね」

懐かしげに語るソラに、カイって柄にもない事を言うんだな、とユウは笑った。

どうやらトリジャ組のほとんどが、恋愛関係に悩んでいるようだ。カイとソラはお互いが勘違いしている。カイもいつか「ソラ様はただの幼馴染みとしか見ていない」と言っていたが、ソラは「親友以上の発展はない」と言い、お互いがお互いの気持ちに気付いていないようなのだ。

ユウにはそんな悩みはないので、「大人だなあ」としみじみ思うのだが。

「ソラも頑張つてね。俺、応援してるから」

「ユウちゃん……」

ソラはいい子だ。少なくとも、今まで女の子と話した事がなかったユウにとつて、とてもいいお姉さんである。

「どうしたんだ？ あれがトリジャかな……とにかく、街が見えてきたぞ！」

少し遠くにある、大きな建物が並ぶ場所を指し、カイは二人を振り返った。

トリジャは想像していたより大きい街だ。まだ遠くからなので分からないが、ステンほどではないのは分かる。だが、ユウの出身地であるリギン村よりは遥かに大きい街なのだ。

三人は街に向かって歩き、アンジュというルクリア人を迎えに、トリジャという街まで足を運ばせたのだ。

街の中はステンよりは落ち着いているが、人はそれなりに多い。ここはサノン族のAVE二国であるためか、過ぎ行く人々の殆どが金色の瞳をしていた。

しかし、アンジュというのが誰か分からないユウ達は、メイジェスに特徴を訊くのを忘れてしまった事を後悔していた。

せめて男か女かは訊いておくべきだった。手掛かりは『トリジャ

にいる軍人』という以外、何も分からないのだ。

「すみません、アンジュという軍人を知りませんか？」

「アンジュの家はすぐその赤い屋根の家だよ」

「ありがとうございます！」

三人は仕方なく街の人に訊き、すぐ近くに民家にアンジュという人物が住んでいる事を確認した。

一見、赤い屋根の普通の家である。こんなところに、本当にメイジエスが信用する軍人が住んでいるのだろうか。

「メイジエス陛下の使いの者です」

ノックと同時にユウが言った。

貴族であるカイとソラはマナーは色々とわきまえてはいるものの、それを実践したことがないと言うのだ。

「どうぞ」

中からは長身の男がすぐに出て来て、ユウ達を部屋の中に招き入れた。

金髪で髪と同じ目の色をしている少年　彼こそがアンジュだろうか。いかにも軍人らしく、腕は武術を心得る者のように筋肉質である。

「あの……俺は陛下の使いの、レイル族のユウと言います。アンジュさん、ですか？」

幼さは顔に少し残るものの、ハジメと同じくらいの長身の男をユウは見上げた。鋭い目つきが少し怖いが、彼ならメイジエスの護衛でも何ら不思議ではない。

「俺はゼル・ミカエル。アンジュはもう少しで帰ってくる。それまでここで待たせてやってもいいが」

ゼルはニヤリと笑い、ゆっくりとユウに近付いて来る。

「お前、なかなか可愛いな。俺の相手をしないか？」

顎を指で持ち上げられ、強制的に顔を見合わせる形にされた。それもカイやソラの目の前で、だ。今日で可愛いと言われるのは一体何回目だろう、と溜め息を吐くが、かと言ってゼルに無礼な態度を

取る事は出来ない。

すると、カイがゼルの手を弾いてくれた。

「俺の弟分に何すんだよ」

強そうな者同士で戦う気満々、といった様子である。

しかし、カイはやはりいい兄貴分だとユウは思った。こんな時にも気持ちを察してくれるから　カイも本当の兄だったらしいのに、とひたすら考える。

「弟分？　妹じゃなくてか？」

「あら、ユウちゃんは男の子よ」

「……レイルの子は可愛いからな……すまんかった」

ゼルはそんな事を言いながら、後ろ頭を掻いてユウを離れた。どうやら、カイとは戦う気はないらしい。

レイル族の子が好みなのは分かるが、ユウは胸がない。服装に露出度が高いので、せめて胸のなさで男女の区別をつけてほしいのだ。彼が離すか離さないかの瀬戸際、玄関のドアが開いた。

「ゼル、また女の子たぶらかして……」

金髪の癖毛な少女が紙袋を片手で抱えて現れ、家の小さな扉を閉める。

彼女はハジメと似たような服装で、腰まである金髪を解放し、頭にはサークレットを付けている。サノン族特有の金の目でユウ達三人を交互に見、軽くお辞儀をした。

「きゃ、客人ですか？　私はアンジュ・ミカエル大尉　ゼルの姉です」

人見知りをするのか、おどおどした様子で少女は言った。

女？　メイジェスが信用する軍人が？　女性に偏見がある訳

では決してないが、アンジュは頼りなさそうなのだ。身長もソラと変わらない、ユウより少し高いくらいである。

「貴女がアンジュさんか。俺達はメイジェス陛下の使いで、アンジュさんを迎えに来たんだ」

カイが簡潔に用を説明した。

「陛下が呼びということ……ギルウィン様が帰って来られたのですね？」

アンジュはゼルに紙袋を渡し、がらりと表情を変えた。

ギルウィンとは、確かハジメのファミリーネームである。アンジュとハジメは何か関係があるのだろうか。

「ハジメがどうかしたか？」

ニヤニヤと笑い、カイが訊く。

もしかして、今ハジメが付き合っている女性なのだろうか。だとしたら、何故だか少し複雑な心境である。ハジメは確かに、アスナ以上の女性はいないと言っていたからだ。

「ギルウィン様は女兵士の憧れです。カッコいいですし、二十歳の若さで少将に昇進ですよ？　まだお話しした事はないんですけどね」
嬉しそうにアンジュは身仕度を始める。

「なあソラ、ハジメってモテるんだな」

「そうみたいね……でも、あの容姿と強さだったら分かる気がするよ。強い人には憧れるもん」

「そ、そうか……じゃあ、ソラはハジメが？」

「カイだつて強いじゃない」

少しの待機時間だが、カイとソラがそんな会話をしているのが聞こえてきた。客観的に見ると、経験のないユウでも分かるくらい、二人は両思いなのに。どうしてお互いに鈍感なのだろう、と少しもどかしくなるが、あまり男女の仲に口出しはしない方がいいらしいので、それだけは避ける事にした。

それを聞いていなかったアンジュは、ようやく忙しそうに旅の準備を終えた。

「準備が整いました。陛下のところへ行きましょう」

彼女が旅支度を終えた途端、外が騒がしくなっているのが中からも聞こえた。

「な、何だろ？」

「行ってみようぜ！」

街の人々が騒いでいる。いや、騒いでいると言つよりは、何かに恐れて悲鳴を上げているような感じである。

ミカエル家の家の中にいたユウ達は、急いで外に出た。街の人が道の真ん中を開け、何かを見ている。

何かと思い、前まで出てみると、紫色の髪をした少年 本来ならかなり年季が入っているのかも知れないが と目が合った。

彼は目が合うなり、不機嫌そうな顔を満面の笑みに変え、ユウの目の前までゆつくりと歩いてくる。

辺りが少年に注目し、空気が張り詰められる。

「久し振り、ユウちゃん」

少年は確かにそう言い、ユウに抱き付いた。彼に会った覚えもないし、名前も教えて覚えもない。一体なぜ、ユウの事をしているのだろう。

不思議に思つたユウは顔を上げ、首を傾げて彼を見つめる。

「あなたは誰ですか？」

知らない人、沈黙する人々。ユウの声は緊張に震えている。

紫色の、腰くらいまで長い髪をした少年の目は、ハジメと同じ深紅を彩っている。きっとナリユエ族だから、周りのサノン族が騒いでいたのだろう。

「シオンだよ。お前の恋人だ。忘れたのか？」

「こ、恋人っ!？」

「仕方ないな、何年も前の事だ……でも、ユウに会えて良かった。愛してるぜ！」

抵抗する暇も与えられなかった。

頬に軽いキスを落とされ、腕を離して去って行く彼の背中をぼかんと見つめ、何の事だろうと考え直す。

だが、思い出す事は出来ない。ユウには恋人はいないし、ましてやそれも男なのだ。背はカイと同じくらいだろうか よく分からないまま、混乱して振り返った。

案の定、カイもソラもぼかんとしてユウを見ている。

「今の、何？」

やつのことでカイは口を開いたのだが、不思議そうにシオンが通り過ぎて行った場所を見つめている。

「分かんない。俺、身に覚えがなくて……」

シオンという名前の人物とは、今までの人生で会った事がなかった。それに相手は敵であるナリュエ族だ。

まさか呪いを掛けられた？ いや、ルクリア人の身体には、

アス力で使われる呪いの原理は通用しない。

「魔性だ……」

「違うよ！ ホントに知らない人なんだってば！」

「でも、ゼルも騙されたる？ ユウの容姿はそっち系の男を引きつけるんだな」

ナリュエ族のユウのファンなんじゃね、とカイは笑った。だが、訊くまで名前を知らなかったとなると、シオンは人違いか何かをしているのではないだろうか。

「俺はそっち系じゃない！」

ゼルは顔を赤くしてそれを否定する。

「ナリュエ族が追って来たのかしら……とにかく、早く行った方が良さそうね」

ユウの心情を読んだソラは話題を切り替え、ステンに行く事を促してくれた。

いくら女みたいだとは言え、見知らぬ男に急に「愛してるぜ」なんて言われると、バカにされているみたいで相当傷付いてしまう。おまけに頬にキスまでされたのだ。

アンジュは弟であるゼルに別れを告げると、ユウ達と一緒にステンへ付いて行った。

ユウと別れてから、正直を言うと少し寂しい。

姉が死んでからというものの、ずっと一人で生きて来たからか、久しぶりにぬくもりを感じられたのだ。

ユウは自分では否定するが、本当はすごく優しい子だ。ハジメはユウのそれを含めた全てが好きだ。伝わりはしないのだが、彼を見ているだけで心が安らぐ。

「ユウが恋しいですか？」

黙って歩く様子を見たからか、からかうようにキラは笑う。

いつかの夜、彼が急に深刻な顔で告げた事がある。アマネの事だ。キラはハジメがユウを好くのと同じような理由でアマネが好きで、誰から見ても依存している。しかし、主従関係を崩す訳にはいかなからか、それを行動や言動に移す事は出来ない。だから色んな女性を抱いて、気を紛らわしているのだと。

「お前こそ、女がいなくて寂しいか？」

お互いの気持ちを知っているからこそ、そんな風にかからかい合う。ハジメも同じだ。姉のアスナが死んで、十歳になったハジメはその頃から年上の女性に可愛がられるようになり、様々な行為を覚えた。最初は何を覚えただろう。確か、唇を重ねる事だった。

「残念でした。ニュードイルらしき街は見えてきましたし」

僕は寂しくはありません、と付け加えたキラは、ふざけながらも笑っている。

「あそこが……ママの生まれた国なの？」

まだ幼く、十七歳とは到底思えないような口調でアマネが首を傾げる。この口調で身体も小さいとなると、弟のユウよりも幼く見えてしまうのだ。

小柄なアマネは双子のようにユウにそっくりである。碧い目も栗色の髪も、白い肌まで全てが同じ色をしている。しかし、アマネには瞳に『感情』を映す事がないのだ。

それに、ユウはアスナに似ているが、アマネはそうではない。何故かは分からないが、アスナの面影はユウにだけ感じられる。現に、メイジエスもそうだったのだ。

まるで一人の王子とその護衛のような三人は、間もなくレイル族が治めるニュードイル国に到着した。

ステンより自然が多い。ニユードイル城はもつと先に見えるのだが、その前に民家に突き当たる。

早朝なので、碧い瞳をしたレイル族は働きに出掛ける者も多く、中にはステンへ向かう者も少なくはないようだ。

歩いていると、一人のレイル族が歓声を上げた。

「サラ様とハルヤ様が帰って来られた！」

途端、他のレイル族まで集まって来て、前に進める状態ではなくなった。

サラという名前には聞き覚えがある。確か、ユウとアマネの母親で、ナリュエ族から逃げたアス力で、火事で死んでしまったニユードイル国の王女である。

「落ち着いて下さい。僕達はサラ様でも、ハルヤでもありません」
キラが住民達に冷静に言った。

彼らが親世代のサラ達とアマネ達を間違えるのは、きつと相当似ているからだろう。

「本当だ。似ているけど違う。ハルヤ様はこんなに背が高くなかつたし、サラ様はもつと……」

「胸があつたよな」

人々が騒ぐ中、どうしてもよさそうな会話が聞こえてくる。

「僕はキラ。ハルヤ・ダーティスの息子です」

レイル族のほとんどが小柄で、ユウより少し大きい小さいかである。彼らの中で見ると、アマネも標準に見えるのだ。それを言うとき、キラはオッドアイなだけあり、アス力人の血が濃く顕れている。さすがに彼が喋ると住民が一斉に沈黙し、じつとこちらを見て話を聞いていた。

「ボクがサラの息子のアマネです」

アマネが言ったか言わないかの境目だった。

人混みを掻き分け、前に出て来る人物がいた。それも掻き分けるというより、その人物に気付いた人々が道を開けるような感じだ。

「アマネ様、キラ様。お会い出来て光栄です。私はサタン・ルシフ

エル　ここ暫く、アヴェ二国の陛下と共にニユードイルを管理していた学者です」

濃いオレンジ色の髪をしたルシフェル　彼はアヴェ二国内でも有名な学者で、主にルクリアの地学を研究していると聞く。

賢い学者で有名くらいなので、その頭脳はキラに匹敵するくらいだろう。

「俺はアマネの護衛役のギルウィンだ。メイジェス陛下から、ディールの迎えを命じられたのだが」

他のレイル族と比べたら少し大きめのルシフェルは、ハジメの名前を聞いて表情を一瞬だけ変えた。

「ギルウィン様、従姉妹のディールより話には聞いております。

彼女は今、私の家に来ていますので、そこまで案内しましょうか？」

「ああ、頼む」

どうやら、用事は早く済みそうだ。

「私がディール・ルシフェル少尉ですっ！　初めまして、ギルウィン少将！　いやあ、ホントにカッコいいですねえ！　私ってばずっと尊敬してたんですよ」

部屋に通され、いざディールを見てみると、ルシフェルと同じ濃いオレンジの髪をした普通の少女　それがアヴェ二国の軍服を着ているだけのような、軽い印象を与えられる。

見た目もとても軍人とは思えないし、ましてやよく少尉まで上がってこれたと思うほど、知性のない喋り方をしているのだ。

これが本当にメイジェスの信用する部下なのかと思うと、どうにも信じられないのだ。もしかすると、油断させるためにキャラクタ―をあらかじめ作っているのかも知れない。

「ハジメさんの階級、少将だったのですか？」

「五年前からそうだが、それがどうかしたか？」

「いえ、今まで明かされていなかったの……そんなに高い地位だとは思いませんでした」

「これ以上に上がる気はないし、そこまでの身分を明かす必要はないと思っていたからな」

ハジメがたった十年で少将まで上がる事が出来たのは、かなりの努力があり、ほんのひとつの生きる道だと信じ、夢中で軍の仕事をしてきたからだ。この階級だからこそ、メイジェスの命令で特別にナリユエ族のスパイを任されていたのもある。

ユウという希望を見付けてしまった以上、軍に執着する気はない、という考えもあるのだ。

「どうかしましたか？」

その少女の隣りで、聡明そうなルシフェルが首を傾げる。とても血の繋がりがあるとは思えない。似ているのは髪の色と目の色だけなのだ。

「何でもない。それよりルシフェル少尉」

「ディールでいいんですよぉ」

「……ディール。どういう経緯で陛下護衛役になった？」

気になるところだ。どうしてアンジュという人物と、目の前にいるディールなのだろうか。それも、階級はさほど上位ではない。

現在のアヴェ二国は内乱が起き兼ねない状況だからか、ハジメがスパイに出ていた五年の間、メイジェスは血迷ってしまったのだろうか。

その時、彼女の碧眼が急に鋭くなった。

「アディーフ将軍が陛下を裏切り始めているのは、ギルウィン少将もご存じですね？ このままでは危ないと思い、階級が低いながらも私とミカエル大尉は護衛役を自ら買って出たのです」

まともに話せるではないか、とハジメは内心ホッとした。

「ただ、今回はギルウィン少将が帰って来るまではアディーフ将軍も動けない状況だったので、私達は特別に貴方が帰るまで休暇をもらっていました」

そういう話なら分かる気がする。城にはエルバントという味方もいるし、最初からユウ達にルクリアに慣れてもらうため、彼女らを

迎えに行かせる気だったのだろう。

「ナリユエ族が《カリユダ》の力を手に入れたら、それこそまずいですね。そのアディーフとやらも、アマネがナリユエ族に連れて行かれていないのを確認したかったのでしょうか」

「それもあるが、奴は王族のアマネとユウを城に迎え入れるのにはいい顔をしなかった……《カリユダ》を持つアマネを殺せば済む、と言ったくらいだからな」

アマネを殺してしまうと、それこそアディーフの思い通りに事が進む。

計画に失敗したナリユエ族はすぐにサノン族との戦争を再開するだろうし、たとえ中立な国家だと言えど、信頼する王女の子を殺されたレイル族だって、どんな反応を取るかは定かではないからだ。戦争主義者の彼は、とにかく戦争を起こし、サノン族だけの理想郷を創る事が目標だと漏らしていた。

「そうですね。早く辞めてもらわなければ、こちらが困りますねえ」
冷静な物言いだ、キラの表情は強張っている。アマネを殺す、とか、彼に危害を加える言葉には敏感なのだ。

「でもお、城にはエルバント大佐もいる事だし、もし襲われても陛下は大丈夫ですよ！」

軽い物言いに戻ったディールに、また頭を抱える事になる。頼むから、先ほどの口調のまま話してほしい。心の中でハジメは叫んだ。

「そろそろ、行った方がいいと思う……ボク達が早く行かなきゃ、ユウ達も待つ時間が長いんだよ？ その間にアディーフが襲撃したら……」

「まずいですね。カイでも一つの街は守りきれないでしょうから」
アマネの提案にキラも頷いた。

「ルシフェル。ディールを借りて行くぞ」

一刻も早くメイジエスの身の安全を確認したいし、今後のアディーフのやナリユエ族の行動も気になるのだ。

「じゃあサタン、行ってくるからあゝ」

ディールを含めた四人は、それから再びステンへと戻る事を決めた。

ニードイルからステンへ歩くには、また丸五日は掛かるだろう。急いで行けば四日だが、こちらには身体の弱い子供もいるし、女だっている。アスカにあったベヒケルという乗り物が恋しくなる時期である。

メイジエスは無事なのだろうか。それよりも、ユウ達のグループが無事にトリジャまで辿り着けたかが問題だ。途中で魔物にやられていないか、自分で大丈夫だとユウに言い聞かせたものの、不安なのは変わらなかった。

霧で前が見えにくい道を速足で戦闘を歩くハジメに、キラがこっそりと耳打ちする。

「不安ですか？」

「どうやら、彼にはそんな気持ちが分かってしまったようだ。」

「ユウに会うまで安心出来ん」

本心を呟く。ここまで生きている他人に依存してしまうのは、アスナが死んで以来だ。

「貴方がユウ様とその力を守り抜く事が出来たら……」

キラがそう言い掛けた時、闇のスロナの力を感じた。

同じ闇の力を授かった者は、若干だがそのスロナを感じる事が出来るのだ。もともと、訓練していないと出来ないし、よほど強くなければ感じ取る事は不可能である。

リキュードの闇の力は弱かった。だからぶつかり合う事もなく、簡単に彼を倒せたのだ。

だが、今回は肌感じられるほどに、それもかなり強力な闇のスロナである。こんな力を持った者は、今までに一人しかいなかった。

「久し振りだな、ハザイム」

やはりそうか、と霧を掻き分けて現れる人物を見て呟いた。

「何なのお？」

霧の中、後ろの方は目を凝らさなければ見えなだろう。深い霧に苛々している様子でディールは言った。

「アラタ。何しに来た？」

霧の中に現れたのは、アラタ・ライアルという名のナリュエ族だ。きれいな緑色の髪をしていて、失った右目を黒の眼帯で覆っている。ハジメはスパイで味方のふりをしていたから、名前と顔は割られている。

まさか、ここで会うのは予想外だ。すぐ後ろは隻眼のアラタも見える筈なので、レイル族のキラは危ない。

「お前、今まで何処に行っていたんだ。アマネとやらではないようだが……そのレイル族は誰だ？」

霧があつたのが唯一の救いである。後ろでディールと一緒に歩いていたため、アマネの姿はばやけてしか見えないのだ。レイル族というのも分からないだろう。

キラは事の重大さに気付いたようで、すぐ後ろで焦っているように思える。

「アマネはまだアスカにいる。その情報をここにいたレイル族から聞き出しただけだ」

「まだアスカに？　俺は急いでソロモン様に伝える。お前はアスカに行つてアマネを連れて来るんだぞ」

踵を返し、アラタは帰って行つた。

せめてもの救いが、ナリュエ族のスパイをしていた時、彼とはしよっちゅう話していて、大体の性格を把握している事だった。

「……もういいんですか？」

キラは溜め息を吐いた。

「ああ。奴は少しはずれているから……ナリュエ族の頭のソロモンに忠誠を誓ったとかで、向こうの間の抜けた幹部だ」

半ば呆れながら言うが、アラタ自身を嫌いではないのだ。素直になれなかったり、ソロモンに忠誠を誓うあまりに突飛な行動を取っ

たりするが、根はさほど悪くはない。

ただ、注意すべきは強い闇の力だ。あれがあるからこそ、彼が幹部に昇格出来たのである。

「それは面白くありませんね。早くステンに行かなければ」

それを聞いてすぐに冷静になったキラは、後ろの方で固まっているアマネの手を引き、ディーブルに歩く事を促した。

これからが特に厳しい道で、アヴェ二国内の混乱を未然に防がなければならぬ。それだけではなく、ナリユエ族との問題も解決し、早くニュードイル王にアマネを立たせなければならないのだ。

二日間続いた霧の道を抜けた四人は、急いでステンへと向かった。

6・アルステイナ

アヴェエ二国のステンに帰って来た頃には、アディーフの手下によって街は破壊されていた。

活気のあつた街は寂れ、民家はところどころを壊されており、陛下派のサノン軍とアディーフの反乱軍が戦っていたところのようだ。ユウには詳しくは分らないが、サノン族の中では左翼の陛下側を批判するアディーフという将軍が反乱軍を結成し、メイジエスを殺して自らが王になり、ナリユエ族と戦争する事が狙いのようなのだ。

力のほどは反乱軍の方が上だった。

ユウ達は各自に別れ、負傷者を助ける事に専念するために、各自が回復系のアイテムを持って、寂れてしまった街を徘徊した。

そんなとき、ユウは一人の少年を見付けた。

「大丈夫ですか!？」

戦いから何とか逃れてきたのか、傷だらけの少年が建物の影にひっそりと座り込んでいるのを発見した。

「ユウさん……」

茶髪、そして金色の瞳。

ユウは《カリユダ》の力で治療している中、どこかで見覚えのある顔だと思いきや、優しい兵士だと印象づけられたエルバントだった。

彼は瀕死の状態であり、ユウの《カリユダ》の力でも手を付けられないほど、酷く腹部に火傷を負っている。

「エルバントさん！俺が必ず、治しますから……！」

そう言いながらも、心のどこかでは分かっていた。エルバントは助からない。いや、ユウのわずかな力やアイテムなんかでは助けられない。それでも諦めなかったのは、これ以上の犠牲者を出したくなかったからだ。

辺りの人々には死ぬか逃げるかした形跡が見られ、ほとんど人間は残っていない。ルクリア人は死んだら消えてしまうのだ。

「なぜ、貴方は私を助けようとするのですか？」

「助きたいから……」

「そう……ですか」

この場にアマネがいなくてよかった。いたらきつと、彼は人の死に怯えてしまうから。

大量の血が滴り、いくら治療に慣れているとは言え、至近距離でするのは少し怖い。それでも、彼の治療はやめなかった。

「アルステイナ……」

震える手でユウの頬に触れ、初めて会ったときのように、彼は金色の目を細めて穏やかに微笑んだ。

「やはり、君は優しいな。ハジメ様を、頼むぞ……我儘だが、私の望みを、聞いてくれないか……？」

触れ合う肌が温かった。

「俺にできることなら」

人が死ぬのは見たくないと思っていた。

「笑ってくれ、アルステイナ」

それでも、現実から逃れられる事は不可能なのだ。

ユウが静かに笑うと、金色の瞳は二度と開かれる事はなかった。

どうしてエルバントはゆうの笑顔を求めた？ 何度もユウを見て懐かしそうに言った、「アルステイナ」って何なのだろう 分かってあげられない自分がもどかしく、その命を助けられなかった自分に嫌悪した。

目を閉じ、冷たくなったエルバントの身体は、ゆっくりと透明になっっていた。これが死というものなのだ。

ゆっくり、ゆっくりとフェードアウトして、彼はどんどん空気と同じ色になっていく。

次に瞬きをした瞬間には、治療していた彼の身体は消えていた。周りに散った焼かれた建物の灰が共に風に流され、彼の死を告げる。

「きゅうつ……」

ずっと頭の上でおとなしくしていたパプリカだったが、やはり生物の死には敏感なようで、悲しそうな鳴き声を出している。

「また、人を助けられなかったよ……」

頭から降り、エルバントが横たわっていた地面をじっと見つめるパプリカを抱き締め、こっそりとユウは泣いた。

他のみんなはどうしているだろうか。ユウのように、人が死ぬのを見てしまったのだろうか。メイジエは見つかったのだろうか。それとも。

「ごめん、エルバントさん、みんな……」

冷たくなった手の温度が痛いほどに伝わっていた、安らかな顔で永眠に就くエルバントを思い出し、そのまま泣き崩れていた。

立ち上がった後も涙は流れる。もう後悔はしないと決めたのに、どうしてこんなに弱いのだろう。

「おい！ メイジエス陛下が見つかったぜ！」

遠くの瓦礫の山から、カイとソラ、それにアンジュが手を振っているのが分かる。辺りに人間は他にいないし、水色の髪は彼くらいしかないだろう。

パプリカを頭に載せ、彼らがいる場所まで走って行った。

「陛下……」

見ると、高貴な印象だったそれは崩れ、メイジエスは安っぽくて貧相な布を被って震えている。

今まで皇帝陛下として戦った事もないだろうし、そうなるのも無理もないだろう。目の前で人が次々に死んで行くのだ。

「情けないだろ。国民を守るところか、国民に守られるなんて……こんなんじゃ、アスナー人守れないのも当たり前だ」

違う。悪いのはアディーフだ。ユウ達が帰ってくる直前に内乱を仕掛けるなんて、せめてメイジエスが生き残ってくれた事が、国民にも喜ばしい事なのに。

「陛下は悪くないです。アスナさんだって、亡くなったのはあなた

のせいじゃない」

頭を抱えるメイジエスに、言い聞かせるようにユウは言った。
荒廃してしまった街は元には戻る。しかし、死んでしまった人は元には戻らないのだ。中には逃げきれた人もいるのだし、責任が全て彼にあるとは限らないのだ。

「ユウさん、少し傍にいてあげて下さい。今からニードイルに向かって、途中でギルウィン少将達と合流しましょう」

その様子に目を逸らしたアンジュはそう言った。

メイジエスだけでなく、カイやソラだって、人が死ぬのを見て心が締め付けられた筈なのだ。それに、ソラはまだそれを一度も見た事がないから、ショックはカイの倍以上だろう。アンジュは軍人だが陛下派なだけあり、やはり戦争は好きではないようだ。

その日はニードイルに向かって歩き始めた。何としてもステンを離れなければ、メイジエスの命がまた狙われてしまう危険性があるからだ。

夜になった。星は綺麗だが、ユウは眠れなかった。

メイジエスは僅かな味方の兵士達に助けられ、現在はユウ達とニードイルへ、残りのメンバーと合流するために向かっている。

アヴェエ二国の首都ステンは急に攻められ、軍の準備も整っていないまま、アディーフが結成した反乱軍に圧倒されてしまったようだ。何だろう。

闇の中、女の子の声が響く。知らない人の声で、それも頭に直接音声を流してくるような、なんとも言えない感覚である。

ソラでもアンジュでもなく、その声はユウの名前を呼び続ける。

『ユウ』

まただ。また、誰かがゆうを呼んでいる。

（ソラ？ アンジュ？）

ユウは混乱し、知っているルクリアの女性の名前を頭の中で挙げた。

『違うの。私はアスナ』

何がしたいのだろう。

（誰？）

そう念じた後、ある事に気付いた。

アスナ　ハジメの姉である女性の人格が、ユウの中で目覚めたのかも知れない。

（アスナさん……ハジメさんのお姉さんの？）

ユウは必死に問い掛ける。

『そう、私はハジメの姉。あなたはやっぱり賢いね』

アスナの顔は見えないが、そう言うと同時に彼女が笑ったような気がした。

ユウに何の用があるのだろうか。彼女が会いたい人と言えば、生前一度も会った事のないユウではなく、実の弟のハジメや恋人のメイジエスなのだ。

まさか、似ているユウの人格を欲しがっている？　似ているこの姿ならメイジエスとも結ばれて、ハジメの信用も得られるから。

（俺はあなたじゃない！）

最低だと思いながら、ユウは必死に彼女を否定した。アスナを素直に受け入れてしまうと、きっとハジメもメイジエスも彼女を選んでしまう。信じていない訳ではないが、本物の姉や恋人には敵わないだろう。

自分を奪われてしまうのが怖かった。

『違うの。私はあなたの人格を奪うつもりはないんだよ。それに、ハジメはあなたが大切だから、あなたを見捨てることはない。ただ、もう一度だけ……メイジエス様と二人でお話しがしたいの』

性格の良さ言えば、ユウはアスナに勝てはしないだろう。似ているのは外見だけで、ひとつも優しくなかなかない。勝手な被害妄想をした事を深く反省する。

死んでもまだ意識があるとして、まだ生きているアマネに出会ったでしょう。もし自分の人格がその身体の中で目覚めたら、きっと

自分の欲が出てしまう。ユウはハジメが言うような、優しい子なんかには到底なれやしない。

（ごめんなさい、アスナさん）

愛する人に一度だけ会いたいという、アスナの気持ちは分からなくはなかった。ユウだって、会えるのならば両親にもう一度会いたいからだ。

ユウは自らの意思でアスナを信じ、意識を彼女に預ける事にした。

ユウに頼んで身体を貸してもらったと同然のアスナは、暗い夜の中で身体を起こした。

久し振りの自分の身体。アスナにはユウの感情が流れ込んでくる。アスナがユウより少しだけ大人だから、彼の人格を奪わないだけ実際なら、油断すれば欲が働いてしまうだろう。

死んでからすぐに、魂だけがルクリアで目覚めたときからすべてを見て来た。メイジエスはアスナが死んで以来、民のためにずっと頑張ってきた。今だからこそ、話をしたいのだ。

カイモソラも、アンジユも眠っている。

ただ一人、メイジエスだけは起きていたのだが。

「ユウ。どうした？ エルバントの事が気になるか？」

愛する人の姿だ。だが彼は、自分のせいで多くの民が死んだと思っっている。すごく優しい人だと知っているユウには、メイジエスが感情を隠しているのが分かるのだ。

「ルイ・エルバントさん……彼はハジメを理解してくれて、お世話してくれた兵士ですからね……」

エルバントは優しい人だ。それだけはアスナにも分かった。

「そうだ。ユウ、こっちに来てくれないか」

「はい、メイジエス様……」

「ユウ、そう呼ぶもんじゃない。アスナを思い出すだろ？」

メイジエスはまだ知らなかったのをアスナは忘れていた。

「私、あなたの婚約者だったアスナ・ルティ・ギルウィンです。今夜だけ、ですけどね」

愛する人の目に、アスナはどう映るだろうか。少なくとも、今は可愛いユウの姿である。

「アスナ……信じていいのか？」

久し振りに夜の大地の冷たさに触れた、小さな身体を丸めてメイジエスの隣りに腰を下ろした。

「はい。十五年前からずっと、今までの経緯を見してきました。今夜だけ、あなたと話したくて」

知らない人に連れて行かれ、身体を弄ばれた挙げ句に殺された日、メイジエスやハジメには何も言えないままに死んで行った。

「お前との約束……平和を守って、戦争をなくしていくことだったな。それを守れなかった俺には、お前を愛する資格はない」

明るい性格で表には出さないが、責任感のあるメイジエスはずっと引きずっているようだった。

「……陛下は最善を尽くした筈です。それに、私は死んだのですから、陛下は私を忘れて幸せになるべきですよ」

死んだ恋人のことを忘れて、新しい好きな人を作り、幸せになつてほしかった。

今回の事はメイジエスのせいではない。アスナの言いたかった事は、たったそれだけだ。

「こんな事を言うとはジメみたいだが……アスナ以上の女はいないんだ」

そう言えば、ハジメも同じような事を誰かに言っていた気がする。それだけアスナを慕っていてくれたことなのだろうが、弟に言われるのと恋人に言われるのでは、随分と感じ方が違うものである。

「陛下もハジメと同じように、ユウに私を重ねましたね」

ふと、思い出したようにアスナは言った。

「ああ。ユウはお前の生まれ変わりかと思ったくらいだ……」

「それは違います。でも、光の力を持った清い子だったので、話し

掛ける事が出来たのです」

「そうなのか。だが、俺はハジメがあの子連れてきて嬉しかったぞ……あの姉さんべったりだったチビガキが、俺の身長越しやがって」

アスナのよく知っているハジメは、今のように凛々しい青年ではなかった。五歳離れた姉からなかなか離れようとせず、その恋人のメイジエスによく反発していたものだ。

「ハジメ、あんな風になるとは思いませんでした。一人のひとをそんなに大切に思うなんて……」

アスナから帰って来た彼を見て、昔の弟からは想像出来なかった姿に感激した。ハジメがユウを誰よりも必要としていると言っても過言ではない様子なのだ。

ふとした瞬間に、メイジエスに抱き寄せられる。

ユウがまだ生きていた十五年前、確かな幸せを見付けた、声に出せないような嬉しい瞬間だった。

「……アスナが死んで十五年、か。色々あったが、お前だけに言わなければならぬ事がある。……ショックを受けるなよ？」

「私にはもう、色々な覚悟ができていますから」

現にアスナは、もうこの世にいないのだから。

「お前はマモルの子じゃない。チェリシュと……エルバントの子なんだ」

アスナは当時の出来事を回想した。

まだ五歳の頃だった。母親のチェリシュは原因は何かは分からなかったが、ハジメを産んだ直後に心の病気で自害した。

チェリシュは生まれた直後のハジメを『悪魔』だと言っていた。奇形で生まれ、紅い瞳になってしまったのもあるが、心に異常があったためか、『悪魔』を意味する名前を息子に付けたのだ。

チェリシュは数日後に自害し、軍人だった父親のマモルはその一週間後に帰って来たのだが、彼女が死んだのを確認してからどこかに出て行った。

それからマメルも帰ってくる事はなく、本名を隠して似た発音だった『ハジメ』と呼ぶようになったのだ。

「そうですか。でも、それでもいいです。貴族じゃなくても、エルバントさんは優しくて立派だったから。ハジメはお父様との子ですよ？」

ユウと一緒に見ていた、エルバントの最期の姿、それと言葉。思い出せば、確かに彼は「アルステイナ」よく分からない言葉を残していた。

「その通りだ。お前らは父親が違う。貴族に氣に入られたチェリシユも、その婚約者のエルバントも、マメルには逆らえなかった」話している最中、メイジエスに頭を撫でられる。

「だから彼女はギルウィン家に嫁ぐ事になったんだ。チェリシユはエルバントの子『アルステイナ』を身籠もっていた。それがお前なんだ、アスナ」

自分がどうであれ、本物の両親が哀れに感じてしまう。好きな人との婚姻を許されなかったエルバントは、きっとマメルを恨んでいただろう。

「お母様、寂しかったのかな。だから私、ギルウィン家の子供なのに、明るい茶髪だったんですね……」

父親のマメルがいない時に生まれた、紅い瞳の赤子に『悪魔』を意味する名を付け、放置したチェリシユを、当時のアスナは良く思っていた。いなかった。

だが、きつと母親は辛かったのだろう。好きでない人との子供で、その上奇形として生まれてきたのだ。

チェリシユが心の病になった原因が、今頃になって分かったのだ。「アスナ……いいか？」

メイジエスを見上げると、それとほぼ同時に顎を持ち上げられた。「いけません。この子はハジメの大切な人です」

自分の身体だったら、何の迷いもなく捧げているのに。

「そうだった、すまない。つい、ユウをお前と重ねてしまうからな

……」

「こうしてそばにいただけなら、大丈夫です」

アスナは目を閉じ、溶け合う体温を感じた。

もう二度と、自分の身体で、こんなふうに愛情を感じる事は出来ないのだ。

アスナはもういない。存在しない人物である。受け入れがたい事実混乱するが、それでもメイジエスやハジメが幸せならいいと思った。

だが、ルクリアはまだ平和どころか戦争の問題も改正されておらず、メイジエスは追われる身、ハジメは若いながらも戦いざるを得ない状況だ。

「アスナを殺した奴が、たとえ民でも憎い。二度とお前に触れられないんだぞ？　どんなに愛していても、愛してと言う事しか出来ないんだ……」

目に焼き付く炎が妙に生々しい。

「私はそれで十分ですよ。前みたいに触れられなくても、私はあなただけを愛しています……だから、もう恨まないで下さい。貴方には幸せになってほしいから」

たとえそれが誰で、どんな事をした相手であっても、人を恨む事はしてほしくない。愛する人にだから言える言葉だった。

「アスナは昔から優しいな。初めて会った時から、俺を惚れさせただけある」

「私は五歳、貴方は十五歳だったじゃないですか……あの頃は仕事を探してたから、貴方に気に入られてラッキーかなって思ってたけど」

幼いながらにして両親を失い、生まれたばかりのハジメの面倒を見てくれて、その上生活援助までしてくれたのはエルバントだった。彼に返金したいと思って行った城での仕事で、まさか王子だったメイジエスとこんな関係になるとは思っていなかったのだ。

「チェリシュに似て可愛かったからな。あれからだ、他の女など気

にならなくなったのは」

大きな身体で、アスナの心が宿るユウに甘えて。

昔の光景を思い出させるそれに、心が少し揺れていた。ずっと分かっていて。アスナは優しくなんかない。本当は、このままずっと生きていたい。

これが本当の最後だと思うと、手放したくなるから。

「そろそろ、ユウに戻らないと……私の気持ちが強くなるから」

アスナの我儘が許されないのは分かっていたし、もう覚悟は出来ていた筈なのだ。

「アスナ、愛してる。お前以外はもう」

メイジエスが言いたかった事は、わざと最後まで聞かなかった。夜の闇の中、ユウは二度と戻らない意識を手放したのだ。

昨夜、ユウはアスナに身体を貸したと同然の行いをした。彼女だった時の記憶は全くない。あれから彼女からの連絡は一切ないが、メイジエスは少しでも元氣を取り戻したようだった。

しかし、このメンバーでは旅に慣れている男がカイくらいしかないため、野営をするのにも一苦労だ。ユウはひ弱なために獲物を捕る事もままならず料理のみ、メイジエスは料理も狩りも全く慣れていない。ソラも料理が上手くないし、アンジユも野営は未体験な様子だった。

早くハジメやキラと合流しなければ、ニユードイルに近くなるに連れて強くなっていく魔物たちと戦っている、カイの身がもたないのだ。

ユウの《カリユダ》でも治せる事は治せるのだが、いくら使ってもきりが無い。それに、《カリユダ》もあまり使い過ぎるとユウが疲れてしまい、重症の時の対処が遅れてしまうのだ。

魔術が使えるといっても、ソラの魔術は魔法陣を組まなければならないため、どうしてもカイの守りが必要なのだ。そして、軍人であるアンジユも元々は事務の方を専門としているのもあり、男の力

にはやはり勝てないようだ。

「カイさん。大丈夫ですか？」

そんなカイの心配を、アンジュはしていた。

というより、魔物から守ってくれるカイを彼女は気に入ってしまったようで、おとなしいながらにアプローチにはすごいものを感じた。

「ん、ああ。平気平気！」

それに気付いていないカイは愛想よく返事をするのだが、端から見るとお似合いのカップルのようだ。

「あいつらってばデキてるのか？ いいなー、羨ましいなー」

わざとらしくメイジェスがニヤニヤと笑い、ソラの闘争心に火を付ける。かと思いきや、ソラは平然と一番後ろで歩いているのだ。ソラもカイが好きな筈だ。このままでいいのだろうか、とユウは彼女を見た後、メイジェスを睨んだ。

「陛下のばか！」

感情的になってしまい、つい礼儀というものを忘れてしまう。

「……ユウ、お前ってカイが好きなのか？」

「そりゃ、好きです、けど」

「そ、そうか。その、なんだ……ああいう熱血男が好みなんだな？」
そういう意味じゃないのに、と言い返そうとしたが、その解釈に言い返す気も失せる。

「メイジェス陛下。ハジメさんも言ってたけど、ユウちゃんをからかわないで下さい！」

脱力していると、後ろからソラがフォローしてくれた。

彼女は口には出さないが、カイが他の女性と仲良くなっているのを見て、少し気が立っているようだ。

「陛下、ユウの背後にはハジメとキラという最強コンビがいるから、からかうのはやめた方がいいぜ？ 特にキラは怖いからな！」

ちゃんと聞いていたのか、明るく笑ったカイがユウ達より幾分か離れた場所から振り向いた。だが、彼の言った事は間違いではない。

ハジメは怖いと言えば怖い、根はまだ優しい。だが、キラの方は逆に、優しいのは表面だけで中身は恐ろしいほど腹黒いのだ。

特にキラの事は、彼の授業を受けた生徒しかその怖さを知らない。カイには人を見抜く力があるようだ。

「キラってそんなに怖いのか？ お前らの中でも一番紳士的じゃないか」

「陛下はまだ知らないんだ。アイツはすげえ腹黒で、説教には鞭まで装備してくるんだ！ しかもハンパない変態タラシ野郎なんだぜ！」

遠くの方まで聞こえてしまいそうな大声でカイは言っていた。

しかし、彼はつくづく運の悪い男だ、と前を見て歩いていたユウは苦笑いした。

「誰が変態タラシ野郎なんでしょうねえ？」

ユウ達よりも向こう側で、後ろを向いて歩いていたカイだったが、ばつたりと出会った三人 よりによってキラにぶつかってしまったようだ。

よく見えないが、ハジメが一步引いているのだけは確認出来る。

「お前ら面白いな」

メイジエスは笑っているが、実際カイからすると笑い事ではないだろう。ユウもクラスメートがキラからお仕置きを受けるのを見てきたから、その怖さは分かるのだ。

「さて、君には前よりきついお仕置きが必要なようです」

その間にユウ達も彼らに近づく事が出来たので声を聞けたのだが、やはりキラの目は笑っているどころか冷酷である。

きついお仕置き、と言ったが、一体何をしようとしたのだろうか。「それよりキラ、何故ここにカイ達がいる？ ステンで合流ではなかったか？」

「そうでした。陛下までいらっしやいますし、やはりアディーフに……？」

キラは掴んでいたカイの腕を離し、再び真剣な顔に戻った。

「そ、そうなんだよ。ステンがアディーフの反乱軍のせいでは壊滅状態だったから、陛下連れて迎えに来てやったんだ」

これから何処に行くかは定かではない。メイジェスとその護衛役を含めた九人で旅をするのだろうか。

この面子だと、何かとごたごたが起きそうな気がしてたまらないが。

「あー、ミカエル大尉い！ おひさですう」

かなり耳につく喋り方をするレイル族の女の子が中にいるが、恐らくニュードイルの方にいたディーブルだろう。

しかし、ハジメ達がいらない間に色々あつて、話したい事が山積みだ。本当なら真っ先にハジメにアスナの事を話したかったのだが、どうやらそれも無理なようだ。

「久し振りで、ルシフェル少尉。ギルウィン少将は初めましてですね。わ、私、ファンなんです……」

先ほどまではカイにべたべたしていたアンジュだが、ハジメが現れるなり態度を豹変させる。さすがゼルの姉、と心の中で呟くが、当事者のカイは何とも思っていないようだ。

「ソラ、怒ってる？」

「ううん。カイが幸せならいいの」

こっそりとソラに聞いたが、彼女はそれだけ言って微笑んだ。応援してやりたいとは思うが、カイもソラもお互いのそういう気持ちには鈍感だ。

「……それより、今後俺はアディーフ將軍を追い掛けなければならんが、ユウ達はどうするつもりだ？」

「俺は付いて行きます。ニュードイルに残るのも不安だし、陛下の力になりたいですし」

ナリユエ族がレイル族を諦めたという情報が入らない限り、アマネをニュードイルに帰す訳にはいかないのだ。

「ボクもついて行く」

珍しくアマネも本気の様子を見せる。

「陛下。アデューフが行きそうな場所を特定出来ませんか？」

「スタイト大陸じゃないかと思う。このマイター大陸から東に向かつて、船に乗れば行けるぞ。軍の養成地も向こうにあるしな」

「では、そこに向かって行きましょうか」

軍を養成する場所と言えば、ハジメやアンジュらもそこで暫く活動していたのだろうか。少しだけそんな事を考えたが、周りの迅速な行動に打ち消される結果になる。

予想外の大人数になってしまったメンバーで、アデューフがいるであろうスタイト大陸を目指して行った。

スタイト大陸を目指して歩くには、西側に向かっていたために、ステンからよりも少し時間が掛かってしまうようだ。ルクリアにはベヒケルがない分、歩いて行かなければならないのが辛い。アマネはそれで疲れてしまうし、彼を背負うキラの体力にもさすがに限界はあるのだ。

大陸を移るには、港へ行つて船を借りなければならないようだ。そこに行くには、今歩いている割りと小さなホアの丘を越えなければならぬのだ。

季節は春と夏の間頃だろうか。晴れた上りの道は厳しく、その上パプリカを抱いているためか、体力の消耗も大きい。しかし、男性陣や軍人の女性はまだしも、か弱そうなソラまで倒れないとなると、体力がないユウも懸命に歩く他になかった。

とは言え、暑くて死にそうなのはユウだけかも知れない。先頭を歩く集団は仲良くお喋りをしているのだ。

「なあキラ。お前つて何でアマネに甘いんだ？　ロリコンなのか？」

昨日、カイがキラの事を吹き込んだからか、メイジエスが執拗にそんな質問を繰り返している。

思えば、アマネだけは本当に男か女か分からない。せめて髪を切れと言つても「このままでいい」と言つて聞かないし、声は高く背は低い。年齢も、実年齢よりかなり幼く見えてしまうのだ。

「アマネは十七歳ですよ。僕は主人には手を出しませんし、彼は男です。」

「嘘だー。ユウ、アマネと風呂入った事あるだろ？」

しつこいな、この皇帝は。と半ば呆れつつ、ユウはだるさの入った声で答える。

「ありますよ。兄弟二人共母さん似だから、あんまり男っぽくないだけなんです！」

アマネを女みたいと言う、というのをイコールすると、ユウも女みたいという訳だ。さすがにここまで来たら、何度もあった分もうどうでもよくなってくるが、それでも心の中のどこかではそれを否定している。

先頭組はキラとメイジェスと背負われているアマネを含めた三人の他にも、カイがその会話を聞いて笑っていた。

そして、メンバーの中の美形な男達を見て一番後ろに並ぶ女性陣が、事あるごとに騒いでいるのが伝わってくる。

「カイさんってかっこいいですね、ソラさん」

悪気はないのだろうかどうかは分からないが、アンジュがそれをソラに振っている。

「は、はい、そうですね」

雰囲気だが、アンジュはソラの気持ちを知っているようにも思える。女というものは恐ろしい、と再び心の中に教訓としてしまい込んだ。

その中でも割りときスギスギしていないのがデューブルで、喋り方を除けばアンジュよりは怖い女ではないように見える。

「大尉たちもかなりアレですねえ。でもお、男って色々面倒じゃないですか。陛下が言うには、ユウ様もカイが好きなのよお？」

平然とした声で、それもこちらは悪気のない大声で言うのだ。

まだいい印象があったのに、とユウは心の中で嘆いた。いや、この場合はメイジェスが悪いのだろうか。とにかく、下手すればカイ達にまで聞こえていそうな声の大きさだったし、ユウの近くを歩く

ハジメには当然聞こえているだろう。

このままでは勘違いされたままです、とは思いますが、女性陣が怖くて反論出来ないのは確かだ。

「……ユウ。それは本当か？」

何故かすごく怖い顔で、ハジメにまで言われてしまう始末だ。

「好き……って言ったらそうなんですけど、それはちが」

「何かされたのか？ ユウ、答えるんだ！」

飛び付いてきた彼に肩を揺さぶられ、至近距離で騒ぎ立てられる。パプリカも驚いたのか、腕の中で羽をばたつかせる。

言い方が悪かっただろうか。だが、意味は違えどカイが好きなのは事実なのだ。

ハジメにはすぐ後ろでソラが否定しているのも聞こえていないように、一体何があったのかこちらが訊きたいくらいである。

「だから、何もされてません！ カイは友達として好きなんです！」

あの二人揉めてるよ、とディールが笑いながら言っただけで通り過ぎて行くのが聞こえ、感情的になっていたユウは冷静になって目を逸らした。

「……それを言うなら、兄さんやキラ先生も、ハジメさんだって……好きです、よ？」

面と向かって言うのは恥ずかしかったが、それで彼の誤解が解けるなら、という考えだった。

単なるコミュニケーションのひとつなのに、顔が熱くなってしまった。どうしてだろう。ただ、「友達として好きだ」という気持ちを伝えただけに過ぎないのに。

「そうか」

不意を突かれるように頭を撫でられ、一瞬だけ身体を強張らせる。見上げると、彼はあまり見せない微笑みを見せていた。キラにも見せないのに、どうしてユウにだけ。

思えば、ハジメとまともに打ち明けたあの夜から、ほぼ初対面としては最初から優しくしてくれた。彼が決してキラやアマネに最初

から優しい訳ではなかった。

そんなハジメを、ユウはどう思っていた？ 怖い？ それも違う。よく分らない。でも本当は。

「おいお前ら、イチャついてないでこつち来いよ！」

いつの間にか頂上まで辿り着いたメイジエスの、ユウ達を呼ぶ声で我に返った。

何を考えていたのだろう いや、それよりも、今はアディーフを追い掛ける方が先である。

「パプリカ、走るから掴まってね」

「きゅう！」

パプリカに走る許可を得た後、すぐに体力を振り絞り、ハジメと一緒に走って行った。その途中、彼には懂れているだけだ、という答えを改めて知り、一時的に変な気持ちになっていた自分を嫌悪する。

丘の頂上まで着くと、辺りの景色を見渡す事が出来た。ここからは下りの道で、草木ばかりの行きとは違って花もたくさん咲いている。

青い海も遠くに見える。写真や絵でしか見た事がないものだが、水平線からそれだというのが断定出来るのだ。

その少し手前には、何やらアスカのスタンデを見たような、工場か研究所らしき建物が窺える。

「あれは何だ？」

ハジメも同じ建物に気付いたらしく、息も切らさずそう呟いている。

「陛下の元に着くまで、私はこの辺りの巡回を担当していましたが…… あんな物は二年前にはありませんでした」

別人ではないかと疑ってしまうくらい、まともな喋り方をディールはしている。あれは一種のキャラ作りというやつだろうか。

「という事は、最近だな。行ってみようぜ！」

先頭をきり、再びメイジエスが歩き始め、先ほどの配置で九人は

進み出した。

何故だか皇帝陛下である彼が一番張り切っているように思える。久し振りに城から出られたから、少し楽しんでいるのだろうか。だとしたら気楽な王様だ。

下りの道はかなり楽に進めた。日差しは強めだけど気にならないくらいで、足も疲れる事はないのだ。

道端には様々な色をした花が咲いており、アスカでは見掛けなかった色の花や、まるで水晶のように透き通った花など、種類は様々である。

「綺麗ですね」

花を見渡していたら、隣りにいたハジメと目が合った。偶然と言っよりは必然的で、彼がユウを見ていたから目が合ったのだ。

やはり、男が花に見取れるなんて変だろうか、と言った後に考えてしまう。変だから見られていたのだ。前言を撤回してしまいたい恥ずかしい気持ちに、せつかくの少し楽しかった時間が台無しになってしまう。

「ああ。お前にはアルステイナの花が似合う」

微笑ましそうに優しく目を細めて見つめていたので、思わず心臓が飛び出てしまいそうなほどに驚いた。

彼があんな顔をするなんて。考えただけでも息が詰まりそうだ。

いつも対等に話していた、キラやカイにも同じ顔をするのだろうか。照れくさい顔を見せないように、腕まで降りて来たパプリカを抱き締め、ユウは話を続けた。

「アルステイナ……？　そう言えば、亡くなったエルバントさんも、俺を見てそう言っていました」

ユウが花に似ていた、なんてことはさすがにないだろう。

「エルバントには小さい頃から世話になっていて、父親同然だったな……死んだ娘がいて、その娘の名前がアルステイナだったと聞いた事がある。ちょうど十五で死んだようだ」

十五で亡くなったから、ひょっとしたらまだ子供っぽさの残るエルバントと同じ茶髪をしたユウが、そのアルステイナという娘と重なったのだろうか。

「アルステイナは、古代ルクリア語で『清く優しい心』という意味を持つ。透き通っている花で、ユウによく似合う」

いつもは寡黙なハジメがユウに優しく話してくれる。わずかな笑顔も見せてくれる。それが何より嬉しいのだ。

「ありがとう。なんだか嬉しいです」

ハジメをそんな風に表すなら、まさに『強くて凛々しい人』だろう。それを意味する花は知らないで、心の中に置いておいた。

アスカにはないような、透き通ったアルステイナの花。ハジメのおかげか、それだけでその花が大好きになった。

暫く歩くと、花が植えられた道は終わり、普通の平地に戻ってしまった。少し寂しいが、アディーフやナリュエ族と決着を着けた後にもう一度行きたい。パプリカも花を見れなくなって残念そうだ。

「また来ようね」

自然に笑い、腕の中で残念そうに鳴くパプリカを撫でる。

これから何があるか分からないが、ルクリアで生き続けたい。その夢が叶った後なら、何度でも訪れる事が出来るのだ。

間もなく、例のアスカのものらしき建物の付近まで歩いて来た。

コンクリートで造られたようなそれは、スタンデにあったシアンの『ルクリア研究所』を連想させるくらい大きい建物で、ユウの身体何倍もある大きさだ。

ここで何をするのだろうか。アスカの時と同様、ルクリアでもアスカの事を研究しているのだろうか。

「これは……」

見上げていたカイが、ある一点の場所を見つめて眉を顰めた。

「どうしたんだ？」

張り切っているメイジェスが同じ場所を見つめるが、彼にも何があるのかは分からない様子である。

「あれ、メリア家の家紋だ……」

見ると、建物の上位には狼のシルエツトのような形をした紋章が刻まれている。カイの装飾品には描かれていないデザインだが、本人が言うのなら間違いはないだろう。

「シアンは確か、あるルクリア人と契約していたと言っていたな」

「ああ。それが誰だったか、ようやく分かるみたいだ」

ハジメとカイはちゃんとそれを思い出していたが、肝心の契約内容の詳細は言わなかった。考えれば誰だか一目瞭然なのに。

シアンはアスカの女王を殺し、自分が王になるためにルクリア人に手を貸してもらった。だが、そのルクリア人の方はどうだっただろう。確か、そのルクリア人の方も、ルクリアの王抹殺に協力する事をシアンに要求したのだ。

ルクリアに来て、王は主に三人いる事が分かった。

アヴェエ二国のメイジェス、ニユードイル国のアマネ、それにナリユエ族の国の王である。

シアンはアマネには会っている筈なので、もし会っていたら真っ先に契約内容を守るために殺していただろう。だから、アマネの命を狙っている人物の仕業ではない事が分かる。

一方で、ナリユエ族の王の命を狙っている者としても、アスカまでアマネを追って来る分、彼らに内乱は見られない。それに、今は戦争が起こっていないので、サノン族にはその王を殺しても利益はないのだ。

だとしたら、内乱があり、批判する者が一番多いメイジェスの命を狙っている者と解釈するのが自然だろう。

「陛下。ここ数年のアディーフの行動に、不信任はありませんでしたか？」

キラは腕を組み、何かを考え込んでいる様子で言った。彼も同じ事を考えていたのだろうか。

「アイツが將軍まで上がって来たのが、確かハジメをスパイに任命した年だったな……とにかく、前將軍よりも不在期間が多く、それ

も長かった」

何とか思い出した、という仕草をメイジェスは見せる。

「そうですか。……では、カイに訊きます。シアンが頻繁にスタンデに通うようになったのは、具体的にいつ頃ですか？」

「やっぱり五年前くらいからだ！　じゃあ、アディーフは親父と……」

「まだ確証はありませんけどね」

確証はない代わりに、両者の不審点は十分に発覚した。条件から考えても、シアンと契約したのはアディーフだと考えるのが普通だろう。

中は機械が作動しているのか、僅かながらに機械に似た音が聞こえてくる。

「今の、機械音だ！」

急にカイは走って飛び出して行き、その建物の扉を強引にこじ開け、一人で中へと入って行った。突発的な行動に、周囲はついて行けない状況だ。

「カイ、勝手な行動は謹みなさい！」

キラが言ったのも聞こえなかったカイがほぼ無理矢理開けた扉は、彼の身体が建物の中に入ったのを確認するかのように、すぐに重さで閉まっていった。

「仕方ない奴だ。俺達も行くぞ」

どちらにしろ、カイ一人では敵がいても立ち向かえないだろう。

ハジメを先頭に、ユウ達も中に入った。扉はハジメが開けてくれたのだが、女性や子供、一般の男の力でも開けるのは難しいくらい重い扉のようだ。彼が軍人で、鍛えているからこそ出来た事である。中には誰もいない。半透明の硬い水色の床の上に、何台かの機械が作動している。純粹に無人で機械が動いているだけの場所か
或いは、どこかに収容されているかも知れない。アスカの時もそうだったからだ。

しかし、突き当たりの道まで走って行くと、右と左に分かれた通

路に足を止める。

「カイ、どっちに行つたのかなあ」

どちらの通路を見渡しても、既にカイの姿は見えなくなっている。二手に分かれるとしても、どちらかに力が偏るのも問題なのだ。

カイを除いたメンバーが悩んでいると、パプリカがユウの腕から飛び降り、コツコツと床を鳴らし、右側の通路まで歩いて行つた。

「きゅう！ きゅきゅっ！」

褒めてほしい時に鳴くのと同じような鳴き声を出し、嘴に何かを咥えてユウの脚に擦り寄ってくる。

「パプリカ、だめだよ。どこに繋がってるか分かんないんだから……」

再び抱きかかえると、パプリカが何を咥えているのかが分かつた。水色の床だつたから、少し見渡したくらいでは気付かなかつたのだ。

パプリカが咥えていたものは、たった十センチ前後のロボットパジフィック三号機だつたのだ。カイの髪と同じ水色をしているので、床の色が保護色のようになっていたのだろう。

「パジフィックだわ。でも、カイが落とすなんて変よ。まさか……」
異変に気付いたソラが走ろうとするのを、今度はディールブルが止めた。

「ソラさん、ダメです。カイは何者かに連れて行かれた可能性が高いんですから　長い道のりかも知れませんが、焦らず全員で行きましょう」

まともな口調で言うだけあつて、彼女の言う事は正しい。

「そう、ですね。ごめんなさい」

ソラも冷静さを取り戻し、再びディールブルの隣りで右側の道へと歩く事にしたようだ。

そんな時、パプリカが腕の中で騒ぐ。

「うん、パプリカは偉いね。いい子だよ」

目先の事に褒めるのを忘れていたから、彼は褒めてほしいと主張

していたのだ。

しかし、そう言って頭を撫でてやるだけで、すぐに可愛らしい鳴き声と共におとなしくなる。まだ小さなファウだから仕方のない事だ。

「ユウはお世話好きだね」

そんなパプリカを見つめて、アマネがぼつりと呟いた。いつも通りの無表情なのに、何故か笑っているような感じがする。

「そうかな。でも、可愛いだろ？」

「ボクも触りたい……」

アマネが自分からそんな事を申し出るなんて、こんなに珍しいものはない。

「いいよ。まだちっちゃいから、落としちゃだめだけどね？」

兄の変化について嬉しくなり、そう言い聞かせてパプリカを預けた。パプリカは誰にでもよく懐いて、甘えん坊な性格だ。だからこそ威嚇したり噛んだりする事はなく、安心して預けられるのだ。

「かわいい……ふわふわしてるね」

細い腕で抱いたアマネは、パプリカの羽毛に頬擦りして気持ち良さそうにしている。

いつか、こんな日々を続ける事が出来たら　アマネが少しでも喜ぶ度に、そんな風に願ってしまう。

「あー、俺も俺も！　そいつ、ルクリアにはいない魔物だよな？」

いつもとは違う人物に抱き締められているパプリカを見て、メイジエスがそれに駆け寄り、指でつつき出した。

呑気だなあ、と思いつつも、許してしまうのは何故だろう。

「なあハジメ、お前も触れよ」

何も知らないメイジエスは、パプリカをハジメに勧めるというところでもない事をしでかした。それも命令形でだ。

出会ってすぐの事だっただろうか。ハジメがユウに何かをしようとした時、パプリカがそれを防ぐために噛み付いたのだ。

やれやれ、と彼はパプリカの前まで歩いて来たが、ハジメ自身は

最初の出来事は気にも掛けていないようだ。

「これでいいですか」

半分棒読みでパプリカの頭を撫で、呆れたように手を離れた。しかし、パプリカはあの時のように噛み付く事はなく、気持ち良さそうに鳴いている。

「ユウは可愛いペットを飼ってるな」

嬉しそうにそう言っただけで肩を叩いてくるメイジェスが、今一番緊張しているべき人物なのに、一番緊張がないのは何故だろうか。

早くカイを助けなければならぬが、道が色々と分かれており、前に進むのが困難な状況である。

今歩いている道を更に行くと、また二つに分かれた道に遭遇してしまったのだ。

7・反乱者の最期

目が覚めると、檻に容れられていた。

ここは何処だろう。確か、メリア家の家紋がついた建物に入り、右に曲がったところまでは覚えていた。

それから誰かに殴られて、意識を失ったのだ。

「あれ？ パジフィックがない……」

何処かで落としたのだろうか。せつかくやつと成功したロボットなのに、とがっかりしていると、牢の前に誰かがやって来るのが分かった。

思わず身構えるが、肝心の武器は盗られている。

「そう身構えなくていいんだよ、カイ」

聞いた事のない声に、ブロンドの髪をしているカイより少し背の高いサノン族。誰かは分からないのに、名前まで知られている。

少年の姿をした人物だが、ハジメやアンジュらが着ているのと同じような、軍服を身に纏っているのだ。

「誰だよ、お前」

策の合間から顔を覗かせ、さもうさん臭そうにカイは言った。

「俺はレン。出してやるから、俺のものになれ」

一瞬目が点になるような命令である。

見知らぬ人物で、先ほど名前を聞いたばかりなのに、何故彼のものにならなければならないのだろう。それならまだ、この牢獄に容れられている方がマシなのだ。

「はあ？ 何言ってるんだよ」

意味が分からなくなったカイは、苛々した様子でレンに突っ掛かる。

「気が強いな。俺の計画を手伝え、と言ってるんだ。何なら、永久に俺の隣りに置いてやってもいいぞ」

「いいから出せよ！」

「仕方ないな。おい、カイを出してやれ」

レンは側近らしき男に命令し、牢の鍵を開け、中からすごい力でカイを引っ張り出した。

かなり強い人物だ　鍛えていた自分の力でさえも抵抗出来なかったから、余計に萎縮してしまう。

「シ안의息子にしては、中性的な顔立ちだな。母親に似たのか？」
どうしてだろう。レンはシ안의事を知っているようなのだ。掴まれた腕が妙に気になる。

「関係ないだろ。お前、何で親父の事知ってたんだよ……」

ルクリアでシ안의事を知っている人物は、カイが知っている中でも五人の仲間くらいしかない。

彼らを除いて尚、シアンとカイの関係を知っているのは　。

「レン・アディーフと言えば分かるだろ？　あの平和ボケ皇帝も死んだ。あとはナリュエ族に戦争を仕掛けて勝って、サノン族だけの国を創ればいい」

レンはアディーフと同一人物　だとすると、やはりこの工場は彼とシアンが協力して立ち上げた場所なのだろうか。

あまりに情けない。サノン族だけの国なんて、レイル族のユウ達はどうなるんだ。それに皇帝は生きている。アディーフの好きにはさせないのだ。

「そんな顔をするな。俺が永遠に可愛がつてやるから」

気持ち悪い。ユウみたいな可愛い男の子に言うならまだ分かるが、長身とは言わなくても、標準的な身長で筋肉質な男に言う言葉ではない。

ルクリア人は同性愛者が多いのだろうか。それに偏見はないが、こうまでされるとさすがに青ざめてしまう。

「悪いが、俺にはそんな趣味もねえし、そんな国もいらねえよ」

アディーフが怯んでいるうちに掴まれた腕を力づくでほどき、銃なしで彼らに向かって構えた。

「残念だな。ちゃんと賤するしかないみたいだ。ほら、戦え。お前一人じゃ俺には勝てないがな」

奪っていた銃を二つ、カイの手に落ちるように投げたアディーフは、腰に装備していた剣を鞘から抜いた。

意味が分からない。賤なんて面倒な事をするくらいなら、いつそ殺してしまえばいいのに。カイだって、洗脳されてずっとアディーフというよりは、ここで殺された方がずっとマシなのだ。

「親父と変な契約結びやがって、あんなに沢山の人数殺して……何をしてもお前のモンにはなんねえからな」

いいんですか、と言う側近に構わないと言わんばかりに前に出て、アディーフはカイに鋭い剣先を向けた。

分かっている。目の前の男は、今までの敵とは比べ物にならない戦力を持っているだろう。カイ一人では勝てる筈がない程だ。

戦って、何とか隙を見付けて逃げなければいけない。

だが、そう上手くはいかなかった。

「カイ、隙があり過ぎだ。死にたかったのか？」

冷酷な瞳を向けられ、喉に剣があと少しで刺さってしまいそうなまさにギリギリの瞬間だった。

幸い、アディーフはカイに形はどうであれ情があるのか、殺す前で止めてくれたが、思わず腰の力が抜けてしまう。

死にたい訳はない。確かに父親には意思の有無もなく改造されるし、義兄には命を狙われたが。

「くそっ……」

もう死ぬのだろうか。それとも、ここでアディーフの言いなりになる？ どちらにしろ諦めざるを得ない状態だ。

緊張を張り詰めた意識の中、ユウの声が聞こえる。幻聴だろうか。仲間はここにはいない筈なのだ。

「カイ！」

だが、もう一度カイを呼ぶ声が聞こえて振り向くと、ハジメとキラ、それにパプリカを連れたユウ シアンとリキユードを倒した

時のメンバーが集まっていた。

メイジエス達は何処に行ったのだろう、という疑問よりも先に、来てくれた安堵感の方が倍以上に大きかった。

「ギルウィン少将。貴公のような者が何故、メイジエス陛下などに協力していた？」

「……答える必要はない」

いつもよりハジメの目つきが怖い。明らかにアディーフを睨んでいて、冷たい態度で引き離している。普段はこんな態度を取るような人間ではないが、よほど怒っているのだろう。

「カイ。貴方の勝手な行動のために苦労はしましたが、生きていて安心です。後で前の分のお仕置きも待っていますけどね」

喉に当てられていた剣をアディーフは引いたので、そこから後ろに向かつて走り、ユウ達のいる場所で合流する。

「うげっ……そりゃねえよ」

キラはこの時はあまり煩くは言わなかったが、後でかなりきついものが待っているだろう。少し前、キラの事を「変態タラシ野郎」と言った時のお仕置きがまだだったので、おそらく今回は厳しいことになる。

「よかった。心配だったんだよ」

唯一素直に優しく迎えてくれたのはユウだった。彼が優しいのはいつもの事だが、怒っても怖くないのが難問である。

「ごめんな」

それだけ言うと、アディーフが再び構えてこちらを見た。

「ギルウィン少将。カイを渡してくれるなら、お前らを逃してやるという条件はどうだ？」

血迷ったのだろうかとは定かでないが、アディーフはそんな事を言った。

彼らにとつては大切な計画の筈なのに、今知り合ったばかりの力イと世界征服を秤に掛けてどうするのだろう。

「断る。生憎、お前には勿体ない人間だ」

剣を構えるハジメが格好いい。自分もこんな風に捨て台詞を吐けたら　と思うが、笑われそうなので胸にしまっておいた。

アディーフの表情が変わる。

カイの時は本気を出していなかったようで、まだ穏やかな表情だったが、今は激しい憎悪に満ちたような顔をしているのだ。

「……手加減はしませんよ」

まだ戦闘開始の暗黙の合図も出されないまま、キラの矢がアディーフの頬を掠り、向こうの壁に突き刺さる。

アディーフは頬からゆっくりと流れる血を手の甲で拭って払い捨て、引いていた剣を再び握り締める。

「なかなかいい弓術士じゃないか」

それくらいでは効かない、といった様子だ。

「僕の弓が、外れた……？」

弓を構えたまま呆然とキラは立ち尽くす。

彼の矢は風の力を付加し、確実に敵にぶつける事が、今までなら出来たのだ。しかし、今回はアディーフに何らかの方法でその軌道をずらされた結果、頬を掠るだけだったのだ。

キラは今までに、風の力を使わずとも狩りをする事が出来たし、戦闘力もユウやアマネの倍以上はあったのだ。自信がなくなった、という表情で固まったのだ。

「甘いな。俺は風の使い手だ」

アディーフが言った瞬間、彼の姿が急に消えた。

「何だ！？」

ハジメさえも驚くそれに、アディーフの側近はニヤリと笑った。

何処にもアディーフの姿はない。だが、微かな風が吹く音　空気が流れる音は聞こえているのだ。

間もなく音が止まった。

辺りが静まり返ってアディーフの姿を目で追っていると、いつの間にかキラの後ろにいたのだ。

「キラ！」

遅かった。

真後ろに回られたら、いくらキラでも秒単位の迅速な行動は、よほど鍛えてでもない限り不可能だろう。

弓を持ったまま、彼は水色の床の上に倒れ込んだ。

「カイ。仲間を殺したくなかったら、さっさと俺のになっちゃえよ。お前の機械を使う力と、お前自身が欲しいんだよ」

再び風の力を使ってカイの真後ろに現れたアディーフは、耳に付けたスナイダーの形見のピアスを弄り、耳元でそんな事を囁いた。

絶対に嫌だ。でも、キラや他の仲間が殺されるのも嫌だ。心の中で迷っていると、ハジメが後ろからカイに向かって剣を振った。

「惑わされなくていい。お前は渡さん……ユウ、風の音だ」

再び、風の音が聞こえ、ユウにキラを回復させる暇も与えないくらいだ。音が重要だから、もし回復を続けていれば、今度は他の三人が危ない。

そうしていると、今度はもう一人の犠牲者が出る。

「ハジメさん！」

カイはそれに気付かず、ユウが駆け寄った時にはハジメは腹を剣で刺され、一步も動けない状況に陥っていた。

「暫く休めば平気だ。カイ、ユウを守れよ」

大量に出血している怪我人が、守りたい人の前だからといえ、そこまで強がる事はないのに。

しかし、ユウに泣く暇も与えないそれは、再びカイを誘惑してくる。

「次はあの子供がいいか？ それともそのペットか？ 今度は殺してやってもいいんだぞ」

必死に癒しの曲を奏でるユウだが、いつもより集中出来ていないため、キラはいつまで経っても目を覚まさないし、ハジメの傷も辛うじて出血を抑える程度だ。

このままでは本当に負けてしまう。ユウとカイだけではどうにもなりそうにない。

ハジメに言われたようにユウを守るか、彼らの戦いを無駄にしないために、このまま続けるか。選択肢は二つの内のたったひとつ。

要は、逃げるか立ち向かうか、だ。

「俺は……」

無理だ。カイ一人がアデーフと一緒にいれば、この場で仲間是谁も死なずに済む。

「カイ。一緒に戦おう。俺がどこまで助力出来るか分からないけど、諦めちゃだめだよ」

辛そうな表情をするユウを見て、カイはやっと確信した。

逃げようとするのなんて、最初から間違っている。選択肢はひとつじゃない。ユウを守った上で、彼らの負った傷を無駄にしなければいいのだ。

どうして気付かなかったのだろう。四歳も年下の子にそれを教えられて、少し恥ずかしい気さえする。

「ああ、そうだな」

ユウの頭を撫でると、再び聞こえた風の音に耳を澄ませる。

癒しの音楽と同じメロディが、その風に乗って部屋の中に響いていくのが分かった。ユウが目を閉じてオカリナを吹いて集中しているのだ。これも何かの策略だろう。

癒されるような綺麗な音色。カイが吹いても何もならないのに、ユウが吹いただけでまるで別の楽器を使って、別の音楽を奏でているようだ。

一方で、カイは耳を頼りにするのはやめ、目を閉じ、肌でその流れを感じていた。

一瞬だけ瞼が妙に明るくなる。

「カイ、そこだよ！」

一筋の光に視力を一時的に失ったのか、アデーフはよろよろとユウの回りを動き、瞼を押さえて痛がっているのが分かった。

すぐに銃を用意し、骨まで灰になるほどの最大の火力で火を付けた。

「よし……」

これで人間を殺すのは三度目だ。仕方ないのだ。しかし、側近の更に強い水の力で炎は消え、戦いはまだ続くように思える。

「今日は引き分けということにしておこう」

そう言って、側近の男はアディーフを抱えると、すぐさま床に広がったキラのマントを踏み付けて部屋の外に出て行った。

気絶した男二人に、体力ギリギリの男二人。到底、まだ元氣な男を追える面子ではない。

仕方なくユウの隣りに座ると、彼はカイを見て笑った。

「光の力、使うと少し疲れるんだ。慣れてないし……でも、役に立って良かった。目を開けてた時のために、その前にカイにバリア張ってたの、気付いてた？」

につこりと疲れた顔で笑うユウだが、そんなけなげな気遣いにも気付けない自分がどうかと思う。

「ああ。ユウは優しいな」

お人好し、というのかどうかは置いてだ。危機一髪の時にも仲間の事を考えてくれて、いつも自分は後回し。

よく見ると、先ほどまではあったパプリカの姿がない。

「あれ？ パプリカは？」

カイがキョロキョロと辺りを見回すと、名前を呼ばれて反応したのか、ハジメの服の中から飛び出して歩いてきた。

「きゆう？」

何の用だ、と見上げてくる姿は可愛いが、やはりこれもユウが事前に仕掛けたのだろうか。

「作戦立ててたから、アディーフが止まってる間にハジメさんに預かってもらったんだ。さ、二人の回復しなきゃ……」

弱そうな細い身体を起こし、ユウはオカリナを再び奏でた。

光の力と、《カリユダ》の力。一見別物のようだが、聖なる力には変わらない二つの力を、目の前にいる少年は同時に使えるのだ。

改めてそれを実感した瞬間には、ハジメとキラは立ち上がった。

「カイ、こちらに来なさい」

復活したキラの説教が始まるうとしているようだが、今回は完全にカイが悪い。逃げる事はせず、言われた通り彼の目の前に歩いて行った。

「今回は辛うじて助かったものの、何をされていたか分からなかったのですよ？ 今後、勝手な行動は控えるように」

案の定、頬を殴られてしまう結果になった。

「うん……ごめんな」

まるで父親みたいだ。シアンには殴られた事は一度もなかったが、キラがそれだけ心配してくれていたのだろう。

「キラ。奴はカイを狙っているようだが、それについてはどう思う？」

説教の類はしない、不器用な方の男がユウと共に歩いて来て、キラにその旨を告げた。

アディーフはカイの機械的なアスカの技術と、理由は分からないがカイ自身を欲しがっているようだ。逃すと言っただけだから、よほど何かあるのだろう。

「カイはアスカ人ですから、機械が扱える筈。だとしたら、その技術が欲しいのでは？」

頭の回転はやはり彼が一番早いようだ。カイに囁かれた言葉は周りには聞こえていないだろうから、そう考えるのがごく自然だろう。「アディーフは何度かカイに話し掛けてたよね。カイの技術よりカイ自身が欲しいんじゃないかな。だって、技術なら他のアスカ人でもいいだろ？」

鋭いのか鈍いのか分からないユウは、ハジメに助けられながらゆっくりと歩いて来た。

魔物との戦闘でも光の力は使うユウだが、今回ののはそのエネルギーがいつもの倍以上だった。正直、彼があそこまでの力を使えると

は思っていなかったのだ。

「そうなのか？」

なるべくなら言いたくはないが、ハジメの目は誤魔化せない。

「……まあな。言いたくねえけど、永遠に可愛がつてやる、とか……あー、思い出しただけでも気持ち悪い！」

好きな女の子には振り向いてもらえないのに、と無性に気分が悪くなる。男にあんな事言われても、ちつとも嬉しくないのだ。

それを聞いたキラやハジメは少し沈黙し、

「……大胆ですね」

「ああ、そうだな」

そんな事をブツブツと言っていた。

思えば、彼らが好きなのはとある兄と弟で、未だに何も進展のない状況なのだ。

「お前も見習った方がいいかもな」

直接言わなければ、あの鈍感天然兄弟が気付く筈がないのだ。兄の方はともかく、弟は真性の天然である。

人事のように笑うが、カイも二人と同じような状況なのだが。虚しくなった三人は肩を落とし、同時に溜め息を吐いた。

「カイ。ハジメさんやキラ先生にはその必要ないよ。言わなくてもモテモテじゃん」

ユウは分かっている。支えてくれている人物が、自分の事をどういう目で見ているのか、このままでは一生分らないだろう。

ハジメもハジメだ。さっさと行ってしまえばいいのに、言わないからユウが気付かないし、純粹だから他の男の事を平気で「好き」だと言うのだ。

カイはソラに、キラはアマネに何度も言ったが、言ったところで伝わる相手とそうでない相手と、二通りあるのは承知だが。

「みんな、何で落ち込んでるんだ？ は、ハジメさん？ 俺、まずいこと言ったかな……」

一見可愛い顔をしているのに、何気なく、それも褒めるつもりで

言った言葉が、ハジメを放心状態にさせるのは日常茶飯事だ。

「……とにかく、アマネやソラが待っています。早く戻りましょう。ハジメさん、いつまでそうしているつもりですか？」

「そうだな。すまない」

建物の中で他に捕まっていた者はアマネやソラ達に任せたと、カイを含めた四人は急いで外に出る事になる。

外には収容されていたらしき人物が十数人と、陛下とその護衛役を連れた、アマネとソラの姿があった。

ユウ達が戻った頃には、ソラが何者かに絡まれていた。

絡んでいる人物は、深紅の短い髪をしていて、髪と同色の目をした人物である。

「ねえ、名前なんて言うのさ？ 僕さあ、気に入っちゃったんだにや」

ナリユエ族だ。男か女かは分からないが、口調からして男の子のようにも思える。

前のシオンというナリユエ族といい、彼らも同じような模様が入った制服を着ている。ナリユエ族側にも軍隊のようなものがあるのだろうか。

そうしていると、真っ先にカイがソラに駆け寄った。

「ソラ！」

アマネやメイジェスがいなのが幸いした。しかし、彼らは何処に行ったのだろうか。

「にゅーん。ソラって言うんだにや。可愛い名前。……で、コイツらは何？」

カイより背の低いのを見ると、まだ少年だろうか。ソラに抱きついて離れない彼は、独特な喋り方で口説いているように見える。

見た目は女の子のような可愛い男の子だが、ユウ達を見て瞳を猫のように大きくした。

「きゅうつつ……」

その様子に、パプリカが腕の中で弱々しい声を出して怯む。鳥にとつて、やはり猫は天敵なのだろうか。

「レイル族が二人って珍しいにや。まさかの任務完了かにや？」

今は戦えない。だが、こうなつた以上、戦えずにはいられないかも知れない。

目を光らせる少年が怖くなり、ハジメの背後に隠れた。

「にやーんだ。アマネってのに似てるケド、ビミョーに違うんだよにや。レイル族って皆小さいから間違えるんだよにやあ」

「貴女、アマネっていう人を探してるの？」

「そうだにや。僕はナリユエ族のルミイ・オンリエ。そのレイル族、アマネって奴を知らにやい？」

ルミイと名乗つた少年 いや、名前からして少女だ。彼女は力を相手にもせず、早速レイル族の二人に問い掛けた。

表情に出してしまえば負けだ。

「アマネ？ 知りませんよ。僕達は旅の途中、偶然ここを歩いていただけですから」

キラがそう答えると、ルミイがソラから離れ、じつくりとユウの方に歩み寄つて来た。

いや、彼女が目指したのはユウの方ではないようだ。ユウを支えてくれている、ハジメの方だ。

「よ、久し振り。アンタ、何でレイル族と旅してんのサ？」

思えば、ハジメは過去にナリユエ族のスパイをしていたと聞く。

ナリユエ族と同じ紅い瞳だから、スパイをしても気付かれなかったのだろう。

だが、現状は危ない。もしスパイがバレたら、それこそ戦争が始まってしまうかも知れないのだ。

「ニユードイルに行きたいらしいので、連れて行つてアマネの事を聞こうと思つてな。お前こそ何をしている？」

「僕？ 僕はただ、暇だから可愛い女の子見付けて遊んでただけだよ。あ、これはソロモン様にはナイシヨにえ！」

ルクリア人は変わった人が多いな、とユウは関心した。

確か、アデーフも同性のカイが好きなようで、ルミイも男の子より女の子の方を好いているようである。アス力ではそういう人は少なかったたので、割りと新鮮な気持ちになる。

「そろそろ任務に戻るによ。またね、ソラたん！」

「う、うん」

ルミイが遊んでいたのが幸いで、ハジメに見付かったと思ったらしく、逃げるようにホアの丘の方へ歩いて行っただ。

一方で、ソラは茫然としているようだ。女の子に口説かれてしまったのだから、そうなるのも無理はないだろう。

「ソラ、アマネや陛下はどうしたんだ？」

ルミイが行ったのを確認した後、カイが慌てて言った。

「その事だけど、アマネちゃんも陛下や収容されてた人を連れて、先にレアニイシティに向かったわよ」

レアニイシティが正確には何処かは分からないけど、とソラは言っただ。

その選択肢は間違っていないなかっただろう。その結果、アマネの存在がルクリアにあること、それをナリユ工族に知られなくて済んだのだ。

「レアニイシティ……ここから大陸を渡る前にある、海岸沿いの街だ。すぐに着く……ユウ、何なら背負おうか？」

「だいじょうぶ、です。ちょっと使いすぎただけだから」

そう強がってハジメから離れて歩こうとしても、足がふらついてしまつてまともに歩けないのは分かつていた。だが、これ以上迷惑は掛けられない。

ハジメのように、闇の力を何度使つても倒れない身体になりたいもつと鍛えないと、アマネ一人も守れやしないのに。

パプリカを抱いてその場で蹲った時、瞬時に身体が軽くなった。

「……俺達もレアニイシティに向かう」

表情ひとつ変えないで、ハジメが抱えてくれている。

いわゆる『お姫様抱っこ』というものだろうか。恥ずかしい気持ちよりも先に、安心して意識が遠くなっていく。

「ありがとう、ハジメさん……」

「姉さんが同じ光の力の持ち主だった　だから倒れやすいのは分かる。気にしないでいい」

そう言えば、アスナの事をまだハジメに話していないな、と思いつ出した。

パプリカが腕から離れ、ハジメの肩まで小さな足で上って行ったのを確認するかしないかの境目で、意識がなくなっていくのが分かる。

目を覚ますまで、彼に甘える事を許してもらえらるだろうか。

その代わりにはしたくないが、アスナの事を彼に話したいのだ。

その日はレアニシティで一夜を過ごす事になった。

軍の大半がアディーフ派であるものの、民衆の大半はメイジェス派のようで、宿泊代は無料にもらう事が出来たのだ。

レアニシティはアヴェ二国の中のひとつの都市で、やはり相当賑わっているのだが、メイジェスが訪れるまでステンの内乱は分かっていなかったようだ。逃げたと思われるステンの住民は、大陸を渡った街に逃げたのだと予想される。

アディーフに捕まっていた人々は幸いにも働かされていただけなので、何らかの実験に使われる事はなかったようだ。

「そう言えば、メイジェス陛下は何故、ハジメさんをスパイに送ったのですか？」

宿は五人用の男性部屋と四人用の女性部屋に分かれたのだが、その中で思い出したようにキラが言っていた。

それが気になるのは、平和的解決を求めるメイジェスが、わざわざスパイとしてナリュエ族の国の方に送った理由が曖昧だったからだ。

「二十年くらい前、ニユードイルの王族がいなくなり、暫くは原因

が分からなかったままだったんだが、偶然にもその十年後くらいにナリユエ族がアスカに行くのを見つけてな。それで再調査したら、当時のニードイル城にナリユエ族の象徴の指輪が落ちてたんだ」

だとすると、そもそもスパイの理由は　。

「レイル王族のため、だったのですね」

「そういう事。それから更に五年後にハジメを送ってから、色々分かったんだ。ナリユエ族の奴等が、『カリユダ』って力で神と交わろうとしてる事がな」

サラがナリユエ族に襲われ、キラの父親と共にアスカに来たのが約二十年前だとすると、それから十七年以内にはサラは父親のユウマと結婚していることになる。

すると、サラが殺されたのがそれから約十年後の事だから、間違いないのだ。サラとユウマはナリユエ族の少年に殺された。

五年前にハジメがスパイとしてナリユエ族の国に渡ったのも、それを聞いて解決出来た。

「ハジメさん、どこに行くんですか？」

キラやメイジェスやカイが酒を飲んで雑談している中、ハジメが一人で外に出たので、パプリカを置いて追いついて息を切らしながら言う。アマネはベッドが足りないため、女性部屋で寝る事になったので、今夜の男性陣は騒ぐようだ。

ユウは酒に弱いので飲まなかったが、ハジメはどうしてだろう。

振り返った彼は、優しい微笑みを見せてくれた。

「どうした？」

それはユウが訊きたい事だ。

「ハジメさんこそ、いつもならキラ先生達と酒盛りするのに……今日はどうしたんですか？」

そう言うつと、腕を引かれ、近くにあった木製のベンチに座らされた。何があるのだろうか。

「今日は星を観に来た。たまにぼんやりと星を観るの、好きなんだ」

ユウの隣りに座ったハジメは、そう言って嬉しそうに顔を上げ、

空を仰いだ。

ルクリアの星はアスカの星よりもずっと綺麗で、よく見える。遠くの星がはつきりと、まるで川のように見えるくらいだ。

文明の発達したアスカでは、たとえ田舎でも見る事の出来なかった星が、ここでははつきりとよく見える。空気が澄んでいる証拠なのだ。

「そうだ。ハジメさんに言わなきゃいけないことがあります」

ここまで運んで来てくれた事、ちゃんとお礼しなければ。

「迷惑掛けちゃって……でも、嬉しかったです。ありがとうございしました」

「それはもういいと言った。お前が無事ならいいんだ」

何だろう。一瞬だけ、胸に妙な痛みが走った。

今までにはなかったのに、何をしたのだろう。

そうだ。アスナの事を言わないと。それを忘れていたから、きつと胸が痛くなったただけなのだ。

「あ、あと、ハジメさんがいないときだったけど、アスナさんとも話ができました」

ハジメは喜んでくれるだろうか。アスナは亡くなってしまったけれど、魂はまだこの世に残っていて、彼や恋人であるメイジエを見守ってくれている。

「姉さんが？ 何と言っていた？ でも、何故だ」

姉さんは死んだ筈だ、とハジメは言った。

「魂は残ってるのかな。よく分かりませんが、俺の身体を借りて、落ち込んだ陛下と話がしたいって。陛下と話してたときの記憶はないですけどね」

「……他に、何か言っていなかったか？」

「他にですか？ えっと……」

確か、あの声の主がアスナだと知った時、衝動的にユウは身体を奪われると思って必死に彼女を否定した覚えがある。その後、アスナが何か言った気がする。

確か。

「『ハジメはあなたが大切だから、あなたを見捨てることはない』って、そんな風に俺にハジメさんのことを言っていました。後は身体を貸して、覚えてません」

よく思い出して考えると、ハジメはユウが本当に大切に、姉の蘇生よりもユウを優先してくれるのだろうか。その辺りは少し不安である。

だって、ハジメがユウを気遣ってくれるのは、アスナの面影があるからこそなのだ。

「……姉さんはよく分かっているな。アマネが力を持っていないのが知られると、次はお前が狙われるだろう」

分かっている。アマネがさらわれるのも嫌だが、ナリユエ族に真実を教えてしまえば、それこそ彼らの思う壺なのだ。

「守られてばかり、ですよ。ハジメさんみたいに、もつと強くなりたいです。今日くらいの強い光の力を使って、みんなの役に立ちたいです」

言っても仕方ないのに、ユウは弱気になってしまう。自分を守れなければ、アマネを守る事だって出来ないのだ。

「訓練するか？ 闇か光の力は使いこなせば莫大な威力を持つ。訓練すれば、使いこなす事など容易いぞ」

立ち上がり、剣を出してハジメは言った。

「は、はい！ やらせてください！」

瞬時にオカリナをポシエットから取り出し、ユウは特訓してもらう事を望む。

自分を守るため、アマネを守るために強くなりたい だからこそ、憧れる人に教えてもらおうと思ったのだ。

翌日には、レアニシティの住民からの助けにより、海を渡ってスタイト大陸を渡る事が出来た。何人かの人物が渡った形跡も見られるところから、ステン内乱の生き残りがスタイト大陸に流れてい

るのが分かる。

一方で、初めて乗る船にユウは感動していた。

最年少だから仕方ない、と周りは言ったが、そこでわざわざ子供扱いをしなくていいのに。きっと、アマネが感情を失っていないければ、ユウと一緒にたはしゃいでいた筈なのだ。

珍しい景色に興奮するパプリカをしっかりと抱え、海の上を飛ぶ鳥を見ていた。

この船に乗ったはいいが、スタイト大陸へは三日は掛かるようだ。そんなに離れていない島であり、魔術を応用した木製の船なので、アスカの船とスピードは変わらないようだとかイは言う。

「ふう。気持ちいいね」

「きゅきゅー！」

仲間の鳥たちが飛んでいるのを羨ましそうに見つめるパプリカ。まだ子供のファウである彼が飛べるようになるのは、生まれてから二年くらい経った、羽が発達する時期だ。普通の鳥と比べて少し遅いが、推定二歳のパプリカはあと少しで飛べるようになるだろう。しかし、気持ちのいい景色の中でも、船酔いする人物はいるようだ。

「おえ……気持ち悪い……」

カイは船の隅で頭を抱え、気持ち悪そうに蹲っている。これだけはユウの《カリユダ》でも治せないのだ。

しかし、その周りを同時に取り囲むのも、またソラとアンジュだった。

「あら、ソラさん。カイさんの介抱ですか？」

「そ、そうです、けど……」

「そうですね。ソラさんはカイさんの親友だから、当然ですもんね」

丁寧な言い方で、且つ胸にグサリとくる言い方。ソラが一番気にしているのは、カイとそれ以上に進展出来ない事なのだ。

「そ、そうですね。私はただの親友、です……」

だが、その恋に対して半分諦めてしまっているソラは、いつもアンジュとの争奪戦に負け、しゅんとなって引き下がるのだ。

このままでは勘違いしたままのアンジュにも悪いし、彼女にカイとソラが両思いだという事を告げたいが、怖くて口出し出来ないのが現状である。

「大変ですねえ、ソラさんも」

偶然、その様子を見に来たディールブルが彼女らを見て眩き、ユウに同意を求める。

「そうですね。アンジュさん、いつもあんな感じですか？」

アンジュの事は、恐らくディールブルが一番詳しいだろう。聞いたところ、彼女らは階級も近いようで、共に陛下の護衛役を自ら買って出るくらいだからだ。

「あ、ユウ様は王族なんですから、私には敬語はいりませんよ。」

でもまあ、そんな感じです。悪い人じゃないけど、家族も弟だけだから寂しいみたいです」

ディールブルはまともな喋り方で微笑んだ。

果たしてそうなのだろうか。ユウは兄と二人きりだったが、兄が大好きだったので、恋愛で埋めようという考えには至らなかったのだ。

「そっか。どっちにしろ、俺には口出しする権利はないみたいだね」
言われた通りに対等な口調で話すが、どうも年上相手にこれはやりにくい。カイやソラは親しみやすい性格だったから良かったのだが、ディールブルは裏表があつてよく分からないのだ。

「これは少し大人の事情ですしね。と言っても、大尉はまだ二十二、私だって十七です。ユウ様だって、恋い焦がれる相手、いるんじゃないんですか？」

何よりユウにとって、アンジュがキラよりもひとつ年上で、ディールブルがアマネと同じ年なのが信じられない現実である。

「いいないよ、そんなの」

いいない。絶対、いや、たぶん 気付き掛けた気持ちはあるもの

の、そう言い聞かせるために口には出さず、綺麗に忘れようとした。ここで気持ちを誰かに言っても笑われるだけ。これはただの憧憬が強くなっただけの気持ちかも知れないし、ユウ自身もうまく説明が出来ない。

恋愛なんて、ユウには分からない気持ちのままでもいい。

「ユウ様。これだけは言っておきます。貴方を好く男はいますから、注意して下さい。特に……」

ディールブルがそう言い掛けた時だった。

「おい、ディールブル。見るよ！　すごい魚だぜ！」

呑気な皇帝が大声で会話を遮り、海の中を指差して彼女を呼んだのだ。

「まあ、陛下ったらあ。何ですかあ？」

口調を変えたディールブルは、ユウに目で挨拶をした後、すぐにメイジェスの元へ半ば呆れながら向かっていった。

間接的だとしても、アスナに出会ってからのメイジェスは、寂しさを隠すためにわざとハイテンションでいるようにも見える。本人は周りが気付いていないと思っているようだが、とつくに気付いているのだ。

「ユウ。旅立ってから、君は成長したね」

ディールブルが行ったのを見計らってか、一人で海を眺めていたアマネが隣りにゆっくりと歩いて言った。

しかし、それは彼にも言える事だ。今まで実の弟のユウにも無関心だったアマネだが、今はこうして話してくれる　表情だって、以前よりはずっと笑顔に近付いてきている。

「兄さんじゃないか。前より表情も穏やかになったと思うよ」

後ろの方で「見るよキラ、アマネが弟に取られるぜ！」と言ったカイがお仕置きを食らったのは当然だと思うが、アマネの進歩を感じる事が出来たので、それはそれで許せるのだ。

「うん　」

潮風に色の薄い茶髪を靡かせ、アマネは目を閉じる。

一番目にたいせつな人。守るべき人。彼がいなければ、こんな過酷な旅に出る理由や、成長する機会などはなかった。

「ボク、何回もユウに言ったよね。ルクリアは天使様が住む場所だ、って」

「うん。確かに、何回も聞いたよ。でも、実際は」

天使の住む場所ではなく、魔術を盛んに行うルクリア人が住む場所なのだ。

「違うよ。後でハジメさんに訊いたらね、それは誤解だって。ただ、天使様はボクたちニードイル王族が、神様の力を使う時に手助けをしてくれるんだって」

天使と神、それにニードイル王族。

他の王族とニードイル王族の根本的な違いは、その力を使えるか使えないかどうか。百年戦争を終わらせる事が出来たのは後者のみだからだ。

「そうなんだ。でも、何で兄さんはそんな誤解を？」

最初から話を聞いていれば、そんな誤解はしなかったし、ましてや今までに神という単語は何度か出てきたが、天使の説明はされなかったのだ。

「ほんととはキラさんに聞く前から、ルクリアの存在は知ってたの。パパとママがいったの、偶然聞いたから……キラさんも深くは教えてくれなかったし、ユウの誕生日までは勘違いしてたんだよ」

十七歳にしては幼さが残る口調で、ゆつくりとアマネは説明した。ユウだって分からなかった、彼の事情だ。どうして今頃になって教えてくれたのだろうか。ユウを少しでも好きだと、感じてくれるようになっただろうか。

「そういうことなら、納得できるかな」

それでも昔のような無邪気な笑顔を見せなくなったアマネからは、子供らしさが欠けている。

今でもアマネはキラが一番で、誰よりも慕う存在なのだ。

「兄さんは、やっぱりキラ先生が一番たいせつなの？」

兄弟での共通の話題が尽きてしまい、ユウは不安を打ち明けるようにキラの話題に突入する事にした。

アマネがどう言っても、覚悟はできているつもりだ。

「キラ先生は好きだよ。でもね、ボクも自立しなきゃいけないと思う。いつまでも甘えちゃだめなんだけど、でも……」

背中を向けたアマネの高い声が、風に流されるように、微かにしか聞こえなくなる。

さみしかったから。

確かにアマネはそう言った。両親を失ってから、彼は確かに一人きりだ。ユウも一応は弟だから頼る事も出来ない。

だから、アマネはキラに依存していた。何となく、今までそうだった理由が理解出来る。

「ユウ。君にさみしい思いさせてたの、知っててキラさんと一緒にいた。でも、それも甘えだって気づいたから……ごめんね」

アマネは泣きはしなかった。いや、泣きたくても泣けなくて、苦しんでいる様子である。ずっと感情変化を表さなかったから、泣き方も忘れてしまったのだろう。

しかし、そんなアマネを置いて、ユウの方が泣いてしまった。

「兄さん……」

兄がこうなってしまった今、弟がしっかりしないといけないのに、それでも泣き虫なユウは堪えられず、アマネに抱き付いた。

少しだけ小さいアマネは、肩に顔をうずめるのにちょうどよかった。

「がんばるから。ちゃんとニードイルの国を治めるから、ユウも一緒に暮らそう?」

「うん。俺も、兄さんを助けるよ。守るから」

胸の中で絡まった糸がひとつほどけた。アマネはユウもたいせつに思ってくれているという、たった少しの確信が出来たからだ。

周り 特にカイとメイジェスがうるさいが、そんな事は気にしていられない。無性に抱き締めたい気持ちに身体を支配してい

る。

数日後、九人はスタイト大陸に渡った。

スタイト大陸は地図を見せてもらったが、ルクリアで一番小さな大陸であり、同時に旧アヴェ二国の遺跡が多い場所でもあるようだ。しかし、船に乗ったかそれ以降くらいから、ハジメとキラが不機嫌そうな顔をしていて、お互いに一言も口を聞いていないようだ。

これからアディーフと戦うかも知れない状況だというのに、三大戦力の中の二人がこんな状態では話にならないのだ。

メイジェスやカイが仲を取り持って、何度か会話させようと試みたようだが、その努力も無駄のようで結局は口論に終わってしまう。例えば。

「なあ、ハジメとキラでカイを呼んで来てくれよ。確か海眺めてる筈だから。あ、これは命令だから」

まだ船に乗っていた一昨日の夜、ギスギスした二人とユウが部屋にいる中で、メイジェスが作戦を実行したのだった。

「いい加減にして下さい。幾ら貴方の命令でも……」

「おやおや、陛下の命令に逆らうなど、愚かな少将がいたものですねえ。僕が一人で行きましょう」

「……いや、俺が行く」

そんな会話を交わした後、我先にと主張するように張り合った二人は、そのままの状態で部屋を出て行った。

喧嘩の理由は分からなかったが、ちょうどアマネと打ち明ける事が出来た夜、何らかの言い合いになったらしく、そこから口を聞かなくなったようなのだ。

「あいつらってば、くだらない事で喧嘩してるよな。最初はキラのおやつのスコーンをハジメが食べたのが原因だったんだ」

それも大まかにメイジェスが説明してくれて、何とか事情を知る事が出来たのだ。

まず、メイジェスとカイとハジメが同じ部屋にいて、キラが自分

のティータイム用にその部屋に用意していたスコーンを、ハジメがひとつ食べてしまったらしい。それを部屋に帰って来たキラが見付けてしまったのが始まりのようだ。

「僕が苦勞して作ったスコーンが……」

「あー、悪い悪い。そこにあつたので、ついな」

「まあいいでしょう。……で、どうでした？」

「粉っばい。お前、ユウに作ってもらえ」

と、ここまではハジメが冗談っぽく言っただけで、喧嘩の炎は火の粉さえ付いていない状態だったようだ。

「他人の物を勝手に食べておいて、煩いですね。僕はこれでもリギン村の料理大会に出場したのですよ」

「だから何だ？ 失敗は失敗だ。それに、その件に関しては謝っているだろう？」

メイジエスによると、ここで二人は沈黙して睨み合っていたらしい。

ついでを言うと、この場面で彼はカイと顔を見合わせ、『怖い』という意思のコンタクトを取ったようだ。

「貴方は不器用過ぎるんですよ。僕やカイにはズバリと言うものの、いつまでもウジウジとしてユウ様に自分の思っている事を伝えられない、男として最低な弱虫なんですね」

「お前こそ、アマネにベタベタし過ぎだろ。その癖、他の女を誑かすし、お前に振り回されるアマネが可哀相過ぎると思わんか？」

「……ああ、そうですね。どうやら貴方とは考え方が合わないようです」

「奇遇だな。俺もそう思った」

大体の流れは、そんな会話で終わったのだとメイジエスは言う。当時の詳細な様子は分からないが、ハジメはどこからか何かを縛るためのロープを、キラはお仕置き用の鞭を持って睨み合っていた、と聞いた時にはさすがに引いた。

何故か最後はアマネとユウが話題に挙げられていたようだが、そ

れは何故だろう。あまり深く考えなかったが、どこか申し訳ない気持ちかがした。

「ユウ、お前をスパイに送る。さあ、あいつらを追跡しろ」

メイジエスに強制的に追跡するように押され、仕方なくユウはカイを呼びに行った彼らを追う事になったのだが。

ドアを開けると、凄まじい音が聞こえてきた。

「な、何だ!？」

即座にメイジエスがユウの腕を引いて走り、音の根源がある方向へと向かった。

カイがいるのは外の甲板だから、そこに行くまでにハジメとキラが喧嘩を始めたに違いないのだ。

駆け付けてみると、案の定二人は魔術の出し合いのような喧嘩をしていて、それが船を揺らしているようだ。その音でカイや他の人も駆け付けて来る。

「大体、お前がああ時に油断していたから、アディーフにやられたんだろうが! この変態タラシ野郎!」

「貴方だってユウ様を守るのをカイに押し付けて、勝手に倒れていただけですよ、ヘタレムツツリシヨタコン貴族さん?」

もはや最初の原因は関係なく、今までのお互いへの不満を引つ張っているだけの、言わば夫婦喧嘩のようだ。

罵り合いはまだいいものの、魔術が船を揺らすのが怖いのだ。

「ど、どうしたのでしょうか……」

船の操縦士を引き受けてくれたエインという男まで駆け付け、二人の様子を見てビクビクしてメイジエスに言った。

「お、エインか。困るだろ? あいつら、ずっと喧嘩してんだよ。俺やカイが止めても言う事聞かねえし」

そう言う彼も足を震わせ、全くその中に介入出来ない状況にあるようだ。カイも外野から色々と言葉を掛けているが、年下の言う事ととらえているからか、少しも耳を貸そうともしない。

それには女性陣も恐れるだけで、やや男勝りなディーブルでも一

歩引いているくらいである。

「キラ先生、ハジメさん、喧嘩はやめてください。迷惑だし、無意味です」

メイジエスらが沈黙したと思えば、アマネが一人で前に出て、きっぱりと言ったのだった。

「アマネ……」

声を揃えて言った後、それに自己嫌悪するようにお互いに睨み合い、そのまま近くにあった部屋へ別々に入って行った。

それからハジメとキラは口を聞く事をせず、食事中もギスギスした雰囲気、周りまでそれに気を遣っている状態である。

船から降りてエインと別れた今も、二人はお互いを無視し合っている。いい大人なのだから、いい加減やめてはくれないだろうか。

「取り敢えず、この港から南の方にダリア村という村があるから、そっちに泊まるうか。恐らくステンからの生き残りもいる筈だ」

メイジエスの提案で、ダリア村という場所に泊まるようになった。リギン村よりは人口の多いその村では、メイジエスやハジメが村に訪れたのが分かった途端、大勢で九人を囲んできた。

「メイジエス陛下！　生きておられましたか！」

軍人からの不支持で殺されかけたものの、国民からの支持は厚いように安心できる。

「ああ。生存者は如何ほどだ？」

「ステンからこちらに逃げて来たのが数百人ですが、トリジャに逃げた者もいます。それより、アディーフは旧アヴェエ二城で新生アヴェエ二国を創るつもりです！」

「何だと……？」

ステンにいた国民が残ってくれていた喜びは僅かで、やはりアディーフはあの側近に連れられてこちらに来たのだろうか。

だが、海を渡っているなら、何処かではち合わせてもおかしくないのだが。

「アディーフ達はアスカの機械で、海どころか空を渡って来ていま

す。陛下は死んだ、と言い張っていましたが……」

『アス力で造られる空が飛べる機械』と言えば、イエルドという飛行機能の付いた乗り物が唯一該当する。だが、イエルドはアス力にはあまり必要がないのと、莫大な費用が掛かるために大量生産はされていないと聞く。

「そうよね。外に出た筈なのに、私と会わなかったし。空から行つたんなら、恐らくイエルドね。大きい音を立てない最新の飛行機だし、あの時はルミイさんがいたからなあ……」

それでソラとアディーフ達会わず、更にルミイに絡まれていた事から、彼女がイエルドの存在に気付かなかったのも頷ける。

「ボクたちもレアニシティに着いてたから……気付けなかったよね」

「最初はまだしも、飛んだら上空に行くから鳥と間違えるんだよね。無理もないんじゃないか？」

それに詳しいカイが言うので、嘘ではないのだろう。

「ひとまず、今日はこの村でお休み下さい。船での長旅で疲れたでしょうから」

そう言つて、一人の村民がユウ達を宿まで案内してくれた。

途中の道には田んぼや畑や家畜の小屋が所々に見え、ここはリギン村と変わらない農村だという事が分かった。近くには山があり、故郷を思い出させる場所である。

羊達は村長に預けているが、この騒ぎが終わったらルクリアに連れて行こう。そこでまた羊達を育てて、父親の跡を継ぐのもいい。

ユウには王位継承権はないだろうから、アマネをキラと共に助けながら、のんびりと羊飼いとして生きて行くのも良さそうだ。

自分の将来が決まったような気がして、楽しい気持ちで歩いていた。

「楽しそうだな」

いつもそんなユウに声を掛けてくれるのは、憧憬を抱いている人彼は喧嘩している時とは別人のように、穏やかな表情を向けてく

れる。

「将来を考えていたんです。これが終わったら、ルクリアで羊飼いの仕事をしようかって」

「……そうか。その時は、俺にも手伝わせてくれるか？」

「はい！ 嬉しいです！」

これが終わったら、ハジメとは離れてしまおうと思っていたのだ。そんな中の彼からの申し出だから、嬉しいのは当然である。

宿はやはり男性と女性で分けられ、ここでもアマネは女部屋で寝る事になった。女性陣も彼なら問題にしないらしく、アマネ本人もそれでいいと言うのだ。

問題は、ハジメとキラが同じ部屋になってしまった事だ。

「あ、少しこの村ぶらぶらして来ようつと」

気まずい空気に耐え兼ねたのか、カイが部屋から出て行った。

部屋にはハジメとキラ、それにメイジエスとユウ、ユウのペットのパプリカだけが残っている。それでも先日のもあつてか、仲良くなつていく女性陣とは裏腹に男性陣は気まずくなつていくばかりである。

その次にメイジエスが立ち上がり、背伸びをした。

「俺、ちょっと立ち話してくるわ。ほら、ユウも来い」

腕を引つ張られたユウは、片腕でパプリカを抱いた状態で扉の外に出される。

何の用なんだろう。あの二人がああ状況でいるなら、ユウはそこで寝てやろうとさえ思っていたのに。

膨れていると、ドアのすぐ外でメイジエスに耳打ちされた。

「まあ、見てろつて。あいつらもう飽きてるぜ」

そう言つて、微かな音も立てずに扉を少し開け、中の様子を窺っている。ユウも同じようにメイジエスの下側に潜り込み、閉じ込められた二人の様子を眺めた。

最初は一瞬も目を合わせないものの、暫くすると何度かチラチラ

とお互いの事を意識するように視線を送っている。

その動作を何度も繰り返し返せばかりだが、早く仲直りして欲しいのが本望だ。彼らの息が合わなければ勝つ事は出来ないだろうし、こちらとしても気を遣ってしまう。

何時間経っただろうか。カイも帰って来て、一緒に覗くようになった。そろそろパプリカも、おとなしくしているのに耐えられなくなるのではないだろうか。

そう不安を抱えていると、いつもは寡黙なハジメが口を開いた。
「なあキラ」

喧嘩をしていた時はカイの過去の言葉を引用して『変態タラシ野郎』と呼んでいたのに対し、今はちゃんと本名で呼んでいる。

「何ですか、ハジメさん」

それに対して、キラも『ヘタレムツリシヨタコン貴族』とネーミングセンスのない呼び方で呼んでいたのが、やはり元の呼び方に戻っているのが分かった。

ユウ達は食い入るようにそれを見つめる。

「そろそろ飽きたんだが」

「奇遇ですね。僕もです」

今見ている男二人は、本当に大人なのだろうか。いつもは冷静でユウ達を引っ張ってくれる存在だったが、こんな時には子供っぽくなる。

「……………」

暫く沈黙したかと思うと、

「大人気なかったですね。ごめんなさい」

「俺も年上なのに、ムキになってすまなかったな」
「やっと仲直りしたか、と思った瞬間だった。」

「カイ、陛下、それにユウ様。そこにいるのは分かっていますよ。どうやらお仕置きされたいようですねえ」

「そのようだな」

仲が良くなった途端、サディスティック二人組はこれだから困る。

しかも例の戦闘時以外の武器をちゃんと装備してだ。

ハジメなんて、今まででお仕置きの素振りは見せなかったのに、感染してしまったのだろうか。

「ま、待てよ。あいつら主人には手を出せないだろ？　だとしたら

……」

カイは慌てたらしく、その先を言う前に自らの力で扉を押し、全開にしまった。

カイが危ない。ハジメはともかく、鬱憤が溜まっているキラはお仕置きのレベルが半端ではなさそうだ。

「ま、まあ、二人共、俺が言い出したことだから、処罰なら俺にどうぞ」

ハジメとは主従関係ではないので分からないが、キラなら恐らく許してくれるだろう。どちらにしろ、怖い方を避けられるのならそれに越した事はない。

「ユウ様に手は出しませんよ。ね、ハジメさん」

「あ、当たり前だ。子供に手を出してどうする」

渋々と道具をしまい、それで何とか一件落着いたようだ。子供扱いはいただけないが、それでもお仕置きを食らうよりはマシだ。

しかし、ハジメはあんな人だっただろうか。

その日は二人組が妙に仲が良く、またも違う風にメイジエスとカイは振り回されていた。

「お前ら、死ぬなよ」

ダリア村から旧アヴェニ城へ向かうため、メイジエスと守護役の二人は村に残し、ユウ達六人でアディーフへ挑む事が決定された。

「死にませんよ」

ハジメがそう言って踵を返すのと同時に、ユウ達も旧アヴェニ城や軍養成所がある、ダリア村から更に南東へと歩き出した。今日の夜には到着する予定のようだ。

ハジメとキラも仲直りが出来たので、やっとこのチームのベスト

コンディションで挑めるのだ。

歩いていると、頭に掴まっていたパプリカが騒ぎ出した。

「きゅうう！ きゅきゅきゅー！」

頭から肩を通り越し、ユウの前に着地したパプリカは遙か上空を仰いで嘴を開閉させている。

「ん？ 鳥だね。仲間に反応してるのかな？」

一羽の大きな鳥が空を舞い、ユウ達が向かっている方角の空へと消え去った。きっとそれを見て興奮したのだろう。

抱きかかえようと腰を降ろすと、パプリカはユウが肩から掛けているポシェットの中を探り始めた。

「な、何するの？」

中には大切なオカリナや道具が入っているから、嘴で突かれて傷でも付けられたら大変だ。

慌ててパプリカの小さな身体を持ち上げると、嘴に水色の物体を咥えていた。

「あっ……」

ここ数日間、返すのを忘れていたパジフィック三号機だ。

「あ。そう言えば、それってカイのよね？」

カイがパジフィックを落としたのはいつだったのかと言うと、アデーフとの戦闘前だったと答えられる。

拾って持ち主に会った後はすぐに戦闘で、それから色々あって思いつけずにいたのだ。

「失くしたかなって諦めてたけど、あつたんだな。サンキュー」

「ごめんね、渡すの忘れてて……」

「いいんだよ。ま、あつたら便利だけだな。こいつには盗撮機能付きの発信機があるんだ！」

カイにパジフィックを渡すと、サソリの尻尾の先端を取り外して見せてきた。

水色の小さな玉になっているそれには、クリップが付いており、誰かに付ける仕組みになっている。太陽に反射した小さなレンズも

見えた。

抱き上げたパプリカが光るそれを欲しそうに眺めていたが、彼に渡したらとんでもない事になりそうなので、暴れるパプリカを懸命に抱き留める。

「カイは何を盗撮するの？」

発信機は便利だからいい。しかし、盗撮は悪い事なのではないだろうか。

もしかしたら、カイには不純な動機があるのかも知れない。

「な、何にもしねえよ。ただ、便利かと思ってさ。ほら、この小さいのが映したのが、パジフィックの腹の画面に映るんだ。ま、ルクリア用じゃねえから、発信機は使えねえけどな」

「おやおや、誤魔化しましたね。本当ならソ……」

「だああ！ 言っんじゃねえよ！」

また始まった、と呆れながらカイとキラの会話を聞いていた。

キラの方が落ち着いて見えるが、年齢はたった二歳しか違わないのだ。話が合って、からかい合えるのも当然なのだ。

ユウもいつか、もう少し大人になったら、彼らのように个性的になるのだろうか。

「カイったら楽しそうねえ。男の子ってよく分からないんだけど、ユウちゃんも機械とか好きなの？」

自分が盗撮の対象にされているかも知れない事も知らず、ソラは微笑ましそうにカイとキラを眺めて言った。

彼女には男兄弟がいなし、城での生活で少し世間知らずな所もあるようだ。特に異性の情報は、カイやタク以外からは入手出来なかったのだろう。

「うっん。俺は田舎生まれだから、機械は使えないんだ。キラ先生も知識はあるけど機械は使えないし、機械も使えて魔術もできるカイはすごいと思うよ」

本心からそう思う。それ以外にも、カイは辛い事があっても前向きにユウ達に接してくれる。何よりいいムードメーカーだ。

カイの弟分になれて、本当に良かったと思えるのだ。

「カイはすごいよね。私にはないところ、たくさん持ってる……そういう人には憧れちゃうよ」

ソラは独り言のように、キラと戯れるカイの後ろ姿を見つめて呟いた。

自分の持っていないものを持つている人には、必然的に憧れを抱くものだろうか。しかし、ソラの抱く憧れは恋愛感情でもある。

だとしたら、ユウがハジメに抱く気持ちも、それと同じだと言えるだろうか。

確信したくない。今の関係を崩したくない。出来れば永遠に、気付かないふりをしなければ。

これ以上、ハジメと接触しない方がいいのかも知れない。冷却期間があれば、思春期の一瞬の感情だと解釈できる。

考え込んでパプリカを見つめて歩いていた。既に辺りは暗くなっている。

ぼんやりと雲に隠れている月が見え、ようやく夜だと認識する。

灯という灯は月と星の光だけで、それを頼りに歩くのも限界に近い。そろそろ野営になるのか、と思った矢先、何かが爆発する音が南東の方角から聞こえてきた。

あの方向には、確か。

「今の爆発音、何だ!？」

「オルデギアからだ」

「何だよそれ」

「旧アヴェ二城と軍養成所は、同時に旧首都のオルデギアにある。とにかく、行ってみるぞ」

ハジメが向かった方向に、はぐれないように付いて行った。

オルデギアという場所に旧アヴェ二城と軍養成所があるなら、アデーフがそこに新生アヴェ二国を創ろうとしているのも分かる。

暗闇に目が慣れてきた頃、闇夜に聳え立つ大きな城のシルエット

が、月影に照らされて浮かんで見えた。軍の施設らしき建物も見え、ここが目指していた旧アヴェニ城　オルデギアだという事を、身を持って実感したのだった。

しかし、軍養成施設前の見張り番はおらず、それどころかオルデギア自体が閑静としている。先ほどの大きな爆発音は何だったのだろう。

更に遠くを見ると、旧アヴェニ城だと思われる大きな城に、灯を持った兵士達が集まっているのだ。

「何かあったようだな」

「行ってみようぜ！」

六人は走ってその城の近くまで向かった。

城の中に入ろうと、ユウ達は急いだのだ。

兵士達はそれを許してはくれず、何十人もが一斉に立ち向かって来るため、六人の力では耐えられるのも時間の問題だろう。

ハジメが闇の魔術で一氣に何人をも切り付けても、キラが弓で的確に的を射抜いても、カイの炎やソラの雷、アマネやユウト、全員で掛かってもきりがない。

軍を潰すどころか、かえって仲間に怪我人を増やすだけである。

そんな暗闇の中、一瞬だけ辺りが闇に包まれ、明るい月の光さえも届かなくなった。

次にまばたきをした瞬間には、周りの兵士は一掃されていた。

ハジメの闇の力だろうか。だが、こんな強大な闇の力、出せるなら早めに出している筈だ。敵だと思ったらユウ達を真っ先に狙うだろう　　だとしたら、相手の検討もつけられない。

「アラタ……」

ハジメが目を見開き、ぽつりとそう呟いた。

「ハザイム。お前が憎きサノン族だったのは残念だ」

闇を切り裂いて現れる青年は、月に照らされる緑色の髪を揺らし、前髪を掻き分けてその右目に当てられた黒い眼帯を見せつける。

ニヤリと笑った左目は間違いなく、ハジメと同じ紅い瞳をしてい

た。

「ルミイがお前の後をつけて、人目がない時を見計らったら、ここに来る頃が最適だろうと思ったからな」

ルミイ　確か、ソラに絡んでいたナリユエ族の女の子だ。

上を向いて言ったアラタという青年の視線の先には、城の窓に足をぶらぶらさせる本人の姿がある。

「アレで僕を騙せたと思ってたにや？　調べさせてもらったによ。

その子がアマネで、僕達の欲しいものなんだにえん」

猫のような碎けた喋り方とは裏腹に、ルミイの目はひとつも笑ってはいなかった。

アマネを守らないと。あの夜からハジメと特訓はしているから、前よりはまだマシになっている筈だ。

ユウは身構えたが、彼らはアマネしか見ていない。

アマネの方に寄り、連れ去られないように抱き締める。ユウの力は微力かも知れないが、死んでも守らなければならぬ存在だ。

レイル族のためにも、アマネのためにも。

「ユウ、だいじょうぶだよ。ボクが行っても、何もならない。世界は変わらないよ」

そう小声で言ったアマネの表情は恐怖で怯えていて、瞳に光を宿していない。いつもより感情がむき出しだが、逆に彼を動揺させているだけなのだ。

《カリユダ》を持ってない事が知られると、殺されてしまうかも知れないのだ。彼だって、それくらいは考えているだろう。

強がらなくても、アマネは守るから。そう言いたくても言えない自分が悔しかった。

「アマネ、俺達に協力するなら、仲間が生かしておいてやる」

アラタがアマネとユウに近寄って来た、その時だった。

「カイ……」

何処からか聞いた覚えのある声が、城の中から聞こえてきた。

「あらら、まだ生きてたんだにや。殺したつもりだったにや」
呆れたようにルミイが言った。

カイの名前を呼んだのは、傷だらけのアディーフ　もうひとつの勢力の敵である。

「聞いてくれ……こいつらは、ルクリアをナリユエ族だけの国にしようとしているんだ」

「……レン、お前はと思う？　お前も同じ事、企んでた。間違った事してたって、分かるか？」

「今なら、な。だが、後悔しても、遅いのは分かる」

ふらふらの彼を真っ先に支えに行ったのはカイで、二人はそんな会話を交わしていた。本来なら許してはならない相手なのだ。

カイに支えられたアディーフは、手の中で何かを力チ力チと鳴らした後、急に手を止めて呟いた。

「どうやったらカイが喜んでくれるのか、お前の為に来る事も分かった。今は――」

もう一度、今度はすごく近くで爆発音が響いた。耳に残るそれは、アディーフの仕業なのだろうか。

爆発音は下の方から聞こえ、更に地震が起こったように地面が僅かに揺れる。ここは地上だから、地下が爆破されたのだろう。

今の爆発で、ナリユエ族側もさすがに焦ったようだ。

「ルミイ！　地下にはイツキがいた筈だ……！」

「で、でも、僕達が逃げなきゃ、また任務失敗だによ！　イツキには悪いけど、早くしないと！」

「くそっ！」

彼らの会話からして、地下にいたナリユエ族の仲間が爆発に巻き込まれたようである。あんな音を立てた爆発なら、死んでしまうのも無理はない。

アラタの方はその地下にいた仲間を大切に思っているのか、悔しそうな顔を見せ、その場でうなだれている。

「同志が死んで気付いた今、最後の力でお前らを助けてやる――」

カイから離れ、自らの足で再び立ち上がったアディーフは、剣を構えて前にゆつくりと歩いて行く。

彼は何故、カイをそこまで大切にしているのだろう。数日前に少し会っただけなのだ。普通はここまで執着出来る訳がない。

剣を持つてアラタに切り掛かって行っただ。

瞬時に闇の鎖のようなものがアディーフを包み、苦しむ声と共にアラタが嘲笑する。

「イツキを殺した分、苦しんで死ぬ。ソロモン様に認められた闇の力、せいぜい味わうがいい」

アラタの闇の力は、ハジメのそれよりも強大である。

目の前で苦しむアディーフを見て、それが目に焼き付けられた。アマネに見せないようにその目を覆うが、ユウもそれを見るのに耐えられなくなった。

闇の魔術は他の魔術で中和することは出来ず、カイも手に負えない状態で、ひたすらその光景を見ているしか出来なかった。

だが、ユウは光と闇が打ち消し合う事を知っていた。それはハジメとの特訓で、彼の強力な闇を微弱な光が弾いたからだ。

ユウが光のスロナを当てれば、彼は助かるだろうか。アマネを抱き締めたままオカリナを出し、術に集中する。

「ユウ、何をしている？ お前はまだ……」

ハジメが止めようとするが、既に遅かった。

ユウの強くなった力が、辺りの暗闇を明るい光に変え、アディーフを包む闇の力もそれによって中和される。体力の限界を感じて術を止めようとするが、光の力は弱まる事を知らず、ひたすら闇夜を照らしていた。

瞼の裏からでも分かるような、強く温い光。誰もが反射的に目を閉じるだろう。

術が終わった頃には、ユウの膝は自然に地に着いていた。

「光の力を持ったガキがいたとは、予想外だったな」

一歩、また一歩と踏み締め、アラタが近付いてくる。

ハジメやキラ、カイやソラにも戦う気力が残っていないのは、回復役のユウがよく知っている事だ。

「ユウは優しい子。……君みたいな弟を持てて、ほんとによかった」
脚が震えて動けないユウに、そつとしゃがみ込んでアマネは言った。彼が何を思っただろうと言ったのか、何を考えているのかが分かる。行かないで。アマネは悪くない。頭の中で言葉は浮かんでくるが、声が出せるほどの気力は残っていなかった。

アマネが立ち上がる。勇ましい　その小さな少年を見て印象づけられた。

「ボクが行けば、みんなを助けてくれる……？」

アラタとの交渉なんてしなくていい。ナリユエ族が信じられるかどうか分からないのに。

城の中から大型の鳥が飛んで来たかと思えば、アラタとアマネ、それにユウがいる場所へと近付いて来る。

もう、殆どが立って戦える状態ではない時、キラがアラタの肩を狙い、矢が貫いた。

「アマネは……僕が守ります」

「面白い奴だ」

鋭い氷の矢も、十分にスロナを構成出来ていない状態であり、貫いた後は雫となって消えていく。

間もなく、鳥の形をした物体が降りてきた。それは間違なく小型のイエルドで、アディーフ達が使っていたものと予測できる。

アラタは肩からの流血を気にも掛けず、アマネの腕を引いてそのイエルドに乗った。中にはルミイがいて、操縦席でポニーテールの女性が運転している。

手を伸ばしてアマネを引き戻そうとしても、もう這ってしか進む事の出来ないユウは、薄い意識の中で彼を見失った。

最後に振り向いたアマネの瞳からは、寂しさが消える事なく映し出されている。

「ジユン。シオンはどうした？」

「いない。恐らく、イツキと一緒に爆発に巻き込まれたのだろう」
「……そうか」

ちらりと振り向いたアラタは、再びユウ達に向けて手を翳した。
「あー、アラタったら、ソラたんには手加減してによ！」

「女は知らん。俺が殺したいのはハザイムとあのガキ、それにオツドアイのレイル族だけだ」

強い闇のスロナに覆われる。月の光も届かない、真っ暗な闇だ。息が出来ないくらいに苦しく、ここで死ぬのかとさえ感じた。

たいせつな人を守りきれなかった。ユウがあの場合で光の魔術を発動していなければ、時間稼ぎも出来てアラタは倒せたかも知れないのに。

薄れる意識の彼方、ナリユエ族とアマネを乗せたイエルドは、北東の方角に消えて行った。

もう終わりだ。旅も何もかも、ユウには何も残らなかった。アマネを守れなかった罰を背負って、この闇の中で消えればいい。

全てを諦めて、眠りに就こうと思っていた。身体が軽いから、既に死んでしまったのだろうか。

「ここで死ぬんじゃないやねえよ。仲間もアマネも無事だから、安心しな」
一筋の光が見える。天国は実在する？

いや、前に一度だけ、聞いた事のある声だ。

虚ろだった目を覚ますと、紫色の髪をした少年の腕の中にいた。

「だ……れ？」

やっと声を出せたが、身体がうまく動かない。軽いのは抱いてもらっているからなのだ。

「俺はシオン・イノセント。俺のユウちゃんを助けに来た」

シオン そうだ。彼とは以前トリジャで出会っていて、初対面でユウの「恋人」だと宣言し、頬にキスをして去ったナリユエ族の少年だ。

ナリユエ族の彼がユウを助けるのは何故だろう。

周りにはアマネ以外の仲間がいて、全員無事であるようだ。

ハジメとソラは守れなかったと途方に暮れるキラを慰め、そのすぐ隣りでカイが死にかけて消えそうなアディーフと何かを話している。

「レン、お前は変な奴だよ。何で数日前に会ったばかりの俺を守ろうとした？」

カイはあんな事をしたアディーフにも、死ぬ間際になると優しくった。

「十数年ほど、前だったか……將軍になってなかった俺は、アスカで一人の女を見付けた。名前はサナウミルド・メリア……」

細い息の中、消える身体で、アディーフはカイを求めているようだ。

「母さんか？ 母さんに会ったんだな？」

「そうだ。彼女と俺は恋に落ちた……ウミは美しかったな……だが、俺と一緒にいられなかったから、お前を残して自害した」

「母さんは、親父に捨てられたんじゃないのか？」

「それは少し違うな……だが、お前はシアンには似ず、初恋の相手と瓜二つだ。だから、愛しているんだ」

結局、アディーフのカイへの思いが、親子愛なのか恋愛感情なのかは分からないまま、それだけ言い残して消えてしまった。

「あいつ、カイってのに流れてきた闇を庇ったんだ。かなり好きだったみたいだな。助けた時も、カイの名前をずっと呼んでいた」

だが、シオンの言葉で改めて確信する。アディーフのカイへの気持ちは、やはり恋愛感情に近いものなのだと。

涙ぐむカイに、今度はソラが優しく肩を抱きにいく。

「シオン、そろそろ教えてよ。どうして俺のこと、恋人だなんて言っただの？」

今までにまともに話した事もなければ、見掛けた事もない人物に、どうして。

「俺がユウちゃんを愛してるから。あの時の事、本当に覚えてねえ

の？ 君を幸せにしたいって言っただろ」

誰よりも優しい目でユウを見ていてくれるシオンだが、本当に記憶がない。もし本当に、昔に将来を誓い合った仲ならば、それを思い出さなければ失礼だろう。

しかし、思い出しても思い出しても、蘇る記憶は平凡な日常だけだ。毎朝学校に行くか、遊びに行くか、それが自主的に両親の手伝いをしていたか　ユウの記憶は限られている。

「ごめんね。ホントに思い出せないんだ……シオン、許してくれるかな？」

それに、今はうまく頭が回転してくれない。

「仕方ねえなあ、ユウちゃんは」

そのためか、唇を奪われるとは、微塵も思っではいなかった。

「その代わり、ファーストキスは貰ったぜ？」

一瞬、ユウを含めた全員が凍り付いた。

アマネがさらわれたというのに、敵のナリユエ族と何という事をしたのだろう。ただでさえユウのせいなのに、皆が許してくれる筈がない。

ユウは焦って身体を起こしたが、シオンは幸せそうに笑っているので、とても邪険には扱えないのだ。

「あー、そうそう。これからお前らはどうするつもりだ？」

何事もなかったかのように、シオンは話を本題に戻した。

彼こそ、ナリユエ族の本拠地に戻らなくていいのだろうか。

「……当然、アマネを助けに行きます。しかし、貴方はどうして僕達を？」

キラも他のメンバーも、シオンをまだ疑っているようだ。ユウにはどうしても疑う気にはなれないが、先ほどまで戦っていて、それもアマネをさらったナリユエ族の仲間なのだから、そうなるのも無理はないだろう。

「俺はユウちゃんの助けになりたいだけだし、両親を殺したサノン族を追って、都合がいいからソロモン様に従ってるだけだ。ナリユ

工族だけの国なんて、ユウちゃんがいらないんじゃないぜ
起き上がるユウを抱き締め、無邪気にシオンは言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5703c/>

光と闇と聖なる力

2010年10月28日05時14分発行